GTU LIBRARY
3 2400 00559 6436

神塚藏書

DATE DUE

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
For renewals call (510) 649-2500

All items are subject to recall.

内村鑑三著（第五版）

基督再臨問題講演集

四六判二四八頁
定價六十錢
送料七錢

著者が基督再臨を唱導してより我國基督教界の新聞雜誌にして其主なる者は盡く反對を表した、『新人』、『六合雜誌』、『基督教世界』、『神學評論』、『文明評論』、『哲學雜誌』盡く反對である、之に反して『萬朝報』、『國民新聞』、『朝日新聞』等普通の新聞が敬意を以て此信仰を迎へたるは注意すべき事である何れにしろ之が基督教界を兩斷するの刃となりし事丈は確實である、今や第五版新たに成る、自他研究の用に便ぜられん事を望む。

發行所　東京市神田區南神保町十六　岩波書店
電話本局｛一一四〇　三六八八
振替東京二六二四〇

內村鑑三著書

聖書研究社發兌　東京市外柏木九一九

- 研究十年　定價一圓五十錢　送料十錢
- 舊約十年　一圓二十錢　十錢
- 感想十年　一圓五十錢　十錢
- 所感十年　一圓五十錢　十錢
- 基督教問答　五十錢　六錢
- 復活と來世　五十錢　四錢
- デンマルクの話　六錢　二錢
- 洪水以前記　十五錢　二錢
- 保羅の復活論　十五錢　二錢
- 歡喜と希望　二十錢　二錢
- 近代に於ける科學的思想の變遷　十錢　二錢
- 基督再臨問題講演集　六十錢　六錢
　——岩波書店發兌——

警醒社書店發兌　東京京橋尾張町二丁目

- 宗教と現世　定價一圓三十錢　送料十錢
- 地人論　六十錢　六錢
- 後世への最大遺物　十八錢　二錢
- 基督信徒の慰　三十錢　四錢
- 傳道の精神　二十五錢　四錢
- 求安錄　六十錢　四錢
- 愛吟　二十錢　二錢
- 余は如何にして基督信徒となりしか（英文）　七十錢　四錢
- 宗教座談　四十錢　四錢
- 宗教と文學　二十錢　四錢
- 警世雜著　四十錢　八錢
- 代表的日本人（英文）　重版中

內村鑑三主筆

聖書之研究

世界唯一の書なる基督教聖書の研究を目的とする雜誌なり、然かも教會又は外國宣教師とは何等の關係なし、純然たる日本人の信仰を傳ふ、智的ならず、靈的なり、而かも知識を重んじ、深遠なる宇宙の觀察の上に確乎たる信仰を築かんと努む、キリストの神性、聖書の神權、身體の復活、キリストの再臨を說いて憚らず、創刊以來二十年に達す、誠實なる讀者を海の內外に有す、毎月一回十日發行、一冊に付き金貳拾五錢、一年分（十二冊）金貳圓五拾錢、郵税を要せず、すべて前金の事。

發行所 東京府下豐多摩郡淀橋柏木九一九番地 聖書研究社

振替東京七四九八

大正八年十二月五日印刷
大正八年十二月八日發行
大正八年十二月十日再版發行

信仰日記奥付

定價壹圓參拾錢

版權所有

著者　東京府豊多摩郡淀橋町柏木九一九番地　内村鑑三

發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　中田福三郎

發行所　東京市神田區南神保町十六　岩波書店
電話本局一一四〇　三六八八
振替東京二六二四〇

秀英舍第一工場印刷

我は人の我に就いて知らんことを求めない、
我は唯家にありて強き良き桶を作る。

三、月は滿ちて又虧ける、
歳は去りて又來たる、
世は變り行くも我は變らない、
我は家に在りて良き桶を作る。

四、我は政治の故を以て人と爭はない、
我宗教を人に強ひんと爲ない、
我は唯良き強き桶を作りて、
獨り立て甚だ安泰である。

附録　歌こゝろ　終

桶職

二月某日、余れ一日の閑を得たれば杖を三浦半島に曳けり、時に相模灣を隔てゝ富士山の美貌を望む邊に、一人の桶職の家に在りて其業に勵むを見たり、都會人士の益なき野心に驅られて騒然たるに對し、彼の靜肅なる勤勉の欽ぶべくありければ、彼の心を歌はんとて歩を運びながら左の一篇を口ずさびぬ。

一、我は唯桶を作る事を知る、
其他の事を知らない、
政治を知らない、宗教を知らない、
唯善き桶を作る事を知る。

二、我は我桶を賣らんとて外に行かない、
人は我桶を買はんとて我許に來る、

珈琲豆の芳香鋭く、
玉蜀黍の黄金輝く。

三、エスペランザ、希望の野、
我が敎友の集まる所、
我が理想の行はるゝ所、
自由と獨立の鄕。

四、エスペランザ、希望の野、
新大陸の新日本、
聖書は鋤を助けて、
天は地と接吻す。

エスペランザ

在墨其西哥國エスクイントラ高田政助氏よりの書面の一節に曰く「最上の土地三百町歩貰ひ受け候・・・農場の名をEsperanza（希望）と名附け申候、先年先生の『研究』誌が『新希望』と改題になりし時、小生は同志に向ひ、もし未來に於て農場を建る時には『希望農場』と名附けんと申居り候處、幸にも愈々此度其運びに向ひ大に喜び居候」云々と。

一、エスペランザ、希望の野、
墨其西哥の南方に在り、
ソコヌスコの峯高く、
大平洋の水闊し。

二、エスペランザ、希望の野、
護謨樹の汁滴り、

イエスを思うて

一、イエスを思うて我は
我が貧しきも悲しからず、
他人の富めるも羨しからず、
イエスを思うて我は
唯感謝に溢るゝのみ。

二、イエスを思うて我は
身の患難（わざはひ）も苦しからず、
其の幸福（さいはひ）も慕（した）はしからず、
イエスを思うて我に
唯平康（やすき）と滿足とのみ有り。

三、イエスを思うて我は
事の失敗に失望せず、
其の成功に雀躍せず、
イエスを思うて我は
永久の勝利者たるなり。

二月中旬

風はまだ寒くある、
土はまだ堅く凍る、
青きは未だ野を飾らない、
清きは未だ空に響かない、
冬は未だ我等を去らない、
彼の威力は今尚ほ我等を壓する。

然れど日は稍々長くなつた、
溫かき風は時には來る、
芹は泉のほとりに生えて、
魚は時々巣を出て遊ぶ、
冬の威力はすでに挫けた、
春の到來は遠くはない。

春は來りつゝある

雪は降りつゝある、
然し春は來りつゝある、
寒さは強くある、
然し春は來りつゝある、
春は來りつゝある、
春は來りつゝある、
雪の降るにも拘らず、
寒さの強きにも拘らず、
春は來りつゝある。

慰めよ、苦める友よ、
汝の患難多きにも拘らず、
汝の苦痛強きにも拘らず、
春は汝にもまた來りつゝある。

陸中花巻の十二月二十日

一、外には雪は二尺餘り、
寒氣は膚を劈くばかり、
北上の水は浩々と流れ、
岩手の峰は遙々と聳ゆ。

二、內には同志は四十餘り、
歡喜は胸に溢るゝばかり、
讃美の歌は洋々と擧り、
感謝の聲は咽々と聞ゆ。

三、嗚呼美はしき此集合、
聖靈は奥羽の野に下れり、
我儕は深雪の中に在て
榮光の天國に居る乎と想へり。

其日其時を我は知らず、
然れども知る必ず或る時、
我が希望(のぞみ)は悉(こと〴〵)く充たされ、
我が涙(なみだ)は盡く拭(ぬぐ)はるゝことを。

其日其時を我は知らず、
我は又之を知らんと欲せず、
我は聖父(ちゝ)の約束(やくそく)を信ず、
我は安靜(しづか)に其日の到るを待つ。

＊　＊　＊　＊

『其日其時』

其日其時を知る者は唯我父のみ、天の使者も誰も知る者なし。
（馬太傳廿四章卅六節）

其日其時を我は知らず、
然れども知る必ず或る時、
我は面と面を合せて彼を見、
我が知らるゝ如く彼を知らん事を。

其日其時を我は知らず、
然れども知る必ず或る時、
我は再たび我が愛する者と會ひ、
復た死あらず哀哭悲痛ある事なきを。

長門秋吉の產、
友人の愛に刻まる、
再だ會ふ日までの碑。

日は富士の巓に入り、
月は欅の枝に懸る、
椋鳥は鳥栖に歸りて、
夕暮の霞低し。

殘るは父母と弟、
静かに眠る地下の彼女、
祈る天上の祝福、
望む再會の歡喜。

建碑

ルツ子の墓碑成る、友人の寄贈にかゝる、我家不相應の墓石なり、本間俊平君、其所有の石山より最良の大理石を採掘し入費と勞力とを惜まず、之に加工せられし者なり、『再た會ふ日まで』の碑と稱す、逝きし者の榮光、殘りし者の慰藉、多數の友人の同情を記めて、永へに信、愛、望の記念として存すべし、大正三年十二月十一日、遺族三人其の前に於て簡單なる建碑の式を行ふ。

武藏野の眞中、
女郎花の咲く所、
雜司ケ谷の森に、
我がルツ子は眠る。
大理石の三塊、

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又來りけり、
我等は此所に之を守り、
彼女は彼所に之を祝ふ。

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又來りけり、
我等に耐え難き悲痛あり、
又言盡されぬ歡喜あり。

*

*

*

*

*

今年のクリスマス

（大正元年ルツ子逝きて當年のクリスマス）

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又來りけり、
而も今年のクリスマスは、
去年のそれの如くならず。

クリスマス、クリスマス、
クリスマスは又來りけり、
樂かりし一群の小羊は、
今は別れて二所に在り。

天の記錄に一人の名は殖えた、
三度の食時に空席は出來たが、
殘る三人はより親しく成つた、
彼女は今は我等の裏に居る、
一人は三人を縛る愛の絆となつた。
然し我等は何時までも斯くあるのではない、
我等は後に又前の如くに四人に成るのである、
神の鈲の鳴り響く時、
寢れる者が皆な起き上る時、
主が再たび此地に臨り給ふ時、
新らしきエルサレムが天より降る時、
我等は再たび四人に成るのである。

自詠

我等は四人である（ヘルツ子逝きて後に）

我等は四人であつた、
而して今尚ほ四人である、
戸籍帳簿に一人の名は消え、
四角の食臺の一方は空しく、
四部合奏の一部は缺けて、
讃美の調子は亂されしと雖も、
而かも我等は今尚ほ四人である。
我等は今尚ほ四人である、
地の帳簿に一人の名は消えて、

生命と氣息とを賜ふ神よ、
我は汝の恩惠に賴る、
我れ榮ゆる時も衰ふる時も
汝の屬として我を護れよ。

今年の秋

（大正元年の晩秋ルツ子永眠當年）

我家の庭の白百合散りてより
一しほ淋し秋の夕暮

「シロアムの細流」

"By Cool Siloam's Shady Rill."

涼しきシロアムの細流に沿うて
如何に美しく百合花は咲くよ。
露けきシャロンの小山を拂ふ
微風は如何に香はしきかな。

涼しきシロアムの細流に沿ふる
百合花は終に衰へざるを得ず、
シャロンの小山の裾に生ふる
薔薇花は終に凋まざるを得ず。

憂愁は洪水の如くに來れ、
苦悶は暴風の如くに荒れよ、
我はたゞ我家に着かんことを、
我神、我國、我が諸凡に至らんことを。

其處に天の靜かなる海に
我は我が疲れし靈を浴せん、
而して配慮の漣波すらも
我が靜かなる胸を亂さじ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

天國を望む

アイザック・ワット作

我れ天の第宅に入るの
我が特權を確めらゝ時に、
我はすべての恐怖に暇を告げ、
我が流るゝ涙を拭はん。

縱へ全地は我に逆ひて立ち、
石火の槍を我に投ぐるも、
我はサタンの激怒を笑ひ、
我は恚れる世に向はん。

永久の戶よ、主のために開け」、
此榮光の主を誰と做すか、
榮光と權威を有ち給ふ主にして、
聖徒の王亦天使の君なる
永久に頌むべき萬物の神なり。

（詩篇第二十四篇七―十節に依る）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

或時嵐山の櫻を見て

三年へし心の痍は癒やらで
花咲く每に痛み出るかな

今、金色の門門を除けよ、
廣く清空の宮を開けよ、
主は今其殿に還り給へり、
謹んで榮光の君を受けまつれ、
此榮光の君を誰と做すか、
諸て我等の敵を服へし主にして、
世と罪と死と陰府とに勝ち給ひし
イエスと稱へまつる勝利の君なり。

看よ其凱旋の車は待ち、
天使は清き節を奏す、
「汝の首を擧げよ、天の門よ、

主は甦り給へり

"Our Lord is Risen from the Dead"

チヤーレス・ウエスレー作

我等の主は死より甦へり給へり、
我等のイエスは天に昇り給へり、
陰府の權者は擒にせられ、
天の門にまで引かれて行きぬ、
其處には凱旋の車は待ち、
天使は淸き節を奏せり、
「汝の首を擧げよ、天の門よ、
永久の戸よ、主のために開け」。

特に此身を惠みけん。

此日此身を、我が神よ、
活ける犧牲とし受け給へ、
我と我等を惠みてぞ
ペンテコステの火を降せ。

美作傳道よりの歸途

我が心はりまが灘や茅渟の海
めぐみに光る淡路しま山

ペンテコステの歌

明治三十五年七月三十一日講談會開催中園遊會の日、霖雨霽れ、久振にて日光を仰ぐ、時に我が同志中心に新光明に接せし者多きを想ひ、彼等の歡を我が心に移して左の一詩を賦す。

霖雨の空は霽れにけり、
日の太陽は照りにけり、
神は此日を祝しけん、
特に此日を祝しけん。

疑團の雲は晴れにけり、
義の太陽は昇りけり、
神は此身を惠みけん、

五、悲哀、苦痛、勞苦を離れ
罪の縲紲を去り、
永久限りなき國に
全き平和を樂まんと欲す。

病後の歡喜

雪の間を病の床に打臥して
覺むれば嬉し愛の春雨

恐怖も希望も皆一なり。

三、我儕は相互の憂愁を頒ち、
我儕は相互の重荷を擔ふ、
而して時々相互のために、
熱き同情の涙を流す。

四、我儕互に相別れんとする時
衷に耐へ難き苦痛あり、
然れど心の中に結ばれて、
我儕は再び相會はんと欲す。

キリスト信徒の交際

("Blest be the tie that binds" の意譯)

我れ爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし(約翰傳十三章卅五節)。

一、我儕の心をキリストの愛に
繫ぐ其索は祝すべきかな、
斯く繫がれし者の交際は
天のそれに然も似たり。

二、我儕の天父の寶座の前に
我儕は熱き祈禱を捧ぐ、
我儕の憂慮も慰藉も、

然も今は擇まれて神の子となれり、
　宮殿と王衣と王冠との相續人となれり。
　　我は王の子なり、王の子なり、
　イエスを救主とし有て我は王の子なり。

然らば小屋たり、天幕たり、我れ何ぞ擇まん、
　我がために天上に玉殿の造られつゝあるあり、
今は家鄕より離れて此地に漂流ふも
　我は歌て進まん、我は王の子なりと。
　　我は王の子なり、王の子なり、
　イエスを救主とし有て我は王の子なり。

我は王の子なり、王の子なり、
イエスを救主として我は王の子なり、

人類の救主なる我が父の獨子は
一度は此世に在りて貧者に在しき、
而かも彼は今は天上に在て王なり、
彼は久しからずして我をその宮殿に迎へ給ふ。
我は王の子なり、王の子なり、
イエスを救主として我は王の子なり。

我も一度は世に捨てられし漂流人なりき、
自ら好んで罪人たり、生れながらの異邦人なりき、

『我は王の子なり』

"I'm the child of king"

此歌りバイバル用の讃美歌なるが故に其思想高からずと雖も、而かも其中に一片の眞情の存するありて、貧に苦められ、定住の家屋なくして世に彷徨ひし時、余を慰めしこと其幾回なるを知らず、余は未だ其作者の何人なるを知らず、知る者あらば幸に之を敎へられよ。

イスラエルは己を造り給ひし者を喜び、シオンの子等は己が王の故によりて樂むべし。

（詩篇百四十九篇二節）

我が父は家屋と土地とを夥多有ち給ふ、
彼は其手に世界の富を握り給ふ、
紅玉と金剛石と金と銀とを以て
彼の金庫は溢る、彼の富に際限なし。

此身有の儘に、渠の惜氣なき爾の愛の
廣さ、長さ、深さ、高さを實驗んために――
暫時此地に於て、後に彼處に於て――
アヽ、神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

春の曙

天地も搖ぐラッパの一聲に
更生るらむ春の曙

又我が凡ての要求を爾に由て充たされんがために、
ア、神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

此身有の儘を爾は受け給ふならん、
歡んで我を迎へ、赦し、潔め、助け給ふならん、
我は唯だ爾の約束其儘を信じつゝ、
ア、神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

此身有の儘に、爾の限りなき愛は
我が爾に到るの凡ての障害を取り排ひたれば、
今爾の所有たらんために、然り、惟り爾の所有たらんために、
ア、神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

此身有の儘に、躊躇することなく、
我が心より罪の斑の悉く取去られん時を待つことなく、
爾の血は總の汚穢を洗ひ潔め得れば、
アヽ神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

此身有の儘に、暴風に打たれつゝも、
心に猶ほ多くの疑團と苦悶とを存し
恐怖と爭闘、内と外より我を惱めつゝあるも
アヽ神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

此身有の儘に、盲目の憐むべき我は
爾に癒されて我が眼を開かれんために、

『此身有の儘に』

"Just as I am, without one plea"

英國シャーロット・エリオット女史の作なり、身の汚穢に恥ぢ、又は心の疑團に遮られてキリストに來り得ざる者を助け勵まして偉大の功を奏せし歌なり、余も幾回かキリストを離れ、余の心に彼を見失ひ、信仰の綱の切れんとせし時に此歌を口にして大膽に彼の許に還り來れり、實に誠に彼の血は惱める良心を癒すための唯一の醫藥なり、世の哲學者は此事を曉り得ざらん、然れども我等癒されし者は其特功を信じて疑はず。

此身有の儘に、一言の申譯なく
唯爾の血が我がために流されしてふ一事を以て、
又爾が我に爾に來らんことを命じ給ふが故に、
ア、神の羔よ、我は大膽に爾の許に到る。

我を洗へよ、我れ死なんとす。

我れ此生氣を引き取らんとする時、
我の瞼の閉んとする時、
我れ見ぬ世に逝らんとする時、
審判の聖座に爾を見る時
世々の磐よ、我を圍みて
我を爾の間に匿せよ。

我の手の業如何に多きも
律法の要求に應ずる能はず、
我の熱心休む時なきも
我の涙は流れ盡ずも
我の罪をば贖ふ能はず、
君若し我を救ひ給はずば。

何の功績我にあるなし、
只十字架にのみ我は縋る、
裸躰なるまゝ爾に到り、
援助なきまゝ爾を仰ぐ、
穢れたるまゝ泉に走る、

只此靈魂の聲あるのみ、去る明治二十四年櫻花爛熳として都城を飾る頃先愛内村加壽子が彼女の夫が逆臣國賊として國人に窘しめらるゝの聲を聞き乍ら悲しき眠に就きし時、彼女の枕邊に於て余と余の父とが聲を合して歌ひし者は此歌なりき、理論の達し得ざる所に信仰は達す、吾等神の審判の前に立つ時に只此讃美歌あるのみ、玆に余の意譯を掲ぐ。

世々の磐よ我を圍めよ、
我を爾の間に匿せよ、
爾の脇より流れ出し
血潮と水とは我の罪を
贖ふ二倍の代價となりて
責と科より我を救へよ。

『世々の磐』

余の學びし最初の讃美歌にして、亦た最も好く救拯に關する余の信仰を表はす者なり、原文はRock of Agesを以て始まり、「われたる岩や」又は「千世へし岩よ」と譯されて我邦の信徒間に歌はる、英人トプラデーの作にして彼の名は此讃美歌と共に廣く世界に知らる、蓋しカルビン主義の信仰を代表する者にして此歌の如きは他にあるなけむ、英國前宰相グラッドストンが死に瀕して彼の愛孫と偕に彼の病床に在て唱へしものは此歌なりき、人の救濟は其品性に因ると云ふ者、我等はキリストに眞似て初めて救はるゝを得べしと言ふ者、吾等は此世に於て完全の域に到達するを得と唱ふる者に對して、此歌は明白に十字架上の贖罪を聲言する者なり、ユニテリヤンの徒は勿論此歌に深き興味を感ずる能はず、メソヂストの徒、亦此讃美歌に賛同を表する能はざるべし、然れども幾千の痛める靈魂は此一小歌にギリアデの乳香（耶利米亞記八章二二節）を發見したり、幾萬の懼れたる心は此歌を唱へながら安き永き眠に就けり、學說討論は强健榮華の時に用あらん、然れども吾等主に在りて眠らんとする時に

て歌ふ能はず、唯時々感に充つる時は僅に聲を含んで獨り之を口中に唱ふるのみ、余の靈は音樂を感ず、然れども余の口は之を謠ふ能はず、余は靈と誠を以て神を拜する外、彼を讃美するの術を知らず。

然れども既に恩惠に浴する者、余にも亦特愛の讃美歌なからざらむや、而して余にして若し其樂を傳へ得ずんば余は其意義を傳ふるを得べし、今や和文に譯せられし讃美歌尠からずと雖も樂譜に合せんと欲して字音を限りし爲めに原意の充分に傳へられし者未だ曾て有るなし、余は此事を憂ふる久し、曾て『愛吟』を著して此缺乏の一部分を補はんとしたりしが、今亦玆に其志望を續け、余の特愛の讃美歌を世に紹介せんと欲す、然れども意味深長なると余の筆の鈍きとは以て余をして余の感じ得る丈けをも讀者に通じ能はざらしむ、然れども爲すは爲さゞるに優るべし、讀者乞ふ余の意を諒せよ。

パウロとシラスとはピリピの獄舍に在りて亦神を讃美せり、而してハレルヤ、アーメンハレルヤは世界が終結を告る時の讃美の聲なりと云ふ(默示錄十九章)、天に明星の始めて輝きし時に天使は神に讃美を唱へ、地に惡魔の頭の碎かるゝ時に聖徒は讃美の聲を揚ぐ、基督教は歡喜の宗教なり、歡喜の宗教は讃美の宗教なり、讃美歌なくして基督教あるなし、基督教其物を一大讃美歌と見て可なり。聖書以外に亦讃美歌多し、基督信徒の在る所に必ず讃美歌あり、基督教在て讃美歌なきはなし、有名なる燭光歌(The Candlelight Hymn)と稱へらるゝ者は第二世紀の作なりと云ふ、Te Deum, Veni Creator Spiritus 等は中古の初より基督教會に傳へらる、而して今日吾人が有する所の讃美歌は數千を以て算ふるを得べし、今玆に其大略をも紹介する能はず。

余も亦幸にしてキリストを信ずるを得て、讃美歌なる靈魂の詞を少しく解するを得、亦時には之を語らざるを得ざりき、然れども樂感に乏しき余は歌はんと欲し

附して言ふ「讃美歌は基督信徒の靈魂の詞なり」と、彼等は天に入りて後は多分斯かる言葉を以て相共に語るならん。

讃美歌の數甚だ多し、其最も古きものは舊約聖書にあり、士師記第五章は女豫言者デボラの讃美歌なり、撒母耳前書第二章にサムエルの母ハナの讃美歌あり、同後書第一章に於けるヨナタンの死を歎けるダビデの哀歌も之を讃美歌として見るを得べし、詩篇百五十篇は皆な悉く讃美歌なり、哈巴谷の豫言は讃美歌を以て終る、約拿救濟に與りて亦讃美の聲を揚ぐ、若し夫れ舊約を去て新約に入らんには其初より終まで讃美歌にあらざるはなし、マリヤ聖子を胎内に受けて讃美を捧げ(路加傳一章四六より五五節まで)、ザカリヤ其子の生るゝを聞いて聖靈に感されて　た主なるイスラエルの神を讃美す(同六八より七六節まで)、天使聖子の降誕を告ぐるに讃美歌を以てし(二章十四節)、老いたるシメオン、イエスを見て嬰兒を抱きて神を讃美す(同二九より三二節まで)、イエスは晩餐席上に神を讃美し、

讃美歌

讃美歌は基督信徒の靈魂の聲なり、彼に特殊の心情あり、彼は之を普通の辭を以て言表はす能はず、之に意義あり、然れども意義のみは其情を通ずる能はず、之に音樂なかるべからず、然れども修飾のための音樂にあらず、特殊の意義と特殊の音樂とありて彼の心中の特殊の實驗は言表はさるゝなり、是れを稱してヒム(hymn)、又はサーム(psalm)と云ふ、ヒムは神を讃美するの歌にして、サームは總て之をチタラ(cithara 琴の一種)に合して謠ひし者を稱ふ、然れども之を讃歌と稱ふも或は琴歌と唱ふるも能く吾人の稱する讃美歌なる者の眞意を通ずる難し、讃美歌は必しも神を讃美するの歌にあらず、神に祈る者あり、亦神に苦痛を訴ふる者あり、基督信徒の悲喜哀樂は總てその讃美歌に現はる、故に余は之に定義を

恩惠と希望

過去に於ける彼の愛は
我をして思ふを禁ぜしむ、
彼は終に我を棄て給ひて
憂愁に沈ましめ給はんとは。

His love in time past
Forbids me to think
He'll leave me at last
In trouble to sink.

Anonymous.

再會の希望

今や泣く者は哭くべからず
其愛する者は失せしとも
再た會ふ日の歡喜の光に
其曇りし眼は晴れん。

（『獨逸小歌』の一節より譯す）

Now let the mourner grieve no more,
Though his beloved sleep,
A happier meeting shall restore
Their light to eyes that weep.

Englished from *Lyra Germanica*.

萬物悉く可なり

ロバート・ブラウニング作

年は春なり、
日は朝なり、
朝は七時なり、
山側は露に輝き、
雲雀は空に舞ひ、
蝸牛は叢林に戯る、
神は天に在り、
此世の萬事可なり。

The year's at the spring,
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in His heaven—
All's right with the world.

From "Pippa Passes"
by Robert Browning

夕暮の歌

ヲルヅヲス作

我が肩上の羽翼の動くを感ず、
然れども我れ尙ほ此處に止て遠く望めば、
輝々たる階段の天にまで達して、
之に到るの途を示すを見る。

FROM "EVENING ODE."

Wings at my shoulder seem to play,
But, rooted here, I stand and gaze,
On those bright steps that heavenward raise
Their practicable way.

William Wordsworth.

FROM " REVELATION "

I fear no more. The clouded face
Of nature smiles; through all her things
Of time and space and sense I trace
The moving of the Spirit's wings,
And hear the song of hope he sings.

J. G. Whittier.

我れ最早懼れず

ホキッチャー作

我れ最早懼れず、
曇りし白然の面影も今は笑を含みけり、
限りあるもの朽るもの、
眼に見ゆるもの、すべて皆な、
觸るゝ聖靈の羽音して、
希望の讃美唱へけり。

DEATH SONG

Joy! shipmate—joy!

(Pleas'd to my soul at death I cry;)

Our life is closed—our life begins;

The long, long anchorage we leave,

The ship is clear at last—she leaps!

She swiftly courses from the shore;

Joy! shipmate—joy!

Walt Whitman.

死に臨んで余の靈魂に告ぐ

ホイットマン作

歡べよ、同船の侶伴よ、歡べよ、
（余は喜んで死に臨んで余の靈魂に斯く告げぬ）、
我等の生命は終りぬ、我等の生命は始まりぬ、
永の、永の間の碇泊地を我等は去らんとす、
船は終に纜を斷り、我心は飛立つなり、
彼女は岸を離れて速かに進むなり、
歡べよ、同船の侶伴よ、歡べよ。

或人が此歌を評して曰うた、「余は近世の人にして斯かる凱旋の聲を揚げて彼世に入りし者の他にありしを知らず」と、是は死の聲ではない、榮轉の祝賀の聲である、讀者よ、諸君は斯かる希望を懷きたくないか。

FROM "THE TWO GRAVES."

'Tis a cruel creed, believe it not!
Death to the good is a milder lot.
They are here,—they are here,—that harmless pair,

* * * * * *

Patient, and peaceful, and passionless,
As seasons on seasons swiftly press,
They watch, and wait, and linger around,
Till the day when their bodies shall leave the ground.

W. Cullen Bryant.

復活の希望

（「三基の墓」の一節）

ブライアント作

是れ慘酷なる信仰なり、之を信ずる勿れ、
死は善人に取りては安き境遇なり、
彼等は此處にあり、かの辜なき夫妻は此處を離れず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

靜かに、忍んで、憤恚と怨恨なく、
年月駒の如くに速く走る間に、
彼等は且つ祈り且つ俟ちて此處を去らず、
彼等の肉體が地を離れて出で來るまで。

A PSALM OF LIFE.

Tell me not in mournful numbers,
 "Life is but an empty dream;"
For the soul is dead that slumbers,
 And things are not what they seem.

Life is real! Life is earnest!
 And the grave is not its goal:
"Dust thou art, to dust returnest,"
 Was not spoken of the soul.

Longfellow.

人生の詩

ロングフェロー作

我に告ぐる勿れ悲しき調子を以て、
人生は單に空しき夢なりと、
寢れる靈魂は死せるなり、
萬物眼に見ゆるが如くにあらざるなり。

人生は眞實なり、人生は眞面目なり、
而して墓は其終局にあらざるなり、
汝は塵なるが故に塵に歸るべしとは
靈魂に就て言はれしにあらざるなり。

THE FATHERLAND.

Where is the true man's fatherland?
  Is it where he by chance is born?
  Doth not the yearning spirit scorn
In such scant borders to be spanned?
O, yes! his fatherland must be
As the blue heaven wide and free!

Is it alone where freedom is,
  Where God is God and man is man?
  Doth he not claim a broader span
For the soul's love of home than this?
O, yes! his fatherland must be
As the blue heaven wide and free!

Where'er a human heart doth wear
  Joy's myrtle-wreath or sorrow's gyves,
  Where'er a human spirit strives
After a life more true and fair,
There is the true man's birthplace grand,
His is a world-wide fatherland!

Where'er a single slave doth pine,
  Where'er one man may help another,—
  Thank God for such a birthright, brother,—
That spot of earth is thine and mine!
There is the true man's birthplace grand,
His is a world-wide fatherland!

James R. Lowell.

人が人を助け得る所、
神に感謝せよ我兄弟よ、
地の其一點が我が有にして又汝の有なり、
其處に眞人の大なる故郷は存す、
是れ彼の世界大の祖國なり。

*　*　*　*　*　*　*

關東平原の小春

彩れる榎椋楢楓
かぎりなき野を覆ふ蒼穹

是よりも廣き區域を要むるに非ずや、
嗚呼、然り、彼の祖國は碧空の如くに
廣くして且つ自由ならざるべからず。

其那邊たるを問はず、人が其心に
歡喜の冠を着、悲哀の足械を穿く所、
其那邊たるを問はず、人の靈が
眞且つ美なる生涯を追求むる所、
其處に眞人の大なる故鄕は存す、
是れ彼の世界大の祖國なり。

一人の奴隷が泣き悲む所、

眞人の祖國

ローエル作

眞人の祖國は何處に在るや、
　彼が偶然に生れ來りし國なる乎、
　愛に焦るゝ彼の靈は
斯る境界に限らるゝを拒むに非ずや、
嗚呼然り、彼の祖國は碧空の如くに
廣くして且つ自由ならざるべからず。

　其は單に自由の存する所なる乎、
其は神が神にして人が人なる所なる乎、
彼が人を愛するの情は

TO THE FRINGED GENTIAN.

Thou blossom bright with autumn dew,
And coloured with the heaven's own blue,
That openest when the quiet light
Succeeds the keen and frosty night.

Thou comest not when violets lean
O'er wandering brooks and springs unseen,
Or columbines, in purple dressed,
Nod o'er the ground-bird's hidden nest.

Thou waitest late and com'st alone,
When woods are bare and birds are flown,
And frosts and shortening days portend
The aged year is near his end.

Then doth thy sweet and quiet eye
Look through its fringes to the sky,
Blue—blue—as if that sky let fall
A flower from its cerulean wall.

I would that thus, when I shall see
The hour of death draw near to me,
Hope, blossoming within my heart,
May look to heaven as I depart.

Wm. C. Bryant.

林は枯れて鳥は飛び去り、
霜と短き秋の日とが
　冬の近きを告ぐる時に來る。

其時汝の優しき靜かなる眼は
　紫の緣を擴げて空天を望む、
其碧きこと恰も碧き空天が
　其天井より花を落せしが如し。

余は望む余も亦汝の如くに、
　死の期が余に近づく時に、
希望は余の心の中に咲いて、
　天を望みつゝ世を逝らんことを。

紫龍膽に贈る

ブライアント作

汝、秋の露を以て輝く花よ、
空天の色を以て彩飾れて、
汝は皮膚にしみわたる寒き夜に
静かなる日が次いで來る時に開く。

汝は菫菜花が小川と泉の邊に
首を垂るゝ時に來らず、
又綫斗菜が紫衣を着て、
巣鳥の床に凭りかゝる時に開かず。

汝は待つこと久しくして獨り來る、

I E THFUL LORD.

Not seldom, clad in radiant vest,
  Deceitfully goes forth the morn;
Not seldom evening in the west
  Sinks smilingly forsworn.

The smoothest seas will sometimes prove,
  To the confiding bark, untrue;
And, if she trust the stars above,
  They can be treacherous too.

The umbrageous oak, in pomp outspread,
  Full oft, when storms the welkin rend,
Draws lightning down upon the head
  It promised to defend.

But thou art true, incarnate Lord,
  Who didst vouchsafe for man to die;
Thy smile is sure, thy plighted word
  No change can falsify!

I bent before thy gracious throne,
  And asked for peace on suppliant knee;
And peace was given,—nor peace alone,
  But faith sublimed to ecstasy!

William Wordsworth.

然れど爾は誠信なり肉に宿れる主よ、
謙遜りて人の爲に死せる者よ、
爾の微笑に譎詐なし、爾の約束は
世は變るとも變ることなし。

我は寶座の前に平伏し
單に爾に平康を乞へり、
而して平康のみならず
上向く確信は與へられたり。

最と滑かなる海も時には
　之に頼れる小舟を欺き、
若し天上の星を頼まば
　彼等も亦不實なることあり。

枝廣々と伸ぶる立木も
　電光蒼穹を劈く時は
其木影に身を寄する者を
　天火の難より護る能はず。

附錄歌こゝろ

翻譯

誠信なる主

ヲルヅヲス作

錦繡に纏はれて昇れる朝日は
却て其日の雨を釀し、
晴れ渡れる夕の空は
續く日和の兆候にあらず。

充實せる有効的生涯を送るであらう、無限の宇宙に放牧せらるゝ馬の如き者となりて自由に活潑に働くであらう、來らんとする秋の野に神の善き軍馬となりて勝を得んとて出行くであらう。

信仰日記　終

が我等の意志又は努力に由る者ならば不安極りなしである、「神は誠信なる者也」と示されて我等は初めて安心するのである。

八月二十五日（月）半晴　「うれひの雨は、夜のまにはれて、つきせぬよろこび朝日とかがやかん」、讃美歌第二百三十五番文字通りの朝であつた、獨り杖を曳いて茶臼山の中腹に添うて散歩した、多くの美はしき思想が胸中より湧出した、途に放牧の馬に對して厚き同情を表した、「自由なる友よ」と余は彼等に向つて言掛た、余も今日限りすべての束縛を脱して放牧の人となるであらう、一生懸命に聖書を學び之を教ふるの外何事も爲さぬであらう、他人の世話を焼かぬであらう、人生の小事に携はりて余の天職を空うしないであらう、小善を爲すに汲々として大善を怠るの愚を演じないであらう、嗚呼今に至つて此事に氣が附いて時期の甚だ遲れしを恨まざるを得ない、然し乍ら It is not too late to repent 悔改に適せざる時期とてはない、今より慧き人となりて滿ない事に貴き月日を費すを廢めて

は汚されざる天然有の儘の人の心を以て己が心と爲す者であるとの言を讀んで余も亦其意味に於て自分がデモクラットである事を表明せざるを得ない、二千三百年以前の希臘に於て眞且大なるデモクラットを見たのである。

八月二十三日(土)曇　本當の休日であつた、讀み且つ書き且つ寢る、ほかに何にも爲さなかつた、ザイス著『默示錄講義』第二卷を讀了つた、聖書知識の寶庫である、聖書は聖書を以てのみ完全に解釋し得る者である、ザイスの如きは其の意味に於て第一流の聖書學者である。

八月二十四日(日)半晴　時々驟雨、朝聖書小講演會を開いた、會する者二十名哥林多前書一章四―九節に就いて學んだ、「神は誠信なる者也」と、彼は變らざる者である、故に其善き聖旨を變へ給はない、彼れ我等を召して其子イエスキリストの交際に入れ給へり(九節)、故に其目的を達せずしては止み給はない、信者の救拯は神の誠信に由つて保證さるゝのである、故に安心である、若し我等の救拯

が判明る、希臘史並に希臘文學大に研究すべきであるとの感を禁じ得なかつた。

八月二十日(水)晴　留守居出來ず山へ行くこと能はず、田舎より迎へし一婦人の處置に就き尠からず心配した、神を信ずる者に取りては萬事が大問題である尠からざる靜思の妨害である、然し止むを得ない、斯の如くにして神と人生とに就いて益々深く學ぶのである。家の青年鳴尾の野球大試合より歸る、彼れの指導を受けし長野師範、神戸一中に破られ、殘念至極の體であつた、多少氣の毒であつた、然し野球は此位にして今より後は宇宙の大問題の研究に取掛つて貰はなければならない、余も今より彼れと共に學生に成り四十年の昔に還り再び天然科學の研究を始むる積りである。

八月二十一日(木)半晴　朝六時柏木を出で十二時また那須に來た。

八月二十二日(金)曇　山靜にして讀書に宜し、朝悲劇家ユーリピデスの藝術と思想とに就て學び大に共鳴する所があつた、眞正のデモクラット(民主々義者)

之れを顯はすべければ也」とある夫。日は「ヱホバの大なる日」卽ち神の子の再臨の日を指して云ふのである、此の一節の如き默示錄の光を以て讀んで初めて其意味が明かになるのである。

八月十九日(火)晴　思ひ掛けなき寄附がありたれば其半分を同志に頒ち、他の半分を以て丸善書店に行き聖書、哲學、文學、科學に關する書籍五六冊を買ひ求めて嬉しかつた、余は余の信仰を打壞すやうな强き議論を讀む事を好む、而して最も强い反對論は之を西洋人の内に求むべくして日本人の内に見當らない、而して亦西洋の學者には日本の學者に有るやうな厭味がない、故に反對論を讀んでも甚だ愉快である、近頃余が讀みし書にして最も面白く感ぜしは英國の碩學Gilbert Murry氏の著た『ユーリピデスと其時代』である、彼の雅典が强大に成りし理由を讀みし時に余は余の『興國史談』の續篇を書いて見たくなつた、「希臘人は彼斯人が王を尊ぶよりもより以上法律を貴ぶ」との言を聞いて希臘の偉大なりし理由

道師の地位は決して辛い者ではない、唯恐る傳道が餘りに樂になつて其熱心の消失せんことを、今や飢渇凍裸の患難絶えて余は信仰的に墮落しつゝあるのではあるまい乎、主よ余を棄て給ふ勿れ(コリント後書十一章廿七節參考)。

八月十七日(日)曇　朝小集會を今井館に於て開いた。不相變人生の小問題に就て尠からず心を惱ました、自己中心主義の今の世に在りて凡の人に對し平和を維持するは非常に困難である、斯かる場合に處して平和の生涯を送らんと欲せば成るべく簡易生活を營みて他人との關係を最小限度に止むべきである「汝等各自其隣人に心せよ、何れの兄弟も信ずる勿れ、兄弟は皆詐欺を爲し隣人は皆讒りまはれば也」とは實に今日の世の中である(ヱレミヤ記九章四節)、不愉快極なしである。

八月十八日(月)細雨　久振りにて少しく聖書の研究を爲した、哥林多前書三章十三節に關するエドワーヅ、マイヤーの註釋、大なる興味を以て讀んだ、「夫日

知ると同時に惡魔を知るの必要がある、彼の譎計、彼の奸策、能く之れを知悉し
て彼に打勝つことが出來る。

八月十五日（金）晴　正午山を發し、一時黒磯發汽車にて柏木の家に歸つた、鸚鵡ローラ不相變元氣で安心した、南米線安洋丸歸港、一等運轉士坂本榮尋ね來り、太平洋彼岸の情況に就き多く聞く所があり面白かつた、墨國加洲の諸友人より種々の珍奇き贈物あり有難かつた、清水繁太郎より送り來りし墨國土人の使用する湯沸し土瓶は殊に珍しかつた、之を以て土人飲料のチヨコレートを作りて飲むは興味多き事である、柏木に在りて世界の珍味を味ふの快樂は是れ亦特別である。

八月十六日（土）曇　急に冷氣催し平地に在る者の幸福、山に在る者の不幸である、英國オクスホードの友人より間着服地を送り來る、恐縮に耐へない、墨國より送られしチヨコレートを飲み英國より送られし羅紗を着る、是れでは獨立傳

む人は尠くないであらう。

八月十二日（火）晴　山を下る者多し、殘る者僅に五人甚だ靜寂である、讀書と編纂と筆錄能く捗る、新聞紙は英國リヴアプールに於ける暴徒の商店襲撃を傳ふ、「樂器店よりは幾臺かのピアノ引出され、掠奪者は街道にて音樂會を催したり」と、之は捩つた暴動である、人生、一面より之れを見ればすべてが喜劇である、笑ふは怒るよりも遙に增しである。

八月十三日（水）曇　讀書と散歩と雜談の外何事も爲さず、漸く場所に慣れて家に在るが如し、山中牛の步むを見て感じた、彼は强くして遲くある、重荷を負うて徐々と進む、我れも牛と成るであらう、「牛の步行の縱し遲くとも」、大責任を擔うて每日少しづゝ進むであらう。

八月十四日（木）雨　外出できず讀書と午睡に一日を費した、完全の休日である、昨日來同志と共に惡魔硏究を始めた、洵に興味多き題目である、我等は神を

（希伯來書十二章十一節）。

八月十日（日）晴　昨夜と今朝聖書講演小集會を開いた、昨夜はテモテ前書六章一―十一節、今朝はペテロ後書三章一―十三節に就て、來會者十五六名、「財を慕ふは諸の悪事の根なり」と云ひ、「末の日至らば嘲笑者出で來りて基督再臨の信仰を嘲けるべし」と云ふ、孰れも今日に適切なる問題であつた、樂しき好き安息日であつた。

八月十一日（月）晴　本當の休息である、少しく働いて多く眠る、杜鵑の聲涼しく、山百合花の香高く、駄句を弄び少女を笑はす、其他之れぞと云ふ用事なし。米國エルウイン白痴院長ドクトル・バーより手紙が届いた、三十五年間の舊き友人である、藤本醫學士に託して余に紫水晶入の指環を贈つたとの事である、優しきお醫者様なる哉、斯くして余も齢五十九歳にして初めて指環を嵌るべく餘義なくせられたのである、精神病學の世界的泰斗より寶石入りの指環を贈らるゝ余を羨

手紙三本書いた。

八月八日（金）晴　好き休養の一日であつた、エリヤ研究甚た面白かつた、舊約馬拉基書四章五節の意味が解つて非常に嬉しかつた、再臨信仰の鍵を以て聖書の寶庫に臨む時に新らしき物と舊き物とを其庫より取出すを得て愉快極まりなしである（馬太傳十三章五二節）。

八月九日（土）晴　昨夕驟雨あり今朝晴れ爽快極まりなし、鶯、杜鵑の聲溪谷に響いて我身はエデンの園に在るが如くに感ずる○余は余の生涯に於て多くの苦しい目に遭うた、然し其一つとして余を益せざる者は無かつた、多くの敵は起りて余を苦しめた、然し其一人として余を余の神に追ひやらない者は無かつた、敵と患難とは余が余の神に救はれんが爲めに必需ぬ者である、「凡の懲治今は（其當時は）悦ばしからず、反つて悲しと思はる、然れど之れに由りて鍛練する者には後に至りて、義の平康の果を結ばせり」とある聖書の言は文字通りに眞理である

全國に行渡つたであらう。夜空晴れ、半月濃藍色の蒼穹に懸り、星光輝々として碧玉に金剛石を鏤めしが如し、神の宇宙は元來斯の如き者である、之を下界に於て望むが故に其莊大純美は到底解らないのである。

來り觀よ那須野ヶ原の夏の月
深青玉の海に浮ぶ神鏡

八月六日（水）快晴 武總常野の風景を雙眸の内に收むるの所に在りて書を讀み筆を執る時に頭腦の能く働く事驚くべし、讀むものは盡く肉となり、書く者は盡く血となる、斯くて避暑は余に取りては損ではない得である。此日新潟の大橋正吉氏來り會す、外に横濱の坂田祐君あり、千葉の海保竹松氏ありて男女合せて十二名である。

八月七日（木）晴 教友五人と共に大丸溫泉に遊んだ、湯の川に浸り湯の瀧を浴び天然の子供と成つて樂しく遊んだ、面白き一日であつた、外に讀書少し許り

大教師を迎へたるが如くに感じ愉快極まりなしである、博士は神學者であるよりは寧ろ希臘學者であつてヒユーマニタリヤンである、故に彼の註解に心血の逆るが如き觀がある、彼は洵に人らしき基督教の先生である○何處よりともなく一尾の龜我門内に迷ひ込んだ、御幣擔をして言はしむれば是れ福祉我門に入れりと云ふであらう、然し我家の場合に於ては祝福既に裕に其上に宿るのであれば龜の入來りしは吉兆と云はんよりは寧ろ善證と稱すべきであらう、一日之を飼ひ置いて翌日放してやつた。

八月五日（火）晴　昨夜來暴風。朝八時主婦と共に那須へ向つて出發した、途中宇都宮に下車し、用を辨じ晝食を濟まし、三時黑磯着、四時過ぎ那須に着いた空氣淸凉、東京とは全然別世界である、東京に陰險人物の多いのは其重苦るしき空氣に由ると思ふ、斯かる所に都を定めしは思想上精神上大なる過誤であつた、寧ろ之を那須原野に置くべきであつた、然らばより淸き、より樂しき思想は日本

りしは當然の事である、同じく是れ「基督教界」である、二者孰れも余の居るべき所でない、然し長き年月の關係上、最後の決心を爲すまでに凡そ十日間を要した、實に辛かつた、然し余の採るべき途である、基督教界に於ては普通の不信者社會に於て行はるゝ普通道徳さへ行はれない場合がある、實に不愉快千萬である、然し止むを得ない。

八月四日（月）晴　久し振りにて日光を仰いで愉快であつた、對警醒社問題が滿足に余の心に解決せられて是れ亦終日愉快であつた、余は余の權利と利益を拋棄し余の反對者のそれを保護してイエスの弟子たる者の途を取つたと信ずる、勿論如何なる善事もすべて之を惡意に解するのが基督教界の常習であるが故に余の此行爲と雖も思ひもよらざる惡意に解せらるゝは覺悟の上である、然し乍ら自分の良心の歡諾を得て單獨で喜ぶ丈でも得である、教會の人等と爭ふ時は讓るのが唯一の途である〇英國より博士T・C・エドワーヅ著『哥林多前書註解』が達し

八月二日(土)雨　蒸熱し、昨日より職工の同盟罷工に由り東京中の諸新聞が揃て休刊し、玆に日本國に新聞紙ありて以來初めて見る奇觀が演ぜられた、人は言ふ燈火(ともしび)が消えしが如しと、然し新聞紙の無い事は決して大いなる不幸ではない；日々の世界の罪惡史を讀まされずして社會人心の之に由て汚されざる事甚大である、新聞紙の害は其益よりも遙に大である、新聞紙がなくなりて我等は却て平穩に一生を送る事が出來る、願ふ永久に新聞紙の休刊せん事を、然しさう余輩の註文通りには行くまい、困つたものである。

八月三日(日)曇　雨夕刻に至て漸く晴る、新聞紙は未だ出ず、朝今井館に於て小集會を開いた、路加傳十七章末節に就て講じ愉快であつた。警醒社書店へ『內村全集』發行中止を申込んだ、之にて一難題が解決せられて非常に氣持が好くなつた、余は到底余の著書を教會の人等と同一の書店より發行する事は出來ない、基督教靑年會より斷はられし余が自今警醒社書店に余の著書の發行を託せざるに至

は再び修羅場」を論ず、恐しき世界なる哉、國際聯盟成りしに由りて戰爭は歇みし筈なるに、其盟主たる米國が其友邦たる日本に向つて戰を挑むと云ふ次第である、假りにキリストは再臨し給はないとして、永久的平和は人に由て來らない事は確かである、聖書の言は其事だけでも眞理である。

八月一日(金)曇　霧深し、日光を見ざること玆に四日、甚だ不愉快である、讀書と手紙書きに半日を消費した、對警醒社事件を仲裁に附する事に決し其事を書送して心持が善くなつた、自分に關(かゝは)る事は自分には解らない、殊に疑心充溢する基督教界に於ては何事も惡意に解せらるゝが常なれば自分に關する事は第三者の判斷に任かすを以て上策とする、實に面倒(めんだう)なる事である。午後一時山を發し、三時半黑磯發の列車を取り八時少し前柏木の家に着いた、關東平原の北端より其中央まで半日にて達する事が出來る、廣き善き平原である、以て余の一生の活動區域となすに足る。

榮に比べて見て教會信者の誹謗の如き之を糞土視して可なりである。

七月三十日（水）雨　雨未だ歇まず霧深く甚だ鬱陶敷くある。『全集』第貳卷の校正が始つた、是れ亦隨分の仕事である。舊き信者の一人たる千葉縣木更津町の醫師牧野友藏氏よりの文通の一節に曰く「聖書之研究にて又講演にて福音宣傳（殊に主の再臨問題）被遊候爲め小生始め全國多數信徒は從來半圓形の福音を聞かされ候者が全圓形の福音に接して漸く歡喜と希望に滿ちたる信仰生活に入りて非常なる能力を賜はり傳道の精神潑溂と相成候間御悅び被下度候」と、常識の平信徒にして斯の如くに再臨の信仰を受くる者のある間は此信仰は粉碎し盡されたりと云ふ事は出來ない、余は神學者に呈する福音を有たない、然し乍ら平民の友として平民を援くるに足る福音は之を唱へざるを得ない。

七月三十一日（木）暴風雨　日光を見ざる事茲に三日、凄い程の大雨である、新聞紙は米國上院に於て日米戰爭論を盛に唱ふる議員あるを傳ふ、雜誌は「世界

日本人の寫眞といふのを見ると積重ねた書物の上に頬杖をついた長い顔が映つて居る、其下には和英兩文で『内村鑑三と其著書』と印刷してある云々」と、是れ實に余に取ては興味ある記事である、那須火山の麓に在て和蘭國アムステルダム郊外ブツサムの地に居住する尊敬する思想上の友人ドクトル・F・フアンエーデンが遙に余を思うて居て呉れる眞情有の儘を紙上に讀みて飛び立つ程嬉しかつた、フアンエーデン氏とは三四年前から文通して居る、彼は余の admirers の一人であつて余がそれ以上彼のアドマヤラーである事は勿論である、彼は廣く余の思想を歐洲人に紹介して呉れた、彼は大學者であるが小兒の如き謙遜なる人である、母君と共にアムステルダム市郊外生活をして居るらしい、萊因河中の一島に世界的聖人郷を建設せんとの計畫を爲して居る、愉快なる偉大なる思想家である、斯かる人にカイゼル以上に思はれて居る余の名譽幸福譬ふるに物なしである、教會の牧師や神學者等に何と思はれても構はない、此世界的偉人に友として取扱はるゝ光

婦人一人の賛成は百千人の神學者の攻撃反對を打消す丈けの充分の效力があるのである。

七月二十九日（火）大雨　『東京朝日新聞』歐洲通信は其特派員の前獨帝訪問記の内に下の如き一節を掲げた、曰く「巴里を出る時例のポーツマウス條約のウヰツテの懷刀と目指されたヂロン老博士から和蘭一流の著述家フレデリツク・フアンエーデンと云ふ先生の許へ一本つけて貰つた、紹介狀には「貴君の住所を忘れたれど和蘭は貴君を見出すべし……」など書いてある程餘程偉らい先生と見え、アムステルダムへ來て尋ねて見ると直判つた……一體和蘭へ來て非常に意外であつたことは誰もカイゼルの事に就て些かも興味を持つて居ないことだ……フアンエーデン先生の如きもカイゼル會見の一件を持ち出しても話の途中で急に「斯う云ふ日本人を知つて居るか」などと繪葉書にした寫眞を机の抽斗から取り出したりしてカイゼルなどもう何でも可いではないかと云つたやうな調子である、序に其

な事でも容易に出來るので御座います、其の上結果は少しの勞も出ないのです、先生よりもより以上待ち望むべきエスキリストを私はこんなに痛切にお待ち致して居りませんでした、然し二晩の御講演を承り、ことに二日目の晩以後、心の奥底にまで新しい望が滿たされました、あの救の望を持ち得た幸福は持ち得たクリスチアンの外には解らないと存じます」と、日本武士の家に育てられ、學士の家に嫁したる此の若き婦人の此清き希望、之を「世を惑はし基督教を誤る」と誹る神學者は何人である乎、彼は其徹底せる論法を以て此希望を粉碎し盡して痕迹だになしと言ふであらう、然し乍ら如何なる論法も此清き心の希望を破壞する事は出來ないのである、少女マーガレツトが哲學者フアウストに遙かに勝る眞理の鑑定者でありしが如くに、此若き婦人の實驗が却て神學者の基督再臨排斥論を粉碎し盡して痕迹だになからしめるのである、基督再臨不必要論者は數多の再臨信者の此美はしき心理狀態を如何に取扱ふのである乎、余自身に取りては斯かる淸き

以て再臨説と共唱道者を罵つたのである、而して其責任を擔ふ者は書店であつて著者ではない、責任は問はざるべからず、然し名義上の責任者は事實無罪である問題の困難は茲に在る、之を思うて基督教界は益々嫌になる、元々愛が無いから斯かる問題が持上るのである、然し我國今日の基督教の教師に愛を要求するは野暮の極である、結局無理が通れば道理が引込むまでゞある○旅館の裏座敷に於て説教會を開いた、會する者六十餘名、巻煙草を銜へながら素見しがてらに聽く者尠からず、然し一二の共鳴者が有て嬉しかつた、福音の種は斯かる機會をも利用して播き置くべきである、何時か其一二粒が成長して實を結ぶに至るであらう。

七月二十八日(月)雨　終日家に籠り原稿十七枚を書き之を東京の藤井に送つた。攝津蘆屋の江原祝子より書面あり其内に下の如き愛らしき一節があつた、曰く「先生の(神戸へ)お出下さる前私はどれほど御待ち申したかとても申上げる事さへ出來ません、そして其の待ち望む心にて大なる不思議なる力が働いてどん

氣に浸り居るやうに思はれ別に聲を放つて祈る氣にならない。

七月二十六日(土)曇　我が家の青年試驗に及第して東京帝國醫科大學に入學せりとの報に接して甚だ喜んだ、願ふ神の恩惠に由り彼が善き醫師となりて世の苦痛の一部分を除くに至らんことを、祈る我家が傳道師と醫師との交はる交はる出る所とならん事を、靈魂を救ふ術と肉體を癒す術、之に優るの事業はない、イエスは醫師であると同時に預言者であり給うた、傳道師に非れば醫師、願ふ内村家が世々代々善き傳道師と醫師とを出す家たらんことを〇午後山上より瞰下して關東平原は大雷雨であつた、神の慈雨八州を潤して雷鳴は歡呼の聲として轟く、爽快極りなし。

七月二十七日(日)曇　時々雨降る。夜警醒社若主人東京より來り、同社發行『基督再臨說を排す』に係はる廣告文の事に就て相談した、事は容易なるが如くに見えて實は困難である、基督敎界に斯かる難問題が幾箇もある、著者が書店の名を

キリストに於てある、彼を彼處に仰瞻るのが余の唯一の事業である、すべての問題が此一瞻で解決せらるゝのである、多忙なる感謝の一日であつた。

七月二十四日(木)晴　午前八時若き姉妹三人と共に那須に向て出發した、主婦は當分留守居役である、余がトランクの中に運びし書籍は字典四冊、ベルグソン哲學三冊、聖書註解二冊、天然科學書二冊であつた、是で一ケ月の心靈の糧に充てんと欲するのである、赤羽に於て再び汽車中に於て松村介石君と會うた、内務省の囑託にて浦和町へ演說に行かるゝとの事であつた、我等一行は黑磯を經て二時半那須山腹の休養所に着いた、其所に京都便利堂主人の余を待つあるに會し甚だ嬉しかつた、彼に關東の山野を背景として三四枚の寫眞を撮られた、夜來會者七人と共に讃美歌の聲を靜肅の四隣に響かせ祈禱を以て安き眠に就いた。

七月二十五日(金)晴　昨夜千葉縣海保竹松來り、今朝便利堂主人京都に歸る、山晴れ、野花鮮かに、鳥の聲凉しく、大分天國に近く感ずる、身は祈禱の空

學問を同うして友情の一層深きを覺ゆるのである。

七月二十二日(火)晴　終日勞働室に閉籠り雜誌編輯に從事した、傳道金の內より金三拾八圓を投じて輕便オルガンを買求めた、之を携へて山に行き同志と共に此夏讃美歌の稽古を爲す積りである、其事を思うて甚だ嬉しかつた、聖書と天然科學と音樂と之に少し斗りの哲學を加へて、其外は何をも思はず又語らずして樂しき辜(つみ)なき生涯を送る事が出來やう、而して今や此パラダイス的生涯は余の送り得ない者ではない。

七月二十三日(水)晴　非常に多忙なる一日であつた、雜誌原稿は草せざるべからず、明日那須行きの旅裝は整へざるべからず、其他女中に熱を病む者あり、友人の結婚問題の解決すべきあり、信仰的大疑問を以て訪來る人あり、大工と石屋と植木屋と井戸屋と交涉せざるべからず、慰むべきあり、諭すべきあり、責むべきあり、恕すべきあり、嗚呼紛雜、然し平安である、我が義は凡て十字架上の

若し余の唱ふる福音が人をして斯くも勇ましく死に面せしむるならば之を害物視する理由は何處に在る乎、古崎と云ひ、松田と云ひ、小出と云ひ、皆我が福音の善き證明者である、此證明ありて敎會の反對は幾許ありても余は安心して余の福音を宣傳する事が出來る。

七月廿一日(月)晴　主婦は昨日より鎌倉へ行いて不在、一人で家事を見て面倒限りなしであつた。舊友大島正健氏の訪問あり久し振りの會合とて談柄不盡、快談五時間に打續いた、我等はすべての問題に就て語つた、殊に興味ありしは聖書解釋問題とダーウイン以後の進化論と言語學上より見たる日本人猶太人種問題とであつた、近頃米國ジョンス・ホツプキンス大學敎授ドクトルR・A・ステワート氏の發表に成りし日本古事記の單語のヘブライ語と語根を同うすとの說に就て君の意見を質したる所、問題は言語學者たる君の趣好に觸れて談話は益々佳境に入り夏の暑さと時の移るのを知らなかつた、貴きは舊き學友である、信仰を共にし

な積りだ、僕は敎會の人でない、故に僕を怎する事も出來まい」、時に電車は新大久保驛に着いた、余は周章て鞄を網棚より取卸した、松村君は手傳つて之を車外に卸して吳れた、「ヤー失敬、又會つて緩々話さう」、ピー發車、此方は俥で歸宅。

七月二十日(日)晴　久振りにて自宅に於て聖會を開いた、會する者十二三名、懷かしき集會であつた。午後四時半今井館に於て法學士松田壽比古の葬儀を行つた、彼れ歳二十八、普通の場合ならば不幸短命を歎きつゝ世を逝るべきに、彼は希望滿々、春海に船を行るが如き心持を以て、『聖書之研究』七月號を一瞥し、之を最後のリーヂング(讀書)として靈の世界に入つた、再臨復活の希望に燃えたる彼に生ありて死はなかつた、敎育ある彼に多くの近代神學者に在るが如き聖書の明示に對する批評的態度は無つた、我等彼の友人一同は大に彼に由て勵された、彼と同病同信同國の青年小出義彥、彼の訃音に接し、病床より一句を遺族に打電して曰く「殘されて聖國戀しき暑さかな」と、是は死ではない、潑剌たる生である、

屋の如き援助者を多く賜ひしが故に研究誌は今日あるを得たのである。靜岡にて亦下車し、二十年來の信仰の友なる茶業家原崎源作氏を訪ひ、快談三時間にて三たび車中の人となり、假眠の中に箱根を越えた。

七月十九日(金)曇　昨日同樣の溫氣、夜は橫濱に到て明けた、五時品川着、山手線電車に乘替へ、澁谷驛に到れば松村介石君の珍らしくも洋服姿で乘込み來るに會した、「ヤー何處へ」、「君の國の群馬縣へ行んだ、君は何處へ」、「僕は今歸つたんだ、大垣、神戶、京都、濱松、靜岡と云ふ順さ」、「君は近頃丈夫だねー」、「有難う、一時間半位ゐ講演も疲れないよ」、「夫れはさうと靑年會の事は僕の豫言した通りに成つたではない乎、基督敎會に侫漢が多いよ、用心し給へ、アハハハ……」「僕も知つて居る、然し君は何故逃出したのだ、踏留まつて斬魔の劍を揮つて與れゝば宜いのに」、「僕は嫌だ、あんな奴等と爭ふと自分の身が穢れる、故に御と逃出したのだ、押川も田村も岩本も同じ事よ、君も用心しろよ」、「僕は大丈夫

其熱心に酬ゆる能はずして遺憾であつた、京都青年會は東京青年會とは異なり悦んで余を迎へて呉れた、兩夜とも靜肅を維持せんが爲に殊更に柔道擊劍部を休みて講演の成功を助けて呉れた、すべてが感謝である。

七月十八日(金)曇　蒸熱し、時々雨ふる、午前六時蛤御門前佐伯氏方を出で、多數教友に送られて京都驛を發し、午後二時半濱松驛に下車し、故土屋民司の未亡人を訪づれ、彼女と共に彼の墓を見舞うた、土屋は天龍川運輸會社の社員であつて、其乏しき中より幾回か『聖書之研究』の經營を助けて呉れた、而して五年前に主に召されてパラダイスに入つた、余は彼に何の酬ゆる所なくして彼を喪ひし事を常に心苦しく思うた、依て今回西下の機會を利用し、玆に彼の墓なりと訪づれたのである、余は未亡人と共に墓前に立ち二人首を低て我等の父なる天に在ます神に祈つた、而して復活の日に於ける再會を期して淋しき彼女を獨り遺して去つた、實に感慨無量であつた、死は我等を離さない、却て我等を近づける、神が土

面靜かにして帆船動かず、時々霞晴れて遙に淡路島を望む。午後江原若夫婦の訪問あり、彼等を停車場に送り月光を踏んで歸つた。

七月十六日(水)晴　午前九時一ノ谷神田方を發し、十二時半京都に到る、ドクトル佐伯方に迎へらる、七時半より京都基督教青年會々館に於て聖書講演會を開く、暑氣強く、祇園宵祭なるに拘はらず聽衆四百餘あり、夏期に在りては得難き會合であつた、余は「健全なる宗教」に就て述べた、信仰は内省的ならずして仰瞻的ならざるべからず、同時に經典を神の言として受け、又強き來世觀を懷く者ならざるべからずと說いた、說き終れば全身汗に浸り、蒸風呂の中に在りしやうに感じた、熱い苦しい演說會であつた。

七月十七日(木)晴　引續き暑氣強し、午後加茂神社糺の森に接し加茂川の淸流に沿ひたる佐伯氏の別邸に納涼した、七時半前夜同樣基督教青年會に於て講演した、炎熱灼くが如く講者も聽者も大なる苦痛であつた、聽衆昨夜よりも少く、

ても少しも差支ないと思うた、殊に舊家の趣味の甚だ控目なるには敬服した、晝飯の御馳走に與り一時半辭し、汽車にて西ノ宮に至り、堀兄弟を訪ひ、先般青年會より逐はれし際、氏が遙に少からざる物質的援助を與へられし其厚意を謝した、七時神戶に至り有志晩餐會に出席した、食卓に就きし者四十二名、主、我等と食を共にし給ひて不相變美はしき會合であつた、十時散會、「主の御料理代」四十五圓を得て之を神戶貧民病院に寄附して彼を悅ばし奉つた、市中は祗園祭にて賑うた、物質的神戶の發達に驚くべき恐るべきものを見る、此肉的元氣がありて昨年の米騷動は敢て怪しむに足りない、敦盛忠度の福原の舊都は米國シカゴ化しつゝあるのである、阪神人は確實に米國人の後を追うて財神崇拜を其信仰として採用しつゝある、是は進步ではない、大墮落である、彼等は奈落の底へと大速力を以て突進しつゝある。

七月十五日(火)晴　友人の家に止まり終日休息した、暑氣強く、茅渟海の水

來會者四百餘名聽衆の性質判明らず思ふやうに話し得ず甚だ不滿足であつた、主は萬事を善きに取計らひ給ふ、十一時一の谷に歸り安き眠に就いた。

七月十三日(日)晴　暑氣強し、林中の休息殊に有難かつた、而して主に在るの休息は天然の供する休息以上の休息である、「主は其の愛する者に(休息の)眠を與へ給ふ」(詩篇二十七篇二節)、是れ主を愛する者の何人も何處に於ても得る事の出來る者である。　昨日同樣、神戸に於て說教した、ヨハネ第一書三章初の三節の解釋を試みた、聽衆は數に於て昨日同樣、質に於ては遙に優つて居た、惠まれたる會合であつた、夜、滿月の光を浴びながら須磨の浦つたひに鐵枴山下の友人の家に歸つた、聖書講演に時には詩的趣味がある、夫れが其の大なる報酬の一である。

七月十四日(月)晴　暑氣強し、朝、江原萬里と共に住友寛一氏を住友須磨別邸に訪問した、海に臨み石を以て築き上げられたる莊宏なる邸宅である、富豪生活の一斑を窺ふことを得て善き見學であつた、斯かる邸宅の二つや三つ日本に有

の接待に與り、又市内信者十數名の訪問を受け、十時旅宿に到り床に就いた。

七月十一日(金)晴　　午前七時ワイドナー女史と共に養老鐵道に由り大垣を發し、車中にて米國流の辨當の御馳走に與り、傳道と信仰とを語りながら三十分にして養老に達し、其所に有名なる瀧を見、其下に立ち、尾濃の廣原を遙かに望みながら二人首を垂れて朝の祈禱を共にし、山を下り、十時再び大垣に歸つた、誠に聖き樂しき朝の散歩(Morgen Spaziergang)であつた、十一時女史に送られて大垣を發し、京都、大阪、神戸に於て友人の出迎を受け、六時攝津一の谷、松林の中より海を隔てゝ淡路島を望む神田氏の家に迎へられて其客と成つた、友の愛と靜かなる天然とに擁せられて近頃になき熟睡の一夜を此所に過ごした。

七月十二日(土)晴　　旅の疲れを取除かんが爲に午前と午後とは友人の家に在りて休んだ、敦盛塚附近戰之濱に沿うての散歩は氣持好くあつた、七時神戸に出、中山手通七丁目神戸日本基督教會々堂に於て靑木澄十郎君と共に說教した、

筆セオドル・リチヤード氏は熱心なる基督再臨信者であつて亦余の誠實なる友人である。

七月九日(水)晴　丸善に行き安價なる英書數冊を求めた、近刊書類にして余の讀みたき書は殆ど無い、余の探らんと欲する者は永久不變の眞理である、而して近代人は之を與へない、故に彼等の著作は余に取りては不用である。近刊の雜誌中『中外新論』、『大觀』、『日本魂』、『日本一』、孰れも信仰に關する余の談話を揭載す、基督再臨の信仰が世間一般の注意を基督教に對して喚起した事は確實である、而して之を罵る者は此世の論者に非ずして敎會の敎師神學者等なる事は奇異なる現象である。

七月十日(木)晴　午前七時柏木の家を出、主婦に送られて東京驛に至り、八時三十分驛の特急列車にて西下した、東海道を半睡半讀の間に過ぎ、午後五時大垣に下車し米國獨立宣敎師ミス・ワイドナーに迎へられ、其家に入つた、心より國

成つて見れば之よりも愉快なる事業はない、福音一たび土地に根ざせば果を結んで永久に至る、神の恩惠に由り我等の千葉縣傳道は成功であつたと言はざるを得ない。

七月七日（月）雨　朝、海保方に於て集會を開き、聖書を講じ、祈禱を共にし、午前九時同氏を辭し、成東驛より乘車、二時柏木の家に歸つた、誠に歡喜に充ちたる傳道旅行であつた。

七月八日（火）晴　爽快なる日であつた、雜誌校正を終り之で又一先づ安心である、然し乍ら仕事は後より後へと待つて居る、全き休息を得るは當分の間目當がない、然し悲まない、我が休息は主イエスキリストに於てある、彼を信ずることは是れ休息である、其意味に於て余は永久に休息する者である〇布哇島ホノルル市發行彼地組合教會機關雜誌『フレンド』六月號は本誌四月號掲載英文「余の宗教」を轉載し、米國人に勸むるに福音の單純に還るべきを以てす、『フレンド』誌の主

して居る、舊き同級生の中より彼の如き高潔獨立の人の出たことは感謝の至りである。

七月六日(日)半晴　時々雨ふる。久振りにて自由の安息日であつた、本年に入りてより東京の高壇に登るの義務より釋放されしは今日が初てゞある、然し此日を無益に消費すべきにあらざれば畔上賢造の傳道地なる千葉縣東金に往きかの地方の教友を訪づれた、會する者五十餘名、歡喜極まりなしであつた、畔上先づ説教し、余は其後を承けて余が彼地に傳道を開始して以來茲に二十四年、思想の變遷、信仰の上進に就て述べた、顧みれば余が彼地に入りしは明治二十九年故田口卯吉君と共に社會演説を爲さんがために土地の有志家に招かれしを以て始まり、爾來二十四年間靈的關係を繼續して今日に至つたのである、午後四時演説を終り、九十九里鳴濱村に至り教友海保竹松の家に泊つた、今や子女悉く成長して信仰的第二の時代を作らんとしつゝある、傳道は忍耐を要する事業である、然し

七月四日（金）細雨　主なる仕事は雜誌の校正、機械的の仕事である、然し肝要なる仕事である、之を疎漏にして記者たるの義務は濟まない。希臘哲學者プラトーの事を思ひ出し彼の傳記を復讀して大に力附けられた、大宗敎家と並び尊むべき者は大哲學者である、而して古今東西プラトーに優る哲學者は無いのである、聖書に次いで學ぶべき者は希臘哲學である。

七月五日（土）晴　久し振りに空晴れ氣持宜し。朝、札幌時代の舊友にして前の鹿兒島第七高等學校々長、今は鹿兒島縣下福山村に理想的私立中學校敬天塾を經營し着々功を奏しつゝある農學士岩崎行親氏の訪問を受けた、淸い立派なる人物である、日本國の文部大臣として最も適當なる敎育家である、然し彼れ今官を退き一平民として靑年薰育に從事しつゝある、彼は余と違ひ基督信者とならざりしと雖も、其品性に於て信者以上の紳士である、我等久振りに相會して時の移るを知らなかつた、愛國の熱情に於て、敎育の根本義に於て、彼と我とは全然一致

つた、嗚呼近代思想、是れが單純なる聖書の福音を淆亂す者である、其の誘ふ所となりて信仰的に余より離れし友人はグン君一人に止まらない、多くの文學者、多くの思想家はグン君の取られし途を取つた、全歐羅巴が新社會主義に走るとも余は獨り舊き聖書の福音に止まるであらう、而して余の愛する日本をして歐や米に倣ふ事なくしてキリストと其使徒等の言に從はしむるやう努力するであらう。

七月二日（水）雨　默示錄の研究と『全集』の編纂と手紙書きとに一日を費した。長尾半平氏の『東京基督教靑年會副理事長辭職顚末』なる小冊子が出た、靑年會對余の事件が因をなしたのである、善惡何れにありしとするも事の終に玆に至りしは甚だ殘念である、然し乍ら多くの場合に於て眞理は斯くの如くにして實現するのであると思へば止むを得ない。

七月三日（木）霖雨　讀書と編纂と手紙書きと來客接待と其他の小事にて多忙聖書に絕大の眞理を學びながら此世の細事に鞅掌す、是が基督者の生涯である。

七月一日(火)半晴　平和克復祝賀會にて市中は賑うた、恰も好し我等の舊き友人にして今は第五高等學校獨逸語教師なるヴイルヘルム・グンデルト君上京中なれば君を夕飯に招き玆に日獨平和回復祝賀會を我家に於ても開いた、君と相會せざる事玆に五年、其間に世界は一變して別世界に於て再び相會する如き感がした、我等は相互に對して尊敬を失はずして此大戰爭を經過せし事を感謝する、然し乍ら我等は其間に信仰上非常に變化した、余は明確とキリストの再臨を認むるを得てグンデルト君の祖父さん祖母さん等の握られし信仰に入ることが出來た、それと正反對に君は古き獨逸人の信仰を去て近代人の信仰に這入られた、此事を知て余は非常に悲しくあつた、余が漸くさつとチンチエンドルフやフランケイの信仰に入つた時にはグン君は既に之を去て其所に居たまはないのである、實に悲しかつた、是が此戰爭が我等二人に及ぼした變化であつた、余を再臨の信仰に導き君を再臨の信仰より引出した、斯して我家の小なる祝賀會は大なる悲歎を以て終

六月三十日（月）曇　今曉大雨。Ｉ・Ｍ・ハルデマン氏著「橄欖樹の枝」を讀んだ、斯る說教師の腐敗墮落せる米國今日の基督教界に今尙存せるを知て心强く感じた。有島武郎君の訪問を受けて喜んだ、君は正直なる愛すべき人である、君の近頃の信仰の大變化に對して同情に堪へない、君は不徹底の教會の基督教に堪へずして君の今日の立場に到つたのである、教會の基督教を厭ふの點に於ては余は君と少しも異ならない、但し余は君と正反對の方向に切拔けたのである、君が進化論の歸結に走つたに對して余は進化論を棄てゝ宇宙萬物の顯現的解釋（Apocalyptic explanation）に移つたのである、方向は異なつた、然し微溫き教會の基督教を脫した其氣分に於ては我等は少しも違はない○夜、海上ビルヂング樓上中央亭に於て柏木兄弟團の晩餐會が開かれた、來會者五十餘名、交歡十時に至て止んだ「主の御料理代」として三十六圓餘の獻金あり、樂しき上半年最後の會合であつた、盡く感謝である。

三倍である、余は箴言第一章七節「ヱホバを畏るゝは智慧の本なり」の聖語に就て語つた、ヱホバを畏れて初めて本當の學者になることが出來る、改信（コンボルション）の確實なる證據の一は智識欲勃興であると云ふ事に就て述べた、而して茲に九月第三安息日まで此會を閉づる事を宣告し讃美歌第三百九十二番「また會ふ日まで」を歌つて散會した、洵に感謝の極みである、昨年九月青年會館に於て此講演を始めし以來、余は唯一回風邪に冒されて休みし外、曾て一回も高壇を空しくせし事なく、又基督教會の排斥に會ひて一時高壇を奪はれしも更らに直により善き高壇を與へられて聖業を繼續するを得て感謝の言葉が無い、大日本衞生會講堂は引續き借受くる事に約束整ひたれば九月以後、引續き帝都の中央に於て福音宣傳を繼續する事が出來る、何事も感謝である、すべてが勝利である、「爾わが仇の前に我が爲に莚を設け、我が首に膏を注ぎ給ふ」と云ふ事は斯かる事を云ふのではない乎と思はれる、ハレルーヤ、ヱホバを讃美せよである。

居し更に南米に侵入し云々」と、斯くて前の戰爭は今や將さに終らんとする時に後の戰爭は預言されつゝある、平和來を叫ぶも只の一時である、神に叛きし人類は相互に對して戰はざらんと欲するも能はない、爲すべき事は福音宣傳の外にない事が益々明瞭になりつゝある。

六月二十八日（土）曇　雜誌原稿三頁分を書いた。混亂せる世なる哉、平和條約調印成らんとするに際して伊太利に親獨派起りて伊國を驅つて獨逸に併合せしめ以て大獨逸帝國の後援を得んとする運動を試むると云ふ、又米國財閥は大に獨逸に放資して獨逸人と利益を頒たんとすと云ふ、利益の爲には盟約を破り利益の爲めには國をも賣て辭せず、戰爭も利益のため、平和も利益の爲めである、斯くて成りし平和は平和に非ず、何時再び大戰爭が始まるか分らない。

六月二十九日（日）半晴　今年上半年最後の安息日である、丸之内に於ける講演會不相變盛會、來聽者六百人、獻金六拾圓以上、青年會に於ける平均獻金の約

の教會に於て余の辯護者が十日間に渉り熱辯を揮ひしとは……而かも此際！　不思議である、人の業(わざ)とは思はれない。

六月二十六日（木）雨　『内村全集』第一卷第三版を賣盡したりとの書店よりの通知に接した、重ね々々の感謝である○七月號雜誌原稿を印刷所に送る。過去二十年間未だ嘗て一回も締切日に原稿を送らなかつた事はない、又勘定日に支拂を怠つたことはない、事は細事のやうであつて細事でない、宗教事業に從事して約束を守らざる事は大なる惡事である、原稿と勘定、二者を怠つて如何なる明論卓說も何の用をも爲さない、而して神に依賴(よりたの)みて我等は能く責任を充たす事が出來る。

六月二十七日（金）半晴　少し斗り筆を執つた。講和條約調印成らんとし、戰勝國は孰れも祝勝會準備に忙はしき時、米國電報は傳へて言ふ、加州選出米國上院議員フイーラン氏は日本移民の絕對禁止を要求し述べて曰く「米國の次の戰ひは太平洋上に勃發すべく、東洋の獨逸人（日本人）は既に襲來して加州到る處に蟠

準備の爲に學友と共に那須へ行いた。在米國ネバダ州エルコーの闘矢君より甘き西洋菓子を送つて呉れた、ロツキー山中の甘味を東京柏木に於て味ふのは大なる特權又恩惠である○米國獨立宣教師T・B・ソーントン氏の訪問を受けた、氏は過る十日間晝夜に渉り市ケ谷日本基督教會に於て純福音を說いた、而して氏の說く所は余の說く所と全然一致して居る、故に教會は彼を嫌ひ、三年前彼より神戸ユニオン教會の牧師の地位を奪うたとの事である、故に氏は强き同情を余に對して懷いて呉れる、而して此人が、ソーントン氏が近頃余を青年會の高壇より逐出すに最も盡力せられし○○○○氏所屬の教會なる市ケ谷日本基督教會の招聘を受け、其高壇より十日間に渉り余が說くと同じ福音を說き、而已ならす二回まで余の名を擧げて余の立場を辯護せられたりとの事をソーントン氏自身の口より聞いて余は奇異の感に打たれた、何やら神が特別に氏を神戸より呼出し、此際特に余の爲に辯護せしめ給ひしやうに思はれた、余の排斥者なりし○○氏が長老たるそ

前回講演の不足を補うた、實に氣持良き會合であつた

六月二十三日(月)雨　空晴れ北風涼しく、休息靜止の心地好き月曜日であつた、長椅子に寢轉び新聞雜誌を樂讀するの外何事も爲さなかつた、斯くして昨日失ひし活力を回復せんとするのである、二時間の講演より來る疲勞は癒すに三十時間の休息を要するのである、高價なる勞働である、然し爲す甲斐のある勞働である、故に廢められない。

六月二十四日(火)晴　久振りの晴天である、氣分最も宜し、『興國史談』の訂正を始めた、又少し使徒行傳と箴言とを研究した、又午後は平出氏の聖書學舍に於てパウロの旅行地理に就て講義した、其他一二親友の來訪あり心置きなく此世の細事に就て談話した、善き平和の一日であつた。

六月二十五日(水)晴　珍らしき好天氣であつた「四時變らぬ涼しき夏の、光り輝く讚美の里に」と云ふやうな氣持好き日であつた、家の青年は大學入學試驗

東京に召出すのである、高原の凉風は惜くある、然し止むを得ない、數百の信仰の友が丸之内に余を待つて居て呉れると思へば山を下るの勇氣が出る、サヨナラ箒川、有難う、君の淸流に勵されて困難い仕事を爲すことが出來た、復た來るよ。午後三時半山を發し、歸途人力車と二等汽車にて大分樂であつた、宇都宮にて停車場に彼地敎友一團の迎送を受けた、彼等は余に惠むに最上等の夕食辨當を以てした、一首を賦して彼等の厚意に酬ゐた、「鹽原や那須の入浴の歸り途、鰻辨當嬉しかりけり」と、十一時柏木の家に着いた、良き勞働旅行であつた。

六月二十二日(日)暴風雨　午後の會合、風雨にも關はらず相變らず盛であつた、來聽者五百餘、近くに中央停車場を望みながら讃美歌第二百三十五番を會衆一同と共に合唱するは得も言はれぬ福祉であつた、余は先づ詩篇第百廿七篇第一節に據り「安全週間の出來事」に就て語つた、ヱホバ守り給ふにあらずば社會の共同的努力も以て安寧を維持するに足らずと述べた、續いて主の祈禱につき

終日『地人論』の訂正に從事した、日本天職論最後の結論たる「東西兩洋我に於て合す、パミール高原の東西に於て正反對の方向を取りて分離流出せし兩文明は太平洋中に於て相會し、二者の配合に由りて胚胎せし新文明は我より出でゝ再び東西兩洋に普からんとす」との我言を讀み終つて余は一大思想を世に供せしことを感謝せざるを得なかつた、後世之を讀みて我思想を政治的に世界に行ふ者があらう、或ひはキリストが再び來り給ふ時に彼は我と同志とを以て此理想を實現し給ふのかも知れない。

六月二十一日(土)半晴　『地人論』訂正を終つた、隨分の骨折りであつた、然し爲す甲斐のある努力であつた、其文は拙劣なれども想ば雄大である、此著は此儘にして葬らるべき者ではない、訂正を施して再び世に出すべき充分の價値があると認むる、此事を爲すために四日間山中に留まりし事を悔ゐない、尙ほ引續きて『興國史談』の改訂を此靜かなる所に於て行ひたくある、然し明日の義務が余を

軌道のガタ汽車、鹽原山道のガタ馬車にて午後四時栃木縣鹽原の溫泉宿に着いた、大に疲れた、三十年間續いて忠實に勤め吳れし彼と共に久振りに山に遊んで言ひ難き快樂を覺えた、彼れ初めて來りし時は紅顏の靑年、今は頭に白髮を戴く、我も彼も共に老いたのであらう、共に箒川の畔に宿り、彼に肩を揉んで貰ひながら昔を語り今を談じた。

六月十九日（木）曇　時々雨ふる、山岸は名所見物に出掛けて居らず、余は獨り淸流に面して舊著『地人論』の訂正に從事した、恰かも他人の作を校閲するの感がした、文は拙である、然し乍ら想は雄大である、曰く「亞細亞論」曰く「歐羅巴論」曰く「亞米利加論」と、世界の地理を一大詩篇として見たる作である、余は此著述を爲して置きし事を感謝する、米國アマストに於ける地歷硏究二年間の結果である。

六月二十日（金）半晴　山岸去り、余は獨り殘され、箒川の流聲を聞きながら

著述を讀んで尠からず敎へらるゝ所があつた、地理學に辜はない、之に監督、長老、執事、牧師、傳道師等の干渉はない、今に至て地理學者とならずして聖書學者となりし事を悔ゐざるを得ない、詩人シルレルが言し如く「自由は山に在り、腐敗の氣は未だ曾て其新鮮なる氣流を汚せしことなし、あゝ自然は到る所に完全なり、唯人のみが憂苦を以て之を毀損す」と、然り自由は山に在り海に在り、敎會になし、神學校になし、青年會になし、あゝ人よ青年よ、汝等の自由を求めんと欲せば敎會神學校に往く勿れ、寧ろ山と海と地理學とに行けよ〇松村介石君の紹介に由り大隈侯主宰雜誌『大觀』の記者池田君の訪問を受けた、同君が暹羅語學者であるより暹羅語に就て、大隈侯に就て聞く所あり、大に敎へらるゝ所があつた、余は新聞記者の訪問を受くる時、彼等より聞かんと欲して彼等に聽かれんとはしない、是れ記者を迎ふるに最良の方法なる事を近頃發見した。

六月十八日(水)半晴　午前八時山岸と共に柏木の家を發し、三等汽車、那須

である乎、何故に婦女子が爲すが如くに蔭に廻りて卑劣手段を弄するのである乎余は彼等の爲に悲まざるを得ない、余は元來教會の人ではない、故に教會に憎まれたればとて少しも痛痒を感ずる者ではない、講堂は靑年會館以外にも澤山ある余の援助者は田島君一人に止まらない、又警醒社のみが唯一の書店ではない、余は教會信者を目的に筆を執らない、少くとも日本全國民が余の讀者である、噫憐むべき教會よ、汝等は總掛りとなりて余一人を斃すことが出來ない、唯注意せよ汝等自身の斃れざらんことを、汝等の多數は外國の傳道會社が日本より手を引くことあれば直に斃れる者ではない乎、外國人の御慈悲に由て存立する汝等が一人の獨立信者を斃し得ざるは勿論である、噫教會よ、余は恐る汝等には自己の滅亡の時期の近づきつゝある事を、余は汝等を憎まない、汝等が余に反對すると同じ熱心を以て汝等自身の異端と俗化とを革めん事を欲す。

六月十七日（火）陰鬱　『地人論』の訂正に從事した、二十五年前に成りし自分の

あつた、余は主の祈禱の解釋を試みた、自分ながらに大に敎へらるゝ所があつた講演終つて後に有志の親睦會を開いた、來會者百五十名、讃美あり祈禱あり感話あり、洵に生命に充ちたる會合であつた、何れにしろ講演會のインテレストは少しも衰へない、實に不思議である。

六月十六日(月)陰雨　午前主婦を伴うて京橋古宇田病院を訪うた、或る科學的新治療を受けんが爲である、藥品を用ゐざる治療法は之を歡迎せざるを得ない、醫術は惡魔の發見であると云ふは間違である、明白に天然の法則に合ふと信ぜらるゝ治療は感謝し且つ祈りて受くべきである○面白い噂を聞いた、靑年會をして余を斷はらしめ、田島進氏が余の講演を助けたりとて彼を詰責せし(以上は確かなる事實である)敎會は更に進んで警醒社書店をして余の著述の發行を止めしめんと試みつゝあるとの事である、敎會は斯かる事を爲して縱し余の事業を壞ち得るとするも、終に自ら亡びざるを得ない、何故に正々堂々と議論を以て戰はないの

ヤー、ブリンガー、グリム等各々説を異にし、孰れを採るべきや自分も大に迷うた、「日用の糧」なるや「明日の糧」なるや、「上より來る糧」なるや、言語學上の難問題である、新研究に由り明解の到る日を俟つ○改築捗らず氣が氣でない、「此世の子等は光の子等よりも巧なり」である（路加傳十六章八節）、余は大工に騙される、左官に騙される、屋根屋に騙される、職人と云ふ職人に皆んな騙される、余の作る家は普通の家よりも何割も高價くなる、然し止むを得ない、余は騙されると知りつゝも職人を信ずる、余は彼等に對し深き同情なき能はずである、彼等は他人の家を作るも自身は一生借家住ゐにて終る、彼等が多少の利を貪るは恕すべきである、故に騙されるは彼等に對する一種の慈善と思ひ喜んで之に應ずる、神は必ず余の損失を償ひ給ふであらう。

六月十五日（日）半晴　好き安息日であつた、丸之内に於ける午後の集會は相も變らず盛んであつた、來會者五百人以上、其内に多くの珍らしき貴むべき人が

禱を以て之を發送する、印刷費騰貴のために紙質の大に下落せしを悲む。

六月十三日（金）曇　『内村全集』第一卷再版賣切れ、三版成る、教會と青年會との反對強き此時に際し社會の此歡迎は奇と謂つべし、教會は余より高壇を奪ふことが出來る、然しながら紙上の此高壇……是は余の獨專であつて教會の狐等は之を如何ともする事が出來ない、重々の感謝である○帝國五分利公債千圓券一枚を北海道帝國大學に宛發送した、謝恩奬學資金に充ん爲である、永の間心掛けし事が今日始めて事實となりて現はれて歡喜感謝に堪へない、『内村全集』の印税として書店より送られし最初の一千圓を此目的に當てたのである、五十九年間の生涯に於て余が纏めて一千圓を得たのは今度が初てである、而して之を青年時代に世話になりし母校に獻じて言ひ難き滿足を感ずる、是れで四十年來の肩の重荷が大部分下りしやうに感ずる。

六月十四日（土）雨　半休半讀、馬太傳六章十一節の研究が面白かつた、マイ

つたのである、神祐け人働きて玆に美き果を見るのである、草苺然り、況して靈魂に於てをや。夜柏木兄弟團有志の相談會があつた、花卷産の草苺を頒ちて共に共珍味を賞した。

六月十二日（木）雨　左の如き叮嚀なる書狀が手許に達した、

肅啓、霖雨の候に相成候處御恩寵の下に益々御健勝の段奉大賀候、陳れば今般は御厚志によ
り當青年會福音宣傳の爲め金百圓也献金を辱ふし奉感謝候、甚だ略儀には候へ共右以書中
御厚禮申上度如此に御座候、敬具　大正八年六月十一日　東京基督教青年會理事長江原素
六㊞　內村鑑三殿侍史

是は御禮儀である、恐縮に堪へない、余の聽講者の献金を余に渡されしものを余より改めて傳道費として青年會に寄附したのであつて別に御禮狀に與る理由はないのである、斯くして此不愉快なりし靑年會事件も表面なりとも禮儀を以て終るを得て感謝に堪へない、是で此事は萬事忘れるであらう○六月號雜誌が出た、祈

ならば大變である」と、而して彼は余が青年會の高壇より逐はれし事に就て余を祝して吳れた、序に言ふ、彼は兩三回青年會館に來り親しく余の講演を聽いた、彼と余とは神學上或る意見を異にするも彼は余の熱心なる賛成者である。

六月十日(火)雨 梅雨到り欝陶敷くあつた。又復講堂建築問題が持上り尠からず頭腦(あたま)を惱ました、余は聖書を講ずる事の外、斯かる事に携(たづさは)りたくない、然し止むを得ない、祈る、主が敎會の敎師等に妨げらるゝ事なく多くの人に福音を說くための場所を余に與へ給はん事を○『全集』第貳卷の編纂に取掛つた、亦一仕事である。

六月十一日(水)半晴 陸中花卷町齋藤宗二郎君より例年の通り同君自耕の草苺(いちご)が到着した、實に天下一品である、每年惠送に與ること玆に十數年、名譽の至りである、北上河畔の砂礫(こいしまじり)混交の土壤と東北中部の乾燥せる氣候とを利用し之に加ふるに齋藤君の熱誠を以てしたれば玆に天下稀に見る所の美果を產するに至

名の爲に働くに至りしは大なる攝理であり大なる感謝である、我等談話の標語は故クラークの遺せしBoys be ambitious（青年よ大志を懷けよ）であつた、我等は主の爲に大志を懷き大事を爲すであらうと語つた、實に愉快である。家の主婦足を病み尠からず心配した。

六月九日（月）晴　舊き母校へ僅ばかりの寄附を爲すために銀行へ二度も通はせられ、折角の休日も全潰れとなつた、然し悲しまない、青年時代に澤山世話に成つた學校の爲に少しなりと報恩の徴を爲すことが出來るかと思へば非常に有難い、銀行への途中、在校時代の事共種々追想し樂しかつた〇夜瑞西宣教師フンチケル氏に夕飯に招れ、時事と傳道とに就て語り面白かつた、歐洲大陸人は英米人とは異なり我等日本人を解するに遙に深くある、故に共に語て共鳴する所が多い、フ氏は青年會事件の眞相を聞いて呆れて居た、彼は曰うた「歐洲に於て昔しはそんな事があつた、然し今は斷じて無い、若し今そんな事が瑞西に於てあつた

六月七日(土)晴　暑し。海軍々令部清川大佐並に同大學高橋大佐の訪問があつた、我等は信仰と武士道とコロムウエルとアドミラル・ブレーキと英米の物質的戰術と日本の精神的戰法とに就て語つた、余の信仰が兩士の如き軍人紳士に少なりと辨せらるゝに至りし事は感謝の至りである、國に陸海軍の必要ある以上(而して罪の此世の續く限り其の全廢せらるゝ時の來るを思考る事が出來ない)其の眞の信仰に由て潔めらるゝの必要あるは云ふまでもない、信仰の陸海軍に必要なるは政治、實業其他の業務に於て必要なると少しも異ならない、余は日本に日本特有の大軍人大英雄が起りて聖戰を以て敵に勝ち國を潔むる時の到らん時を待つ。

六月八日(日)晴　丸之内に於て第二回の聖書講演を爲した、聽衆六百餘、前回よりも落附いたる集會であつた、此日より吉澤重夫君其令妹と共に音樂を受持ち呉れる事になつた、集會の爲めに大に嚴肅を增した、何事も感謝である、會後伊藤一隆と共に銀座に會食した、四十年前の信仰の友と中央に在りて共に主の聖

に樂器を與へられて我等の傳道機關は益々整頓せられつゝある、「ヱホバエレー」、「ヱホバ備へ給ふ」、我等が求めざる前に彼は大となく小となく我等に無くてはならぬ物を備へ給ひつゝある。

六月六日(金)晴　改築の棟に揭げし十字架の兩面に「一九一九年六月四日、此日東京基督教青年會より逐はれ、福音の先鋒として丸之内に入る、ハレルヤ勝利」と和英兩文にて記載し、之を屋根下に釘付けた、後日家を毀つ者ある時に此事を知らんが爲である○芥屋に特別に拾錢與へた、彼の溢面に微笑の浮ぶを見て嬉しかつた、前日自身が芥溜の掃除を爲して彼に對し同情が起つたのである、彼も亦人の子である、同情に遇うて喜んだのである、僅か拾錢で良き慈善を爲した金の額ではない、之を與ふる同情の心である、而して自身其業に當らなければ眞の同情は起らない、余は此小慈善を爲して何やらイエス様が余の背後に立ちて其聖手を擧げて余を祝福して下さつたやうに感じた。

である、聖書講演の外に余が確信を以て爲し得る事は他に何もないやうである。愛犬終に死し其屍體の處分に就き尠からず心を勞した、一年間生育の勞空しくして彼れ終に死す、良き一人のフレンドを失ひしやうに感じて悲しかつた。京城の金貞植氏來訪、夕食を共にして信仰と時勢に就て語つた、彼は主イエスキリストに在りて余の良き兄弟である。

六月四日（水）晴　改築の立前にて混雜を極めた、十字架を高く棟の上に擧げて愉快であつた、職人への大振舞を爲した、之も亦善き慈善である。高橋海軍大佐外數人の來訪あり、人生の種々の方面に就て學ぶ所があり有益であつた。雜誌校正始まり、相變らず面倒であつた。約翰第一書の研究、引續き興味深し。

六月五日（木）晴　會場使用のオルガンを求めん爲に吉澤重夫君と共益商社に落合ひ、彼れ是れ選擇の後、西川製中形のものを求むることに定めた、吉澤君は逝かれし母君の緣故に由り爾今我等の音樂指導者なるべく約束せられ、玆に又新た

の間講堂缺乏の心配が無くなつた、誠に感謝の至りである、神の御手が實現するやうに見え、言ひ難きの喜びであつた、逐はれる事と負ける事は最も善き事である、斯くして我等は大勝利を得るのである。

六月二日(月)晴　家の蓄犬病み、其治療のために尠からざる勞力を要した、犬と雖も家族の一人である、其苦痛を除いてやらねばならぬ、人情であつて又義務である○有力者某の來訪あり傳道の機運熟したれば大に力を效(いた)すべく約束せらる、此時に際し大なる奨勵であつた。

六月三日(火)晴　疲勞未だ去らず、終日ボンヤリとして居た。博士E・F・スコットの The Kingdom and the Messiah (神の國とメシヤ)を讀んだ、苦(くる)しい再臨反對論である、余の再臨信仰を強むること尠くなかつた。主婦と共に買物に行つた、初めて乘合自働車に乘り愉快であつた、其の他の事は判斷(はんだん)つかず只彼女の言ふが儘に從ふのみであつた、品物の選定、其評價等に就ては余は全然無智無能

氏は慰めて曰く「此の事あるべきは既に明白の事にて却て此の方氣兼ねなくして我等同志にとり好結果なるべく候、かくして純日本的獨立基督教は建らるべく、束縛なくして主の御福音を說き且聽くを得べく、何も彼も主に在りては唯感謝に御座候」と、孰れも我意を得たりである、今日まで反對はすべて我が利益に終つた、此大反對は必ずや大利益となりて現はるゝであらう、感謝、感謝。

六月一日(日) 此日講演會を丸之內日本衞生會の講堂に於て開いた、青年會館よりは日光に於ても空氣の流通に於ても、將た又全體の設備に於ても遙に優りたる會場である、聽衆は七百人位ゐ、相も變らざる盛會であつた、此日の獻金壹千〇六十三圓餘、以て熱心の程度を窺ふ事が出來る、青年會より逐はれし事は我等に取りどの點より見るも善き事であつた、我等は深く我等の排斥者に感謝せざるを得ない、田島進君前回の續きを述べ、余は「信仰の三角形」と題しヨハネ第一書の根本義に就て語つた、我等六月中日曜日毎の講堂借用料を前納し、先づ當分

謝、『全集』は賣れる、新高壇は與へられる、夜が明けた、狐や狸と緣を絶ちて雲雀と共に囀る時が來た、あゝ愉快!!!

五月三十一日（土）晴　昨日に比べて靜かなる好き日であつた、或る夫人小供を連れて訪來り、共に蓄音器を聞いて樂んだ。『萬朝報』夕刊は「基督敎會の暗流」と題し、靑年會事件に關し余と江原素六翁との談話を掲げた、江原氏の分は氏が一昨日藤井に語りしものとは全く別の意見である、是れが多分老政治家たる翁の翁たる所以であらう。此日此件につき多くの慰問の手紙を貰つた、牛込敎會牧師舊友田嶋進君の言に曰く「御通知に接し驚き入り申候、然しルーテル、法然、ウエスレーは皆先生と御同樣の運命を經來り申候、今後は益々聖書の眞理の宣傳に全力を盡されん事を祈り候云々」と、又女子學院敎頭三谷民子女史よりの慰藉の言に曰く「先生、靑年會の爲に悲しみます、彼等が此の大なる間違を行つた事は彼等の爲には恥ぢ、神の國の爲には勝利で御座います云々」と、又聽衆の一人O・B

である、我等に反對者の多き今日此頃大新聞の斯る記事は尠からざる援助である○昨日以來新聞記者の應接にて忙はしくある、『朝日』と『萬朝』とは記者を送て青年會事件に就て委細を尋ねた、山縣五十雄君は『中外新論』『セウル・プレッス』『ヘラルド・オフ・エシヤ』を代表して日本教化の事に關する余の意見を聞取つた社會全體は余の味方で余の反對者の反對であるやうに見える○此日青年會との關係が全く絶えた、何やら永らく岸に繋がれし船が共纜を絶ちて大海に乘出したやうに感じた、今より後理事だとか主事だとか監事だとか云ふ厭な名を聞く必要がないのである、今より後自由に些少の遠慮なしに福音を説くことが出來るのである、今年一月以來長尾半平氏の好意に對し好ましからざる青年會との提携を維持し來りしは尠からざる苦痛であつた、然し神と余の排斥者等とに感謝す、余は再び自由の人となつた、暗らき基督教界との關係が絶えて余は明るき身と成つた最早陰欝なる牧師や長老等の顔を見るの必要がないのである、あゝ愉快、あゝ感

染ざるを知つて喜んだ、彼が故國の事を語るに方て眼に涙を浮べるを見て余も貰ひ泣きを爲さゞるを得なかつた、二人祈禱を共にし再會を約して別れた。藤井武柏木兄弟團を代表し青年會事件に付き江原素六翁と會見し歸り來りて翁の立場を報告した、翁の信仰の人に非ずして純然たる政治家なるを聞いて拗らず失望した左もあらう、信仰の人が長年の間日本メソヂスト敎會の會員にして政友會總務であり得やう筈はない、翁が余輩の立場を解し得ず敎會の監督牧師等の言を信じて余輩を亂暴人視するは怪むに足りない、翁はその天保時代の觀察を述べて云うたさうである「大岡越前守が裁判するに最も手古摺つた者は坊主である」と、余は言はんと欲す、キリストと其十字架を解するに最も困難なる者は日本今日の政治家であると、江原素六翁は到底余の味方でない、斷念する、悲まない。

五月三十日（金）晴　今朝の『東京朝日新聞』は余と塚本虎二の肖像を掲げ二人の理想に就て述べて三段に及んだ、柏木兄弟團の名が天下に擧つたと云ふ次第

に余を放逐せんとするのである、卑劣なる彼等なる哉。東京驛樓上に於て『やまと』新聞の松井柏軒氏、『萬朝報』の斯波貞吉氏、京城『セウルプレス』の山縣五十雄氏、外に神戸の好本督氏と共に會食した、最も樂しき會合であつた、青年會事件、朝鮮事件、米價騰貴問題等に就て語り、最後に來世存在問題に就て談じ次回の會合を約して別れた、宗教家の陰險手段に氣持を惡くしつゝありし此際、舊き新聞記者仲間との會合は殊に樂しく感じた、耐へ難き者は基督教界の小政治家等である、雅歌二章十五節に言へるが如く「我等の爲に狐を捕へよ、かの葡萄園を害ふ小狐を捕へよ」である、神の葡萄園たる教界を害ふ者にして聖書も知らず信仰もなく唯少し斗りの俗智を有する小政治家即ち小狐の如きはない、君子の居る能はざる所は是等小狐の跋扈する目下の基督教界である。

五月二十九日（木）晴　朝信仰の友人なる朝鮮京城金貞植氏の訪問があつた、三年振りにて彼と相會して甚だ懷かしく感じた、彼が組合教會に働くも共信仰に

依て次回講演の會場の撰定に取り掛り藤井の盡力に由り丸之內大日本私立衛生會々堂を借受くる事に定めて安心した。夜長尾半平氏の訪問あり、氏並に伊藤一隆氏の靑年會の余に對する處置に反對して共理事たるを辭せし事を聞いて氣の毒に思うた、然し止むを得ない、問題の火の手は益々揚るであらう、革正實行の途として止むを得ない。此日京都の靑木庄藏氏、岡山縣の松本鄕一氏、兵庫縣の好本督君等の訪問があつた。

五月二十八日（水）晴　朝長尾半平氏と共に靑年會を訪うた、昨朝主事の齎せし報告の未だ理事會の決議として認むべき者にあらざる事を發見した、故に其公表を明後日まで見合はす事に定めた、萬事が亂脈である、何が何やら少しも解らない、唯敎役者の重なる者が余を靑年會の高壇より驅逐せんと欲する事だけは明白である、而して此目的を達せんが爲には彼等は手段も方法も擇まないのである、然かも彼等は明白に「我等は內村を嫉ふ」と云ひ得ない、故に有耶無耶の內

に感じた、然し「舊の心を知る人ぞ汲む」である、我等相互に變つて變らない。殊に余に於ては仕事は今始つた斗りである、今日までが準備であつて今からが實行である、愉快である、感謝である○藤井と共に六月號雜誌原稿の大部分を纒め之を印刷所に送つた、毎月果たすべきの義務である、恰も借金を拂ふが如くである之れのみは怠つてはならない、而して過去二十年間未だ曾て一回も此義務を怠たりし事なきを神に感謝する。

五月二十七日(火)晴　朝青年會主事荒川哲次郎氏の訪問あり、昨夜の理事會の決議を齎らして今日限り余が青年會に於て聖書講演を爲す事を斷はるとの事であつた、之に何の理由の伴なふのでなく、唯今日直に斷はると云ふのであつて千餘の聽衆に大なる迷惑を掛くる事には少しも頓着しないのである、實に亂暴なる申出である、教會信者等の相互の間に於て常に取り來れる途であるが故に別に怪むには足らずと雖も、教會の腐敗も亦玆に至て益々甚しきを認めざるを得ない、

明白なるキリスト再臨の教義がある、聖書の言を信ずる者は之を疑はんと欲して疑ふ事が出來ない、茲に又「彼は萬物を己に從はせ得」るとありてイエスキリストは萬物の支配者即ち造主であると示してある、キリストの神性と彼の再臨、此の二つは相關聯する聖書の教義である、此信仰なくして使徒等の信仰はなかつたのである。

五月二十六日（月）晴　此日珍客二人の訪問があつた、其一人は札幌の同窓内田瀞君であつた、彼は今は白髮の老紳士である、然し學校の荒れ仲間であつたのは昨日であつたやうに感ずる、彼に十三人の孫さんがあると聞いて嘘のやうに思はれた、人生過ぎて見れば一場の夢であると言はう乎、然し夢ではない、事實である、貴重なる意味ある事實である、余は舊き友人に會ふ毎に余が此世に生れ來りしことを感謝せざるを得ない。內田君去りて間もなく同じく札幌時代の舊知小野琢磨君が訪問された、君と相見ざること三十年以上、別世界に於ける會合の如く

に感ずる、此日内務大臣の佛神基三敎の宗敎大家の招待があつた、余は勿論内務大臣に招かるゝの名譽に與らなかつた、然るに日本の社會が余の舊き著書を新たに歡迎するに會うて今や神のみならず人までが余を迎へつゝあるかのやうに感じた、人の迎接は如何いでも可として社會の迎接は政府のそれよりも貴くある、讀書社會の歡迎は內務大臣の招待に勝さる數層倍の名譽である、感謝、感謝!!

五月二十五日(日)晴 不相變好き安息日であつた、午後の會衆七百餘、田島進君「我國初代佛敎徒の熱誠」と題し惠心僧都法然上人の生涯の大略に就て話した、誠に好き「敎界革正演說」であつた、初めに佛敎を我國に植附けし人々は今の敎會の牧師監督等よりも遙かに熱誠の人等であつた事を示されて我等は大に感激せざるを得なかつた、次いで余は「天國の市民と其榮光」と題し腓立比書三章廿、廿一節を講じた、自分ながらに保羅の言に勵されざるを得なかつた、此所に

上の資産家なるべし」と、彼れ曰く「さうかな」と、斯く語りつゝ人間を神として祭る三島神社を見、水車を利用する小工業を視察し、北海道的田野の那須平原の逍遙を終り、再び汽車に乘りて宇都宮に至る、此處に有志三十餘名の會合を催し、余は現代に處する途に就て語る所あり、旅宿山下館に目下召集中の文學士關東學院長、柏木兄弟團前團長坂田祐君と同宿す、宇都宮の敎勢に著しき進步あるを見て喜んだ。

五月二十四日(土)晴　午前十時柏木に歸つた、午後中野長尾邸内に於て鐵道ミツション三十年紀念會が開かれ余も出席した、長尾半平氏に次で余も一場の感話を述べた、興味多き會合であつた、京都の靑木庄藏君來り夕食を共にした。警醒社書店より『内村全集』第壹卷初版既に賣切れの報に接した、一週間を出ざるに初版の賣切れとは余の長き著述生涯に於て初めての事である、此時に際し讀書社會の此歡迎ありとは不思議である、何やら大なる聖手(みて)が余を導き給ひつゝあるやう

の默示錄註解を讀み絕大の慰安に與つた、余は其四章三節を稱して世界最大の詩なりと云ふ。

五月二十三日（金）晴　雲晴れ旭日目映く、白雲綿の如くに關東平原を覆ひ、我等は其上に在りて日光を沿びつゝ下界を下瞰す、恰も天國に在りて地を望むが如し、快無窮、此莊景を見る丈けに此所に來る價値がある、朝食を終へ乘合自働車にて山を下る、四里九丁を四十分にて黑磯に達す、爽快極りなし、汽車にて西那須野に下車し、原野の中央赤田の双美園に果樹栽培を見る、梨と林檎とは實を結んだばかり、櫻桃は未だ熟せず、唯艸苺のみ少しく熟したれば園主之を摘取りて我等を饗す、果樹栽培、果物販賣等に就て語り、款待を謝して去る、之より驛まで一里餘、農事を視察しながら徐歩す、同伴の青木義雄曰く「銀行の支配人を從僕として旅行する先生は豪らい哉」と、余は彼に答へて曰く「此世の所有に於ては余は君に及ばず、然れども余に君の有せざるもの有り、差引するに余は君以

である、然し乍ら是れ初學者に解し得らるゝ書類ではない、希臘語と拉典語とを解するにあらざれば大分に利用することの出來ない書である。

五月二十一日（水）雨　兼ての計畫に從ひ久振りにて栃木縣に入つた、宇都宮にて青木義雄と會合し、黑磯に下車し、自働車にて午後四時半那須溫泉に着いた、櫻は散つた斗り、杜鵑の聲聞こえ、橙色の躑躅花鮮かに、誠に靜なる好き休息であつた、其設備は攝津の寶塚、相模の箱根に遠く及ばずと雖も、其素朴なる所に愛すべき點がある、關東平原が東に盡る那須山の麓は余の氣質に好く適うたる所である。

五月二十二日（木）曇　寒し、火鉢に凭掛りて一日を過した、然し好き休日であつた、那須與一の祈願所たりし那須神社の境内に入れば野州花咲亂れ、禽鳥囀り、愛すべき靜肅の天然であつた、殊に稍大形の懸巣鳥の枝より枝へと飛ぶ狀は石狩原野の昔を偲ばしめて獨り快笑を禁じ得なかつた、宿に在りてはザイス博士

日は是で擱筆する。

五月二十日（火）曇　山桝儀市東洋汽船會社新造船朝洋丸の船長と爲り近日處女航に就かんとする、依て彼と船との上に祝福を祈らんがために横濱に到り、港内に碇泊せる同船を訪ひ、船長室に於て余と船長と山村一等運轉士三人共に靜肅なる祈禱を捧げた、我等は此商船の惠まれて多くの人々に多くの幸福を齎らすの器として使用せられん事と、其新船長が之を運轉して過失なからん事とを祈つた洵に適當なる祈禱會であつた、我等はすべての新造船が斯の如くにして其處女航に就かん事を願はざるを得ない。或る思ひ掛けなき手蔓に由りH・A・W・マイヤーの大註解書九册我手に入り歡喜に堪へない、斯くして彼の新約聖書註解書全部二十册が揃うて余の書齋に列んだのである、大敎師の我が側に座を占めて呉れたやうに感ずる、マイヤーに勝る註解書はない、マイヤーとベンゲルとあり、之にゴーデーとランゲとを加へて新約聖書に關する智識の生粹は之を我手に收めたの

囁いて自身の腐敗を公表して之を矯正し得ないからである、余輩は又人身攻撃を爲さない、余輩は監督又は牧師の職に在て信者が爲す其行爲を攻撃する、監督の職に在る者が共配下の牧師が「聖書の天啓たるや論語の天啓たると其性質に於て異なる所はない」と唱ふる明白なる異端に對して一言の非難の矢を發せざる場合に於て監督の行爲を責むるは是れ人身攻撃ではない、是は職責怠慢の詰責である、是れキリストも使徒等も爲したる攻撃であつて福音の眞理を愛する者の何人たりとも爲すことを許さるゝ攻撃である、而して若し此攻撃をも爲してはならないと云ふならば眞理の擁護は到底爲すこと能はずである、「汝の室の爲の熱心我を蝕はん」とある（約翰傳二章十七節）、余輩は某々を攻撃しない、彼等自身に對しては多大の愛心を懷く積りである、然れども牧師として又は監督としての彼等の行爲にして教理上又は牧會上明白に非難すべき所があれば余輩は福音の眞理の爲に止むを得ず痛撃を加へる、其他是等の事に就て言ふべき事は澤山ある、然し今

敎會との關係を絶ち、純福音宣傳の爲に努力せられん事を祈らざるを得ない○敎會の腐敗は之を認むる、然れども之を公然攻擊するは愛の途に非ずとは牧師と敎會信者とが我等の革正運動に對する唯一の非難の聲である、然れども敢て問ふ敎會は公的團體ではないか、公的團體の腐敗を攻擊したればとて何の非難すべき所がある乎、殊に敎會の腐敗は余輩の公表を待たずして世間に能く知れ渡りたる事實である、例へば同志社前校長排斥事件の如き其詳細に至るまで此世の新聞雜誌に由て曝露されたる事實である、然るに余輩に要めて敎會の腐敗を沈默に附し置くべしと云ふ、斯る場合に於て沈默が愛の途なりと云ふならば愛は愚である盲である、基督敎の尊きは外界の攻擊を待たずして内より進んで其腐敗を矯むるにある、然るに既に世間に知れ渡りたる腐敗を自から矯正する能はずと云ふならば基督敎は自身を救ふ能はざる者であつて、斯かる宗敎は世を救ふの資格も實力も無い者である、而して現今の基督敎會が世を救ふに方つて無能なるは、愛よ愛よと

を終らなかつた事は我等一同に取り大なる幸福であると云はねばならぬ、實に過去三年間拗からざる心配を爲した、然し六度び勝つて二度負け、絶對的禁酒並に安息日聖守を實行して玆に最後の大試合を終りし事は大なる感謝である、榮光の幾分なりとも彼に歸て擧りしことを感謝する。

五月十八日（日）晴　不相變好き安息日であつた、午後の講演、來會者七百乃至八百、「最初の福音」と題し創世記第三章の後半に就て語つた、アダムと其妻とが罪を犯して神より離れしや否や神が新たに回復の途を開き給ひ、彼等其約束を信じて救はれたりし事を語つて自分ながらに甚だ愉快に感じた、聖書は徹頭徹尾福音である、之を語るに優さるの歡喜他に有る事なしである。

五月十九日（月）晴　好き休日である。臺灣古谷ハル子母子の來訪あり、友あり、遠方より來る又悅ばしからず耶の感がした。又目下滿洲傳道中の木村清松君より端書頻りに至り、君のために又自分のために甚だ喜んだ、君が腐敗せる異端

五月十五日（木）雨　終日旅館に立籠り、幾回となく湯浴(ゆあ)みし、食事と睡眠とに全日を消費した、働くのみが人生ではない、斯かる日も亦意味ある一日である、山を下れば大責任が待ちつゝある、然し郵便も來らず訪問客も無き一日は此世の一日ではないやうに思はれた。

五月十六日（金）晴　昨夜大雨、今朝快晴、相模灘(さがみなだ)より昇りし旭の光りに驚かされて床を離れた、日映(まばゆ)き日光を浴びながら杖を曳いて散歩した、鶯の聲谷に響き秀峰碧空に聳えて、エデンの園の我目前に開展せられしが如き感がした、午後二時山を下り五時間にして黄昏(たそがれ)に柏木の家に歸つた、內外の郵便物は大束(おほたば)となりて我を待つて居た、四十八時間、世と事業とを忘れて茲に復た多忙の人となつた、

五月十七日（土）曇　一高對慶應の野球大試合あり、一對零にて一高が敗れた甚だ惜しくあつた、然し我家の青年の爲には善き試錬であることを思うた、遊戲以外の事に於て第一に成て貰はねばならぬ、彼が全戰全勝を以て彼の野球的生涯

い、神の命である、聖旨を成らしめ給へである。

五月十四日(水)晴　『内村全集』第壹卷が出來た、天金洋布製の美本である、余の著書が斯る表裝を以て現はれたのは今度が始めてである、一册に付き二圓五十錢を讀者より請求するは甚だ濟まなく感ずる、祈る此新裝に由りて現はれたる此書が更らに救靈の御用を務めんことを○『全集』第一卷出で一大出版事業其緒に就きたれば警醒社主人の招待にて我等夫婦箱根小涌谷に遊んだ、山上の新綠愛すべく、山躑躅の眞盛であつた、昨夜の大活動に引替へて今日の靜肅、實に天壤も啻ならざる對照であつた、『全集』第一に收めたる『基督信徒の慰め』は彼女が始めて我家に來りし時に著はされたる書であつた、其れが二十七年後の今日、十七版を重ねて玆に『全集』卷頭第一に現はるゝに至りしは實に感謝の極である、而して我等同棲して玆に二十七年、共に遊山の快を貪りしは今回が始てゞある、人生苦しみ多くして樂み少くある、然し眞個の樂しみは其中にある、感謝すべき哉。

ひ「謝恩奬學資金」献納の事に就て相談した、余の差出せし趣意書に曰く「舊札幌農學校明治十四年度（第二期）卒業生内村鑑三、校恩を謝する爲に玆に少金額を母校の後身たる北海道帝國大學に納め、聊か後進奬學の資に供す、身は傳道の職に在り、金銀我に有るなし、唯與へられし少許を献じ謝恩の表徴となす云々」總長は喜んで受納せられ余の滿足此上なしであつた、夕飯の馳走に與り歡喜を湛へながら當日開設の「基督教界革正大演説會」の會場たる靑年會館に至れば聽衆已に堂に滿ち東京に於て曾て見ざる會衆であつた、伊藤一隆司會、靑木庄藏、土岐孝太郎、中田重治の諸氏の燃るが如き演説あり、最後に余は起つて「基督教界革正の必要」なる題下に語つた、爽快極まり無き演説會であつた、聽衆は堂に溢れ千七八百人も有つたらう、全會衆は大拍手大喝采を以て現今の基督教界革正の必要を認めた、玆に教界革正運動の火蓋が斫られた、新たに革正敎會が起るまで進むであらう、余自身に取りては新たに大責任を負うたやうに感ずる、然し止むを得な

五月十一日（日）晴　聖書講演不相變盛會、來會者七百餘、創世記第三章「人類の墮落」に就て語つた、ナカシ（蛇）は神言を變更してエバを欺いた、墮落の初めは神言其儘を信ぜざる事である、聖書神言の眞理は明かに此章に現はれて居る。此日高輪教會執事高岩君登壇し、余の爲に辯護せられた、結局余は自分より進んで青年會の高壇を去らない事に定めた、神が余を其所に置き給ふ間は牧師も監督も余を去らしむる事は出來ない、余に反對する人達には氣の毒である、然れども神の聲には從はざるを得ない、余に取りては青年會問題は當分の間之で決定したのである、余は唯忠實に聖書を講ずれば其れで余の責任は濟むのである。

五月十二日（月）雨　靜かなる好き休日であつた、京都より青木庄藏氏見え、教會の現狀、傳道の將來等に就て語つた。五月號雜誌が出來た、常例の通り祈禱を以て之を發送した、月每の感謝である。

五月十三日（火）曇　午後に至りて晴る、北海道帝國大學總長佐藤昌介氏を訪

五月九日（金）晴　書を全國の内外友人に飛して來らんとする革正演說會の爲に祈らんことを懇請した、成功の秘訣は祈禱に在る、我等斯かる時に於て多數友人の祈禱の援助を乞はざるを得ない○自分で芥溜の掃除を爲した、其底を淩ひ之を日光に當て腐敗の根を絕つた、斯の如くにして社會も敎界も革正すべきである、日光である、日光を入れて腐敗と暗黑とを驅逐すべきである。午後七時半より淀橋ホーリネス敎會に於て革正演說會準備祈禱會を開いた、出席者十二名、熱信と謙遜と愛とに充ちたる會合であつた、斯る準備を以て臨む演說會は成功ならざるを得ない。

五月十日（土）晴　南風强し、家の靑年一高野球團主將として早稻田大學と鬪ひ六對四にて敗る、然し病後の彼としては大出來と稱せざるを得ない、昨年來の勝越にて久し振りにて敗る、負ける事を知るも亦必要である、我等は左程に落膽しない。船長山桝來り例の通り種々の事を談じた。

つゝある、實に不思議である。

五月六日（火）晴　校正と讀書と手紙書き。

五月七日（水）晴　日曜講演の良き題目を求めんとて獨り井之頭公園に遊んだ而して清き水邊に木蔭を歩みつゝある間に創世記三章「人類の墮落」に就て語るべく決定した、多分好き撰定であつたらう。青年會事件甚だ不愉快である、教會に接して不愉快を免かるゝ事は出來ない、是れ其内に大なる腐敗の潛む確かなる證據である、教會と絶つにあらざれば純福音を說くことは出來ない、久し振りにて教會に接觸して其相も變らず狐と蝙蝠の巢であることが今更ながらに解つた。

五月八日（木）晴　創世記第三章を研究した、其傳ふる深き眞理が更に深く解つて有難かつた、夜高輪に伊藤一隆を訪ひ過去を語り將來を計りて非常に樂しかつた、舊札幌園が再び結合して福音の爲めに盡さんことを期し、故W・Sクラークの寫眞の前に祈禱を共にして別れた。

中に臨むであらう、聖靈の指導を仰ぐ。

五月四日(日)快晴　午後の集會益々盛である、來聽者は復活祭のそれよりも更に多かつたらしくある、久振りにて中田重治君高壇に立たれ、「荊棘中の百合花」と云ふ題に就て熱辯を揮はれた、余はヨハネ第一書四章七―十二節に依り「神の愛」に就て語つた、愛に就て語るは義に就て語るよりも自分ながらに甚だ快くある、聖書に示さるゝ神の愛に就て講じて自分が最も不完全なる基督者である事を感ずる、神よ此愛なき者を憐み給へと云ふのみである。

五月五日(月)快晴　書店に行き再臨反對の書二冊を購ひ來つた。米國地理學雜誌に博士グロスヴノルの筆に成る歐洲人種論を大なる興味を以て讀んだ、民族自決主義の唱へらるゝ今日此研究は逸すべからざる者である、人は皆神の子であつて相互に兄弟であるとの信仰の懷かるゝ歐米に於て今日人種民族の差別が高調せらるゝは奇異なる現象である、我等は民主々義主張の下に文明の逆行を目擊し

あつた、我國の再臨運動が斯くまで認めらるゝに至りし事は感謝すべきである。

五月二日(金)雨　引續き讀書、外に米國友人へ宛て三通の手紙を書いた、其内一通はアマスト在學中の同室の友C・H・マンウォーレンに宛てたる者である、一八八六年六月彼と別れてより玆に三十三年、此日突然目下フロリダ州に在る彼より書簡に接し懷舊の感に耐へなかつた、余は或る事に關し彼と議論を闘はし彼に對し不穩の言を發したりし事を思出し、赦免(ゆるし)を乞ふの言を彼に書送し大に肩(かた)の輕きを感じた、イエスに由りて繫がれし交友は年と共に消ゆるものではない、我等復活の朝に相會する時、互の罪を赦して歡喜の生涯に入るであらう。

五月三日(土)晴　同志相議(はか)り來る十三日夜青年會館に於て基督敎界革正演說會を開くことに定めた、發起人の內に平信徒にして錚々たる森村市左衛門翁、伊藤一隆、靑木庄藏、長尾半平、矢沼伊三郎、土岐孝太郞、高岩義政等の諸氏がある、愈々革正運動が始つたらしくある、之で基督敎界が一掃されて光(ひかり)と生命(いのち)が信者の

如くに感ずる。

四月三十日（水）小雨　新綠滴るばかり、愛すべき晩春の一日である。校正一先づ終り我を追窮する仕事あるなし、自づから讀書に耽り、愉快極りなし。新聞紙は英米二國に對して惡罵を放て止まない、去年の今日とは天壤の相違である、大統領ウイルソンとデモクラシーは今や甚だ不人望なる名である、之を唱へて誰も耳を傾けない、「それ人は既に草の如く、其榮はすべて草の花の如し、草は枯れ其花は落つ、然れど主の言は窮りなく存つなり」である、「民本主義は吾人が唱へ來りし基督教の眞髓なり」と表白せし教會同盟は今や何に由て其調和せんと努むる世に立つであらう乎、人に依て起たんとせし教會が人と共に斃れるのは止むを得ざる次第である、

五月一日（木）曇　ロバート・ロー、Ａ・Ｅブルック等の著書に由りヨハネ第一書を研究した。米國費府世界豫言大會委員より電報達し、祝辭を郵送せよとの事で

大なる混亂として終りつゝある。

四月二十八日(月)雨　腦休めのため獨り郊外蒲田に散歩し、菖蒲園を訪ひ、藤と牡丹の花盛りを見て大に慰むる所があつた、薔薇一鉢を買うて家苞とし其の蔓りて我が小園を蔽ふに至らん日を期しつゝ歸つた、人類の最善の友はやはり草木と動物とである○新聞紙は益々國際聯盟デモクラシーの失敗を傳ふ、失敗は當然である、是れが人類救濟の福音であると唱へし基督教の教師等は今より後如何する乎、神は僞豫言者等をして政治的偶像たる大統領ウイルソンを拜ましめ、彼(大統領)の計畫を失敗に終らしめて同時に彼等を仆し給ふのであるやうに見える。何れにしろ今や大なる審判は基督教會の上に臨みつゝある。

四月二十九日(火)晴　二三日前よりJ・A・ザイス著「默示錄註解」を讀み始めて非常に愉快である、玆に又新たに一大著述を發見したやうな感がする、苦々しき教會談牧師評を聞く間に崇高なる思想に接するは沙漠の中に淸き泉より飮むが

二十四五名、何れも一騎當千の士であつて見るさへ氣持が好くあつた、官に就きて赴任する者、官を退きて傳道せんとするもの、一室に相會して神の榮光の揚らんことを祈る、斯かる美はしき兄弟團が全國何處に在る乎、我等は讃美歌第三百二十一番（たゞ神のむすぶ愛の友あり）を歌うて感謝を以て別れた。

四月二十七日（日）晴　好き安息日であつた、午後の集會、益々盛會、會衆八百餘、舊友伊藤一隆司會、余の反對者等に對し大に余の爲に辯じて呉れた、彼は言うた「青年會の理事會が内村君を斷はる時は余が理事を辭する時である」と、會衆は拍手喝采の連續を以て彼の熱辯を迎へた、余は感謝の涙を禁じ得なかつた。續いて余は「人類最初の平和會議」と題し創世記第十一章一—九節を講じた、神を認めず彼を王の王、主の主として仰がざる會議のバベル即ち混亂に終るは當然なりと述べた、余は此講演を日本東京に於て爲さずして佛國巴里に於て爲したく思うた、巴里の平和會議も亦神を崇めずして人類の幸福をのみ計りしが故に今や

學校雄辯部に賴まれて太學青年會講堂に於て演說した、題は「新武士道」であつて學生凡そ三百人程の來聽があつた、終て後、二十九年振りにて高等學校の門を潜り運動場並に寄宿舍を參觀した。

四月二十五日（金）快晴　藤躑躅の花盛りである、森は新綠を以て輝き、生々の氣天地に充ちて實に新天地を目擊するのである。五月號雜誌原稿大略成り、夫婦諸共に近所の或る友人の家に夕食に招かれ舊き友人四五と會し樂しき一夕を送つた、神と天然と友人とは我等を援けて吳れる、我は安心して聖書の講演を續けるであらう。

四月二十六日（土）晴　藤井と共に雜誌原稿を纏め印刷所に送つた、自づから教會反對號となつた、止むを得ない。中田重治君九州關西より歸り教勢を傳へ大に我志を强うした、再臨の信仰が全國を動かしつゝあるは何よりも感謝すべきである。夜我家に法學士三谷隆信の廣島縣赴任送別祈禱感話會を開いた、會する者

演に對し抗議を申込みたりとは余の解するに甚だ困しむ所である、畢竟するに是等牧師達の眼中に只教會ありて福音の眞理あるなしである、彼等は已が教會内に如何なる異端が說かれやうが、其事には全く無頓着であつて、唯教會の勢力、否な己が勢力の維持せられん事にのみ汲々たるのである、而して論より證據である彼等の率ゐる教會と神學校との不振が何よりも明白に彼等の不信を證するのである、若し今イエス樣が日本に現はれ給ふならば、彼は是等牧師監督神學博士等に向つて言ひ給ふに相違ない「噫禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ、そは汝等天國を人の前に閉ぢて自から入らず且入らんとする者の入るをも許さゞればなり」と（馬太傳廿三章十三節）、寔に問題は教會對無教會ではない、再臨對非再臨である、偶 基督再臨の信仰が無教會主義者に依りて提唱せられ信仰界を感動するに至りしが故に非再臨の教會が今更の如くに目を醒まし、彼等が今日まで不問に附し來りし無教會主義を驅逐せんとて微動を始めたのである〇此日第一高等

四月二十三日(水)曇　余は福音を説きたくある、說かずには居られない、「若し我れ福音を宣傳せずば實に禍なり」である、然れども余は今の腐敗せる敎會、其監督神學博士等と關聯して聖き福音を說くことは出來ない、「光と暗と何の干はることか有らん、キリストとベリアルと何の合ふこと有らん」である(コリント後書六章十四節)、「死し蠅は和香者の膏を臭す」とあるが如く敎會の監督神學博士等と關聯して受膏者の香しき福音は穢されざるを得ない(傳道之書十章一節)。

四月二十四日(木)晴　余は今年に入りてより青年會の高壇より三回に亘りて創世記第一章を、四回に亘りて馬太傳第二十四章を、六回に亘りて哥林多前書第十五章を、其他詩篇第十九篇同く第二十三篇を福音主義の立場より講じたのである、是れ隨分の努力でありしことは此事に從事したる者の能く知る所である、然るに小崎老牧師平岩監督等東京の牧師達は青年會に於ける余の事業を評するに方て一言の是等福音的努力に及ぶ事なく唯余が無敎會主義者なりとの故を以て余の講

の墓を見舞うた、之を佛寺に託するも善き良心を以て之に詣で、花を以て飾り、住職に對し厚き謝禮を表し、死者を紀念して其福祉を祈ることが出來る、我等の「ヤソ」たる事は我等が佛寺に墓參することを少しも妨げない。

四月二十二日(火)南風曇　世に圖々しい者とて教會と教會者の如きはない、彼等は自分の腐敗墮落を指摘せらるゝや曰ふ「腐敗はあらん然れども人は皆な不完全なる者なり、殊に愛は凡そ事覆ひ包むと云ふ、腐敗を指摘するが如き是れ愛の途に非ず」と、斯く云ふ彼等が愛の人である乎と云ふに反對に其正反對である彼等相互の事業の批評惡罵は彼等日常の食物である、然るに自身其腐敗を指摘せらるゝや聖書の言を引き「凡そ事覆ひ包み」と云ひて自分の腐敗の覆ひ包まれんことを要求する、彼等は自身人を愛せず而して自分等の人に愛せられん事を要求する、洵に味を失ひたる鹽とは彼等の事を云ふのである、故に彼等は途に棄てられて不信者にまで足にて踐まるゝのである。

四月二十日(日)快晴　復活祭である、小崎牧師、平岩監督等の反對に會ひしに關はらず今日も亦廣き靑年會の講堂は余に供せられて余はパウロの復活論第五回を其高壇より講ずるの名譽と歡喜とを有つた、來聽者堂に滿ち九百乃至千人も有つたらしくある、實に開講以來の盛會であつた、敎界の元老等に排斥せられて却て公衆に歡迎せらる、元老諸君余を排斥して却て余の傳道を援けて吳れたのである、感謝、感謝。閉會後客室に於いて理事日疋信亮君と會見し、敎會革正に就き大に議論を鬪はした、君と余とは精神を共にして方法を異にする事を發見した陪席者十餘名と共に祈禱を捧げ堅き握手を交へて別れた、誠に信者らしき會見であつた、如斯くにしてこそ我等は說を異にしながら相互を敬愛することが出來るのである〇昨日船長山桝の家に女兒が生れた、余は彼女を勝子と命名して我等近來の勝利の連續を祝した。

四月二十一日(月)快晴　此日午前横濱水哉と共に先愛嘉壽子並に祖父長成君

て山に行いて天然の林を見ることが出來る、結局は今の儘にて幸福である。

四月十九日（土）曇　昨日の『國民新聞』は其論説欄に於て靑年會事件に關し余と余の信仰に對し深き同情を表し、痛擊を余の反對に立つ牧師等に加へた、實に不思議なる事象である、『國民新聞』は組合教會とは因緣淺からざる者と全體に解せらるゝに關はらず此新聞にして此態度に出づ、教會の運命已に定まれりと謂つべしである、然し戰は余のものではない、神のものである、神は民の聲を以て其聖旨を教會と牧師に傳へ給ひつゝある、其聖名は讃むべきかな○內村嘉壽子永眠の日である、彼女逝て以來茲に二十八年、所謂「第一高等學校不敬事件」に引續き彼女の永眠は余に取り彼女に取り言ひ難き悲痛であつた、之を思うて熱涙の湧き出るを禁じ得ない、然し神は我等と共に在し給うた、彼女と共に勝利を讃美する時は直に來る、其時彼女は「國賊」の妻としてに非ず、恵まれし者の耦者として聖者の前に立つであらう。

四月十七日（木）曇　今朝の『時事新報』は靑年會高壇使用に關する余の辯明の寄書を載せた、斯かる事が社會問題として取扱はるゝに至りしことを喜ぶ、余は敎會に訴ふるも無益である、直に廣き社會に訴へる、斯くなして基督敎を狹き敎會のものとなさずして廣き國家社會のものと爲すことが出來る、正義は公明を愛する、敎會の暗黑を排ふの途は公然之を社會問題となすにある。

四月十八日（金）晴　今日も亦澤山に自分の書いたものを讀んだ、即ち『全集』の校正を爲した、餘り愉快なる仕事ではない、然し腐敗せる敎會の干涉を受けて傳道するよりも遙に優である、若し余の敎會があるとすれば余の著書である、之に何人も干涉する事が出來ない〇午後市中に或る富者の家を訪うた、一つ羨ましいものがあつた、其れは邸內に築かれし天然の林である、市內屈指の地に熊笹の繁茂するを見るは振つて居る、神が若し余に巨萬の富を賜ひしならば余も亦同じ物を築いたであらう、然し必しも富者と成るには及ばない、余は今日の身分其儘に

あるやうに思はれる、小崎氏は曾て氏の經營せる神學校に余を招いて講義せしめた事がある、又平岩監督に於ては氏が甲府メソヂスト教會の牧師たりし時に態々余を東京より招いて三日間に亘りて余をして氏の教會に於て應援演說を爲さしめた事がある、而して兩氏が斯の如くに余を使用せしは余の無教會主義が能く知れ渡りたる時であつた、自分等の便利なる時には余を招いて事業を援けしめ、而して今に至りて余の靑年會の講壇に立つを非難す、利己主義も甚だしいではない乎然し今の基督教の牧師とは大抵は斯んな者である、困つた者である。

四月十六日（水）快晴　柏木の春は美しくある、靑葉の內に八重櫻と梨花とが混る、年に一回地は天國の裝ひに輝く、樂しきかな○例に由て校正に半日を送る夜兄弟團の相談會があつた、教會の反對に對し我等はイエスが取り給ひしやうな態度を取ることに決議した、會する者二十餘人、皆働き盛りの人達であつて見るさへ氣持が好くあつた。

り無教會主義を唱へざる積りである、乍然余の如き者が純然たる教會者なる小崎氏又は平岩氏等の眼に危險人物として映ずるは無理ならぬことである、事は信仰の相違であつて如何ともする事は出來ない、余は福音をさへ說き得れば宜いのであるから何時たりとも青年會の講壇を去る、講壇は他にも之を得る事が出來る、唯此際平和的に青年會と別れんと欲する、永久の提携は多分不可能であらう。

四月十五日（火）曇風雨　少しく暇を得たれば荒川堤に五色櫻を見んとて家の者を伴ひて出掛けた、然れども人と塵とに惱まされて花を見ずして歸つた、月の十五日の事なりければ東京市民が總出となつて花見に出掛けたやうである、其陋態を見ては人種的差別の撤廢も甚だ覺束ないやうに見えた、歡樂甚だ可なりと雖も殊更らに狂するには及ばない、明治政府五十年間の教育事業の我國民を文明化する能はざりしを見て悲んだ○青年會事件引續いて問題である、余自身に取りては良き信仰の試練である、小崎牧師平岩監督の余に對する反對は甚だ自家撞着で

て常に排斥されつゝある者である、排斥又排斥、排斥運動の行はれて居ない教會は何處に在るか、彼等公然と余の唱ふる福音に反對し得ずして青年會の役員に迫りて余の講演を中止せしめんと計る、淺墓なる人等なる哉、余の講演に由て倒れるやうな教會は倒れる方が宜いのである、而かも余の講演に由て倒れるのではない、教會に生命の福音が絕えしが故に倒れるのである、眞の教會は「陰府(よみ)の門も之に勝つ能はず」と云ふではない乎（馬太傳十六章十八節）。

四月十四日（月）晴　朝雜司ケ谷の墓地に父の墓を見舞うた〇『宗教通信』、『時事新報』等に由て青年會事件が終に世間に公けになつた、『時事』の見出(みだし)に曰く「教會打破の內村氏が教會での傳道は矛盾だと小崎弘道氏が抗議＝組合教會と青年會の紛擾」と、何れにしろ斯かる問題が東京の大新聞に大活字を以て揭げらるゝに至りしは基督教のために賀すべきである、余は青年會に抗議せる小崎氏に對し深き同情を表せざるを得ない、余は勿論基督教的ゼントルマンとして青年會の講壇よ

りは寧ろ有害であつた、蓋し同じ事がG・A・スミスの著書に就ても言ふことが出來やう、何れにしろ英米兩國には瑞西國の聖書學者ゴウデー、ガウスンの如き學者は見當らない、如何見ても英米兩國はデモクラシーの本場丈けあつて信仰的には其れ丈貧弱である〇午後の青年會の講演會引續き盛會であつた、來會者七百名以上あつたらしい、醫學士藤本武平二、醫學上より見たる斷食の效力、善を爲すための機關としての身體に就て語り、多くの貴き暗示を與へた、余は哥林多前書十五章二十九節以下四十一節までに就て講じた、復活の方法並に復活體の性質に就きパウロの主張を近世科學の立場より辯護せんと努めた、茲に天然學者としてのパウロに會合して會心の至である、彼は彼の有せる科學的思想を以て彼の信仰を說明せんと試みた、我等廿世紀の基督者も亦彼に傚うて大膽に信仰の科學的說明を試むべきである〇小崎牧師平岩監督等に由て始められし余に對する排斥運動はまだ止まない、實に苦々しい事である、彼等余を排斥する者は自分等の教會に於

しく、停車場は混雑を極めた、洵に盛んなる事である、然し余自身は少しも羨ましくない、余に歐米行きの欲は今は少しも無い、余は『全集』校正と雜誌編輯と日曜日聖書講演とで日本に、然り東京に、然り柏木に止つて居たくある、余は歐米に行くも柏木の書齋に在て學び得る以上の事を學び得やうとは思はない、行かんと欲する者は行けよ、余は行かざらんと欲する者である、余の世界は柏木のホームである、其處に余の王國がある、勞働の園 Task-garden がある、地上の天國がある、何を選んでデモクラシーの本場たる米國や過激思想の培養地たる歐洲を訪はんや。

四月十三日(日)快晴　八重櫻の滿開である、復活問題の研究の好時節である今年程善き了解を以て哥林多前書十五章を讀み且講じたる事はない、基督再臨の信仰は確に聖書了解の鑰である、今に至り蘇蘭土の聖書學者A・ブルースが如何程余の信仰を誤りし乎が解つた、彼の著書のために投ぜし金は無益でありしよ

ある。

四月十一日（金）曇　北風にて寒し、山岸と共に警視聽に往き『聖書之研究』に於て時事問題を論じ得るの權利を得んが爲に保證金として千圓を納め其手續を了つた、斯くして爾今本誌に於て國際聯盟、平和會議、世界改造等を論ずるも法律に觸れるの虞なきに至つたのである、我等は此世の事に就て論じたくはない、然れども來らんとする神の國に就て論議するに方り時には此世に就て語るの必要がある、預言は神と信者の立場より見たる人類の歷史である、故に預言研究に從事するに方て時事問題を避くることは出來ない、新聞紙法に順て此誌を發行するの必要は茲に在る、實に止むを得ないのである。

四月十二日（土）快晴　父の命日である、彼れ逝きてより茲に十二年、感懷に堪へない、彼の靈主に在りて安からんことを祈る、再會の時を待つ○田村直臣君歐米漫遊の途に就きたれば彼を東京驛に見送つた、他に五六名士の出發があつたら

重櫻は散り初めて庭園に花の吹雪を見る、明治二十四年四月廿一日に嘉壽子を葬つた日も斯んな日であつた、同四十年四月十五日に父の遺骸を送りし日も斯かる日であつた、而して我等が互に相見る日も斯かる日であらう、樂しき哉○雜誌四月號が出來た、發行日より一日早くある、爾今此分にて續けたいものである○此夜兄弟團祈禱會不振。

四月十日（木）曇　一重櫻未だ散り終らざるに八重櫻將さに開かんとす、海棠山吹一時に咲亂れて衷なる感謝と相應じてヱホバの園に在る乎の如くに感ずる○今井館に於て入間田悌吉對太田節子の結婚式を擧ぐ、靜かなる質素なる好き式であつた、余が司りし第二十一回の結婚式である、入間田は宮城縣船岡村の者、大阪醫専出の醫學士である、十數年に涉り信仰を共にし來りし者である、節子は大阪商人太田又七の長女である、彼れ亦信仰の同志である、新家庭は大阪に於て作られんとするのであつて、我等又關西に於て新たに信仰の一堡壘を得たる次第で

ない。

四月八日（火）晴　談話は引續き野球戰勝で持切りである、祝詞が來り祝電が來り、會ふ友人每に「お芽出とう」を浴せらる、好い氣持である、福島縣原瀨半次郎君の左の祝詞は敎友一同の意を盡したものであらう。

謹啓、御令息樣又々光輝ある勝利を得られ候趣き大慶に存候、權威と能力とを有るもの常に我等の背後にあり給へば我等に敗れなるものある筈無之と存候、戰も亦我等の戰にあらず至上者の榮光是によりて顯はるゝの具たるべきものと存候、此度の勝利決して偶然にあらず全く攝理中の一現象たるを認められ候、不取敢右御祝詞申上候敬具。

斯うなりては野球も遊戲ならずヱホバの戰である、何だか舊約聖書にモーセかヨシュアの傳記を讀むの感がする〇夜平川氏の聖書學舍に於て聖書地理第一回の講演を爲した。

四月九日（水）快晴　年中の第一日である、鶴の舞ひさうな好天氣である、一

きて居る、偉大なる哉。

四月七日（月）晴　朝獨り市内の櫻を見た、四谷見附より濠端に添ひ紀の國坂を下り赤坂見附に至り、それより永田町、三宅坂、半藏門前、英國大使館前と到る所に咲き亂れたる花を觀て嬉しかつた、歩いて見たる東京の市は電車の中より見たる者とは違ひ甚だ美くしい市である、其中に湖水に類したる池があり、天然林に似たる森がある、若し暫時たりとも電車と自働車との通行を禁めて獨り此花を賞したならば理想的であらうと思うた、濠の水に映る散りかゝりたる花を觀て、歌人伊勢の「年を經て花の鏡となる水は、散りかゝるをや曇ると云ふらん」を口吟しながら家に歸つた〇午后野球戰々勝祝賀會を開いた、赤飯を炊き友人を招き、我等と歡喜を共にして貰つた、全國の同志數千人が大なる同情を以て勝敗如何と待受け呉れたと思へば感謝に堪へない、野球競技は新武士道精神の表現である、我家の青年之に勝ちて福音化されたる武士道の上に立つ我家の長久を祝せざるを得

主將であり投手である此一戰に敗れては尠からず我家の唱道の名譽を傷けざるを得ない、故に此一戰丈けは勝つて貰ひたかつたのである、而して願ふ通りに勝つて我等はヱホバの神に感謝せざるを得ない、子の勝は父の勝を豫表するのであらう、我家の唱ふる福音は勝つて神の榮えは更らに揚るのであらう。

四月六日（日）晴夜雨　野球戰勝利にて全家活氣立ち歡喜限りなし、武士道萬歲、獨立的基督教萬歲、今度の勝利も亦ヱホバの神の賜物なりと信ずる、我等は誇らない、感謝する、彼の聖名の揚りしを感謝する○午後の聖會不相變盛會、聽者七百餘、神戶の高谷道男、好本督の兩君再臨の福音を證明し、續いて余は哥林多前書十五章二十節以下二十八節までに就て講じた、パウロの思想が其絕頂に達したる箇所であつて講ずるには甚だ困難であつたが然し甚だ幸ひであつた、「是れ神總の者の中に在りて總たらん爲なり」と、是れ宗教と哲學との終局である、之よりも深い濶い言葉のありやう筈はない、Panta en pasin　宇宙と人生とは之で盡

議である、イエスの言ひ給ひし「多くの人々東より西より來りてアブラハム、イサク、ヤコブと偕に天國に坐し、國の諸子（敎會信者等）は外の幽暗に逐出され其處にて哀哭切齒することあらん」との言は斯る事を指して言うたのであらう（馬太傳八章十一―十二節）。

四月五日（土）半晴　雨降らんとして歇む、一高對三高野球大試合の當日であり其勝敗に氣遣はれて碌に仕事が手に就かなかつた、親心と云はう乎信仰不足と云はう乎、然し之が人情であるとは確に言ふことが出來る。市川クニ石狩の山奥五の澤より來り家事を助くる事に成つた、又函館の松下熊槌君、神戸の好本督君來り、遠來の友を迎へ愉快であつた、二時間に涉り好本君の信仰實驗談を聽き大に敎へらるゝ所があつた。午後六時に至り野球大試合四對二にて一高勝利との報に接して、思はず萬歲を叫んだ、事は遊戲であるが其内に主義が籠つて居る、我家の青年は基督敎を告白し、絕對的禁酒、安息日聖守を固持して居る、而して彼が

すの感がする、デモクラシーと大統領ウイルソンを謳歌し來りし基督教の教師顏色なしである、巴里講和會議は近代の「バベルの淆亂」として終るであらう（創世紀第十一章參考）、而して智者等は耻を取り神の榮光は揚るであらう○基督教の諸雜誌は基督再臨の事に關し余に反對なるに、眞宗大谷派の機關雜誌『無盡燈』の余並に再臨の信仰に對し滿腔の同情を表するを見るは不思議である、其三月號に於て廣瀬南雄氏は三頁半に涉る贊成同情の辭を聯ねた、其一節に曰く

私は現在、内村氏及び其一派の人々が基督敎徒としてのかくの如き信仰に對して大なる嘆美と深き同情とを禁じ得ない者なることを玆に告白する。そして私自身、氏等の信仰とその態度とより尠からぬ啓發を受けて、永き間遑々乎たりし自己の心裡に一點の燎火を與へられ自己の奉ずる宗教と經典とに對する新らしき眼の開かれたることを深く感謝する。

是れ余が再臨の信仰に關し今日までに受けたる最も溫き同情の辭である、而して最も冷たき聲が基督教の側より聞えて、最も溫き聲が佛教の側より響くとは不思

主義は唱へない積りである、然れども孰れでも宜しい、青年會が止めろと言へば何時でも止める、但し教會の先輩の反對丈けでは止めない、今や彼等の唱道するデモクラシー(民本主義)の時代である、故に宜しく民の聲に聽くべしである、平信徒の聲に聽くべしである、教會監督の如き是れ獨裁政治の遺物である、今の時に方りては全然廢止すべき者である、二十世紀の基督者は監督の聲に傾ける耳を有たない、我等は神と平信徒とに訴へ、彼等の判決に從ふであらう。

四月三日(木)晴　紀元節である、滿都の人花に醉ひ愛國も憂國もあつたものに非ず。午後田村直臣君の牧する巣鴨教會の獻堂式あり之に列席した、洵に完備せる教會である事を知つた。家の青年の野球試合の期日近づき一同緊張せざるを得ない、遊戯でさへも斯くあるを知つて眞個の戰爭のどうであるかが想ひやられる、勝敗何れに決するも我家の神の榮光彼に由りて揚らんことを祈る。

四月四日(金)晴　國際聯盟成功の希望益々細くなり預言の光の益々輝きを增

へない。

四月一日（火）晴　雜誌校正が主なる仕事であつた、午後七時より下澁谷平出慶一君の家に於て君に由て設立られし聖書學舍の開校祈禱會に臨んだ、募集に應ぜし生徒二十餘名、何れも獨立の平信徒である、此種の學校として大なる成功と稱せざるを得ない、余も幾分か之に關與する心算である、其永續を祈る。

四月二日（水）快晴　櫻花爛漫新春第一の日である。聞く一昨日青年會館に市内牧師の會合あり、出席百餘名、余の日曜講演に關し激論ありたりと、主なる反對者は組合教會の耆宿小崎弘道氏並に日本メソヂスト教會監督神學博士平岩愃保氏であつて、兩氏が余に反對する主なる理由は余が無教會主義者なるが故に若し余にして長く青年會の講壇を擅にするならば市內教會の存在を危くするの虞れありとの事であると云ふ、誠に恐縮の次第である、余は人も能く知る如く現在の教會なる者には反對であるが、基督的ゼントルマンとして青年會の講壇より無教會

に能く似て居る、「張る」、「彈く」、「爆發す」、是れ皆な「春」の原意である、生命内に充ちて外に發するの意である、余は此日復活に關はる好き說敎を春の野より聞いた。

三月三十日(日)晴　相變らず喜ばしき安息日であつた、電車沿道の櫻花開き我が復活の講演に力を添へるやうに見えた、會衆五百人以上と見受けた、パウロの復活論第二回を講じ、肉體復活の敎義を取除いて基督敎は其本より崩れざるを得ざる事に就て語つた、純福音の善き證明を爲したと思ふ、集會終へて後に有志の祈禱會を開いた、止まる者百餘人、靈に充ちたる會合であつた。

三月三十一日(月)晴　庭内の櫻花開き我家の春である、午後家人と共に上野に七分咲きの櫻を見た、老樹の多くは市中より吹送らるゝ煤煙のために枯れ、唯若樹のみ咲き亂れたるを見て近世文明を詛はざるを得なかつた、花の都は煙の都と化した、是れ進歩ではない退歩である、而してすべてが此類である、憤慨に耐

道德に貧しき者、すべて福ひである、神の國は卽ち彼等の所有であるからである之に反して富める者の天國に入るは駱駝が針の孔を穿るよりも難くある、貴族、富豪、學士、博士、我心に何の疚しき所あるなしと誇る此世の聖人君子、彼等の天國に入るは實に駱駝が針の孔を穿るよりも難くある、余自身は到底「富める者」の敎師ではない事を悟つた、殊に高等敎育を受けたりと稱する男と女とが厭になつた、彼等の內幾人が今日まで余を失望せしめたか判らない、彼等は到底イエスの詬誶を負ひて營外に出ることは出來ない（希伯來書十三章十三節）、「貧しき者は福ひなり」、實に其通りである。

三月二十九日（土）半晴　聖書硏究に有益なる時を有つた、深い聖書學者はやはり歐洲人の內にある、米國人には靈の深い事は解らない、益々切に其事を感ずる○午後久方振りに獨り郊外春の野に散步した、梅は散り桃と梨と木蘭とは花咲き、水暖かにして蛙既に池の內に動く、「春」は「張る」の意であらう、英語の spring

つた。

三月二十七日(木)曇　校正と手紙書きにて全日を費した。米國行を斷念した、此國に留つて夏中働くことに決心した、自分から洋行を計畫したのではない、友人から頻りに勸められたのである、それが爲に多くの氣兼ねと心配とを爲した、有難迷惑とは此事である、然し愈々行かないと決定て心が晴々した、余の事業は此國に於てである、再び外遊するの必要は少しもない、神の事に關し永生の事に關し智識を求むるに外國に行くの必要はない、此國に在て充分に知ることが出來る、余には近頃の我國人の洋行狂の理由を發見する事が出來ない。或事に就き希伯來書十三章四節に就て終日考へた。

三月二十八日(金)雨　校正なし、全日を來客の接待と聖書の研究とに費した、路加傳六章二十節「汝等貧しき者は福なり神の國は卽ち汝等の所有なれば也」との言に就て考へた、文字通りに眞理である、金錢に貧しき者、知識に貧しき者

者は榮化し、一同主の許に携へ擧げられて其所に歡極まるの再會があるのであらう、「天地を震動ぐラッパの一聲に、甦へるらん春の曙」とは斯かる日であらう。

此日藤井と共に四月號雜誌原稿を纒めた、例月より五日早くある。

三月二十六日(水)晴　北風强くして寒し。夜祈禱會あり、田崎安榮の感話に强く余の心を打たれた、彼は曰うた「キリストの受難と復活とに由り神は我等信ずる者のすべての罪を拭ひ去り給うた、今や神の前に信者の罪なる者はない、信ずる我等は後日一度自分等の罪を曝露されて耐へ難き苦痛を覺ゆるの虞はない」と、是れ實に福音の深い眞理である、イザヤ書四十三章廿五節に曰く「ヱホバ曰ひ給ふ、我れこそ我れ自身の故によりて汝の咎を消し汝の罪を心に記めざるなれと」、神キリストに在りて信者の罪を赦し給ふ其の赦しは彼が罪を忘れ給ふ赦しである、感謝此上なしである、此言信を聞いて余の心は躍らざるを得ない、此赦しに與りて余は最早罪を犯すことは出來ない、實に近來稀なる有益なる祈禱會であ

三月二十三日（日）半晴　快き春日和であつた、午後の會合相不變樂しくあつた、來聽者六百乃至七百、其内一人のヒヤカシがあつた、特に制裁を加へたれば彼は退場した、彼に取り拔良の說教であつたらう、此日哥林多前書十五章の研究に入り、復活の何たる乎、基督肉體の復活は基督教の根本義である事に就て語つた、パウロの基督教と現代人のそれとの間に天地の差の在りし事に就て述べて甚だ滿足であつた、何れにしろ聖書研究に對する聽衆の興味（インテレスト）の益々增進しつゝあるを感謝する。

三月二十四日（月）雨　無爲無能の月曜日である、書店を廻り友人を訪ひ夕食を強請し、雨を冒して夜九時家に歸つた、何も爲さなかつた、然し何か爲したのであらう。

三月二十五日（火）快晴　櫻の蕾（つぼみ）膨らみ鳥囀（さへづ）り、空は晴れ渡りて富士の白頂を書齋の窓より眺望す、復活の朝のやうなる春氣色（はるげしき）である、斯（か）る朝に死者は甦り生

義者、悉く余の反對者である、彼等宗教の事に關しては相互に大に說を異にするも再臨に反對するの一事に於て其步調を共にする、「ピラトとヘロデ先には仇たりしが、當日互に親しみを爲せり」とあるが如く（路加傳廿三章十二節）、先の政敵教敵も福音の眞理に對する時には互に親しみて同一の鉾を向けるのである、余等の名譽此上なしである。

三月二十二日（土）晴　原稿日來りペンの運び忙しくある。彼岸の中日である主婦萩の餅を作つて呉れたれば大なる者七箇を平らげた、彼女は外に技倆なしと雖も「お萩」を作る事に於ては日本第一なりと自分で自慢する、而して余も亦此自慢を承認せざるを得ない、何れにしろ二十七年間每年春秋二回づゝ規則正しく彼女手作の此甘味を供給せられて余の趣味と彼女の技倆とは合致せざるを得ない、寒いも暑いも萩の餅の出來るまで、今年も先づ是で寒氣は去つて、眞個の春が來たのである。

其内に眞の神の殿を築かんとしつゝあるのである、基督教が歐洲に於て衰へつゝあるは最も瞭かなる事實である、高潔なる文士ヴンエーデン氏の如きすら教會以外に「神の殿」を求めつゝあるのである、深く同情すべくある、同時に又大に警むべくある。

三月二十一日(金)晴　昨夜四谷見附三河屋に於て太平洋教友會の晩餐會を開いた、催主は東洋汽船士官四人、主賓は目下在京中の桑港小林政助君夫婦、之に我等夫婦並に東京教友の代表者二人を加へて樂しき家庭的會合であつた、各自凡そ三人前の牛肉を平らげ健康狀態に在るを證明した、如斯にして我等の友誼は繫がれ又强めらるゝのである○本月九日發行の純理主義の英字新聞ジャパン・クロニクル紙も亦基督再臨反對の論文を掲げて居るを見た、クロニクル紙は非戰論の事に付き今日まで余の賛成者で又辯護者であつたが、今度は明白に余の反對者として立て痛く余の信仰を攻擊した、斯くてオルソドックス、ユニテリヤン、純理主

歐洲宗教學者の想像は敬ふべくもあれば亦嗤ふべくもある、是れ詩篇九十七篇七節に謂ふ「もろ〳〵の神よみなヱホバをふしをがめ」とある言を今直に實現せんとする事である、余は諸宗教の統一は如斯くにして出來る者であると信じない、是は人の爲し得る事でなくして神御自身が其定め給ひし時に於て爲し給ふ事であると信ずる、我等基督者の今爲すべき事は神の此御計畫、此御約束を宣傳ふるに在る、人が神に代て此超人間的事業を成就せんと努力するに非ずと信ずる云々と余はヴンエーデン氏に書贈つた、此書簡が彼の手元に達する時に彼は如何思ふ乎余は勿論知らない、然れども察するに余の書簡は蘭譯されて彼の主宰の雜誌なる『アムステルダメル』に掲載せられて多くの讀者の批評を招くであらう、畢竟するに歐洲に於ける多くの思想家宗教家等は舊來の教會に慊らずして之を去ると同時に單純なるイエスの福音をも棄てつゝあるは事實である、彼は舊教新教兩つ乍らの教會を「神の殿」として認むる能はざるが故に新たに「光の市」を建設して

て手紙を書いた、彼は今や世界的に知名の思想家である、彼より達せし最近の書簡に依れば彼は目下「光の市に於ける神の殿」の計畫最中にして其圖案は既に出來上りしと云ふ、彼の計畫に依れば先づ中立國所屬の一嶋を選み、其内に一市を建設し「光の市」と稱して世界各國より純潔崇高の人を招いて其市民たらしめ、而して市内中樞の地に「神の殿」を建築し、之を圍繞するに世界各宗教を代表する神殿佛閣の類を以てするに在ると云ふ、實に偉大なる計畫である、而してヷンエーデン氏は彼の此計畫に對し余の賛成をも求め來りたれば余は腹藏なく余の意見を書いて彼に返答した、彼の思想たるや遠大にして彼の計畫たるや嶄新なりと雖も余は其實現を疑はざるを得ない、其困難なるや國際聯盟に異ならず、言ふべくして行ふべからざる者である、イエスキリストの御父なる眞の神の殿を取卷くに佛教の寺院、神道の神社、回々教のモスクを以てする事の困難は我等非基督教國の日本に在る者の充分に解し得る所である、然かも斯かる事が出來得べしと思ふ

して始ありて終なき者である、殊にキリストに在りて寢れる者として彼れ再び臨り給ふ時に甦らされて我等と再び會ふ事の出來る者である、信者の誕生日は永遠に生くる生命の第一日である。故に永遠に紀念すべき日である○近頃讀みし書にして最も有益なる者の一は米國長老教會教師フォスヂック著『不朽生命確認論』である(The Assurance of Immortality by H. E. Fosdick) 僅々百十六頁の小著述ではあるが近世思想の立場に立ちて此舊き問題を論究せし所、嘆賞の外はない、死後の生命は決して論證し難き事實ではない、宇宙を合理的實在物として見る以上、死後に生命の存續する事は避け難き結論である。

三月二十日(木)晴　原稿日には猶ほ一日あり未だ筆を採る氣にならない、ルートハート著『約翰傳註解』第三卷を取出し第二十章イエスの復活に關する記事を研究した、遉に聖書學の大家である、其見解に非凡なる所がある、米國の聖書學者などの及ぶ所でない○和蘭アムステルダム近郊ブッサム在住ヴンエーデン氏に宛

て一日を送つた、午後友人瑞西普及福音教會宣教師フンチケル氏の訪問あり一時間餘り快談した、ツリッヒ大學に神學を修めし彼は余が基督再臨を信ずるが如くに信ぜずと雖も深き同情と敬意とを以て此信仰を聽いた、「能く解ります、能く解ります」と彼は繰返して言うた、彼が驚きし事は余が再臨を信ずる事ではなかつた、メソヂスト教會、聖公會、日本基督教會、組合教會と稱するが如きオルソドックス教會の教師等が之を信ぜざるのみならず之に對して反對の態度に出づる事であつた、さすがはツキングリの生れし國に成長し基督教の教師である、彼は再臨の信仰に對して米國の宣教師や日本の神學者が取るやうなる嘲弄的態度を取らない、彼は眞面目なる信仰の價値を知る、故に彼と余とは信仰箇條を異にするも信仰上の善き友人たる事が出來る。

三月十九日(水)曇　春暖俄に催し櫻花綻びんとするの氣候である、ルツ子の誕生日である、彼女が生きて居る者として此日を紀念した、彼女も亦靈なる者と

雖も心の底は同じである、各自の最善を盡して斯國斯民の爲に盡さんとする點に於て一致して居る、殊に松村君と余とは馬鹿正直なる點に於て善く似て居る、晝飯の馳走に與り、拜天堂を觀覽し、三人共に撮影して別れた、田村君は六十二歲、松村君は六十歲、余は五十九歲である、誠に紀念すべき會合であつた。松村君を辭して後に我等二人市中に出で、再び某所に會食し、連立て富士見町教會に行き博士デューエーの講演を聽いた、題は「デモクラシーの倫理的意義」、至て平凡なる講演であつた、若し余が日本語を以て同じ事を述べたならば聽衆は大なる不平を漏したであらう、然し乍ら博士は米國現今の第一位を占むる哲學者であると云ふので今回交換教授として我國に渡來したのである、多分彼は此夜彼の最善の狀態に於て在つたのではあるまい、何れにしろ此夜博士の講演は大なる失望であつた

米國よ！

三月十八日(火)快晴　日曜日の精神的疲勞未だ癒ず差したる事を爲し得ずし

大問題に就て究め又パウロの所謂「諸の教會の憂慮」に携はる、人として生き基督者として在る以上は是れ又免る能はざる所である。

三月十六日(日)晴 好き安息日であつた、午後の會合不相變愉快であつた、來會者六百餘、「死後の生命」に就て語つた、今日丈けは聖書の講義であるよりは寧ろ人生哲學の講演であつた、然し次回より始むべき哥林多前書第十五章の研究の準備である、死後の生命問題は永久に其興味を失はざる問題である、故に語る者も聽く者も熱心ならざるを得なかつた、是れ確に人生第一の問題である、すべての科學すべての哲學は此問題を確定せんが爲であると云ふ事が出來る。

三月十七日(月)快晴 田村直臣君と共に中澁谷に舊友松村介石君を訪うた、茲に久し振りにて三村の會合が開かれ舊きを語り新しきを談じて時の立つのを知らなかつた、此會合に於て第一の喋り役は田村君であつて松村君之に次ぎ、余は主として聽者の地位に居つた、我等相知つて茲に三十五年、取りし途は異なりしと

であらう、唯其價値甚だ尠きを耻づ。

三月十四日（金）曇　引つゞき『全集』校正に從事した、校正、又校正、我生涯の大部分は我が書きし物の校正に消費せらる、多分墓に下る時まで續くであらう、然し惡き仕事ではない、印刷職工を相手に單獨で爲す仕事である、カーライルやエマアソンが澤山に爲した仕事である、何は兎もあれ獨立の仕事である、牧師や神學者であるよりは遙に善い○午後丸善に行きペンとインキとを買ひ求む、我が商賣道具である、一日も缺くべからざる物である、此日より見目洋君がクリスマスに贈られし金のペン先を使用し始む、來る數年間の机上の要具であらう。

三月十五日（土）大雨　警視廳に呼出され三月號雜誌の記事に就て注意を受けた、「聖書と現世」の一欄時事に觸れるの虞れありとの事であつた、謹んで御注意に順ひ此欄を廢することに決定た、永遠の聖書を研究せんと欲する者が何も必しも時事に就て語るの必要はない○『全集』校正が毎日の仕事である、外に少しづゝ

ストの福音を解するに難き人にして半西洋化されたる東洋人の如きはない、彼等は自分で自分の信仰を作て之を基督教と稱するのである、而して偶々其誤謬を正さるゝや大なる迫害を受くるが如くに感ずる、實に人の靈魂を亡す者にして近代の西洋文學の如きはない、殊に亂暴なるは北歐文學である、之を信仰上の過激思想と稱して可らう、基督教の敵にして之よりも嫌ふべき者はない、是は聖書に所謂不法の靈である、僞基督の精神である、現下の福音宣傳者を苦しめる者にして此靈此精神の如きは無い。

三月十三日（木）曇　昨夜今井館に月並祈禱會あり、來會者三十人、馬太傳十章三四—三九節に依り信仰は眞劍ならざるべからずと云ふ事に就き祈り且つ語つた、以來祈禱會は毎月二回開く事に定めた○此日全日を『全集』校正と米國友人への手紙書きとに費した、我れ舌の人ならずしてペンの人なる時我は幸福である爾今『内村全集』編纂が余の第一の事業であらう、是が余が後世に遺す唯一の遺物

三月號雜誌が出來た、發行日に出來上つたのは近來稀なる事である、然し急いで組んだ故にか誤植が多い、何か必ず一つの缺點がある、困つたものである。

三月十一日（火）半晴　「若し爾口にて主イエスを言表はし又心にて信ずるならば救はるべし」との羅馬書十章九節の言に就て終日考へた、心に信ずるは易し、難いのは口に言表はす事である、社會に立て「我は主イエスを信ず」と表白し得る信者は甚だ稀である、實に信仰の表白は小事ではない、是れなくしては實は信仰は無いのである、「凡そ人の前に我を識ると言はん者を我も亦天に在す我父の前に之を識ると言はん、人の前に我を識らずと言はん者を我も亦天に在す我父の前に之を識らずと言ふべし」とのイエスの言の深き眞理なる事は日本の如き不信者國に在て覺らるゝのである（馬太傳十章三二、三三節。）

三月十二日（水）曇　余の信ずる基督教に導くに最も困難なる人は偶像信者でもなければ又無神論者でもない、所謂近代の高等教育を受けたる者である、キリ

會を之を信ずる者と信ぜざる者との二つに兩斷しつゝある事に就て語つた、自身に取り會心の講演であつた、舊きドクトル・ランゲの註解書は斯かる場合に於ける大なる援助である、此書は一八六一年の著であつて余が此世に生れ來りし年に世に出し者であるが、其時既に基督再臨の信仰の強き唱道があつたのである、ホイブネル（Heubner）の唱道の如き殊に判然たる者であつたのである、「夜半ばに叫びて新郎來りぬ出で迎へよと呼聲ありければ」とあるは實に彼等の聲であつたのである、而して余の如きは今に至て漸く睡眠より覺めたのである、然し乍らキリストを信じてより茲に四十一年、初めて明瞭なる了解を以て此比喩を解釋するを得て感謝に堪へない。

三月十日（月）曇　「青き月曜日」である、精神的疲勞にてグヅグヅと一日を送つた。午後神田盾夫に伴はれて池袋聖公會神學校に師父ケリーを訪うた、半天主教的の英國聖公會の教師である、英國の神學に就て質問し大に益する所があつた〇

三月八日（土）曇　新聞紙は子爵三島彌太郎君の逝去を傳ふ、余の君を知りしは幼年時代に於ては有馬學校に於て、留學時代に於ては米國はアマストに於てゞある余がアマスト卒業の日に禮服なきが故に君の最上等の日本服を借りて式を濟ませしは今より三十一年前である、其後君との交際は全く絶え、君は日本銀行總裁として余はキリストの福音の宣傳者として各自人生の全く異なりたる徑路を歩んだ「一たび死ぬる事と死して審判を受くる事とは人に定まれる事なり」、死と審判、之を思うて位階も勳章もあつたものではない、人生の暫時の微動を終れば人は皆な盡く平等である、神の平民である。

三月九日（日）半晴　青年會舘に於る午後の集會不相變盛會、來聽者五百餘名新歸朝者笠原作三君は君が大西洋上波に浚はれ奇蹟的に救はれし聞いて身を慄はすやうなる實驗談を語り聽衆をして感動せしめ、余は馬太傳二十五章一―一三節に於ける「新郎を迎ふる十人の童女の比喩」に就て語り基督再臨の信仰の今や救

ふ、非常識も亦甚しと謂ふべきである、然れども死者をして死者を葬らしめよである、基督信者に其生ける靈魂を救はしめて其死せる體を葬りし佛教徒の心事の憐れさよ、余は常に佛教に對しては厚き尊敬を拂ひ來りし者であるが、今回古崎君の遺骸に對する彼等の處置を見て「佛教滅亡」を叫ばざるを得ない、今や日本の佛教徒は生ける靈魂を救ひ得ずして死せる肉體を爭ふのである、寺院は今は一の葬儀會社として存るに過ぎない、憐むべきは佛教の末路なる哉、

三月七日(金)晴　昨夜中野神田男爵邸に於て法學士高木八尺の渡米送別會に併せて結婚祝賀會を開いた、樂しき歡ばしき會合であつた。アキスリング氏の依賴に依り午前十一時より三崎町バプチスト會館に於て新來の宣教師四十餘人に對し英語演説を爲した、日本人の「義理と禮儀」に就て語つた、隨分骨が折れた、然しアキスリング氏に對し友誼的奉仕を爲すと思ひて最善を試みた、演説終つてア氏に伴はれ晝飯の馳走に與つた、余はたしかに宣教師の敵ではないと思ふ。

終生キリストを棄てざらん事を、宣教師の寵愛を蒙るは多くの場合に於ては薄信偽善の何よりも確かなる證據である、余は幸にして彼等の惡み嫉ふ所となりて神の選擇に與りしことを感謝する○子爵加納久宜氏亦逝去せらる、吊詞を述べんがために大森の邸を訪うた、實に偉らい人であつた、忠實なる平民の友であつた、日本華族の模範として世界に示して恥ぢざる人物であつた、嗣子久朗君今は紐育に在り、余の十年來の善き信仰の友である、君並に遺族に對し同情に堪へない、主イエスキリストの日に老子爵の功勞は充分に酬ゐらるゝであらう（馬太傳二十五章三一―四〇節。）

三月六日（木）朝晴夜大雨　古崎彊君昨日眠りし由遺族より電報があつた、然し葬儀は佛式を以て行ふ由、實に奇怪千萬である、彼は明白なる基督教の信仰を以て死し、且つ彼の葬儀の今井館に於て彼の信仰に順ひて行はれん事を遺言した、然るに之を省みずして彼れ死して後二十四時間、佛式を以て彼の遺骸を葬りしと云

時には必ず成瀬君を書くであらう」と、而して歳移り星變りて此米國宣教師の辯護者たりし成瀬君は基督教を棄てゝ、不信異端を以て君に責められし余は福音の主唱者として今存るのである、實に不思議である、余は思ふ成瀬君の一時の基督教の信仰は女子教育の爲めであつたのであると、大阪に於て新潟に於て君が米國宣教師の手を藉りて女學校を經營しつゝありし間は君はクリスチヤンであつたのである、然れども東京に來り女子大學を設立するに方て大隈侯澁澤男等基督信者ならざる人等の援助を要する時に方ては氏は弊履の如くにキリストの福音を棄てたのである、是多くの日本の紳士學者の爲す所であつて惟り成瀬君のみを責むべきではないが、然し最も恥づべき賤しむべき事である、何れにしろ宣教師の厚き信任を擔ひし成瀬君は早く既に之を去り、彼等に嫌はれ君に不信異端の故を以て責められし余が今日福音の戰士として存るを得るは神の大なる攝理と稱せざるを得ない、余は祈る何を爲し得ずとも、教會を作り得ず大學校を建て得ずとも

る、然し特に貧者の友として生涯を送り來りし我等は貴人を迎ふるの途に疎くして大に心を配ばる、然し神は又其途をも敎へ給ふ。

三月五日（水）快晴　日本女子大學校長成瀨仁藏氏昨朝死去せりとの事である新聞紙の報ずる所に依れば、氏は最初クリスチヤンであつたが今日では基佛儒神全般の宗教を超越したる宗教、即ち宇宙の靈に合致する事に努力して居られたとの事である、而して余が氏に接觸（寧ろ衝突）したのは今より三十一年前越後新潟に於て氏が熱心なるクリスチヤンたりし時に於てである、其時氏は聖職成瀨君（Rev. Mr. Naruse）であつて米國宣敎師の信任最も篤く、而して余が宣敎師に反對の態度に出づるや彼等の代言人となりて堂々不信異端の故を以て余を責めたのは此成瀨仁藏氏であつた、余は其時に思うた「惡魔は神の前に人の罪を訴ふる者であると言ふが彼は多分成瀨君の如き者であらう、人を惡人と思へば其人を惡人と爲さずば止まない者は成瀨君である、余が若し將來小説を著はし惡魔を書く

政助君は「人種問題と在米日本人」に就て、余は「イエスの終末觀」第三回を講じた、二者共に再臨信仰の證明であつた、我等を迷妄と嘲ける者に我等の有する希望と熱心とはない、一年以上に渉る日曜日毎の此盛會は何を意味するのである乎、我等の反對者は其反對說を以て之に類する會合を持續し得る乎、我等に唯感謝と讃美があるのみである。

三月三日(月)晴　昨日の講演で疲れた、月毎の雜誌校正が始まつた、斯して月は滿ち月は虧く、然し最も滿足なる幸福の生涯である、余は何人とも余の位地を交換したくはない。

三月四日(火)晴　引續き好き春日和である、梅が咲き出した、愈々春が來た如斯にして最後の春が來るのであらう、甚く待たれる。昨夜來續いて三四人の貴婦人の訪問があつた、珍らしい事である、我家の門に自働車の附く時に甚だ不似合のやうに見える、然し歡んで何人をも迎へる、善人は何れの階級の內にも在

信仰は議論ではない、確實にして明白なる實驗である、余は永久に古崎疆君の平和と歡喜とに溢れたる死の狀を忘れぬであらう。

三月一日（土）晴　久し振りにて田村直臣君の訪問があつた、二時間程話し續けた、宗教界並に政治界の事につき色々の事を聞いた、教會と社會との腐敗は余の思うたよりも遙に甚だしい事を知らせられた、斯んな基督教界は一先づ轉覆するが宜からう、而して神は必ず之を轉覆し給ふであらう、是は實に「盜賊の巣」である、教會合同もデモクラシーも基督再臨反對もあつたものではない、不信者の内にさへ行はれない卑しき事が基督教會内に行はるゝのである、余は田村君に一年に二三度位ゐ會ふが、會ふたび毎に君は此點に關し余の眼を明かにして呉れる。

三月二日（日）曇　北風にて寒し、午前中『ヒツバート雜誌』一月號を讀み英人中亦智者尠きを歎じた、英國基督教的智識の最高權威が之であると知りて人間の智識の到底賴むに足りない事が判る。聖書講演不相變盛會、聽衆六百餘人、小林

て打たれた、余は今日まで幾回か死の床を訪うた、然し古崎君のやうなる場合に遭遇したる事はない、之は死ではない、暫時の別れである、敎會の神學者は曰ふ「基督再臨の信仰は不道理である不必要である有害である」と、或は然らん、然れども茲に我友は希望ある生涯を中途に挫かれながら何の歎く所なく感謝感謝の聲を以て死に就くを見て、誰が彼の再臨の信仰が不必要である有害であると言ふことが出來るか、古崎君の信仰は最も溫雅なる淨土眞宗に始まりし福音的基督敎である、彼は勿論の事キリストの體的再臨を信ずる、而して此信仰が死の眞際の時に彼をして此平和の人たらしめたのである、彼の家を辭して停車場に至れば發車時間までに未だ間ありければ大磯に行き春の海を眺め滿開の梅を觀て少しく我緊張せる心を和らげ、午後二時四十分大磯發の汽車にて歸途に就いた、將さに死なんとする友を慰めんとて行きし余は自身大に慰められて家に歸つた、實に惠まれたる一日であつた、神學雜誌に長論文を讀むも到底得られざる眞理を示された

彼の言を聞いて彼を慰むるの必要がなかつた、余は獨り思うた「若し之が死である。ならば死とは何んと容易い者である乎」と、余は彼の病床の側に坐して聖書を讀んだ、約翰傳十四章一節より四節まで、テサロニケ前書四章十三節以下、コリント前書十五章五十節を讀んだ、而して後に祈つた、然れども彼の爲めに祈求むべきものは何にもなかつた、只感謝するばかりであつた、死の床の側に坐して感謝の外に祈るべき言なしとは如何に幸ひなる事ではない乎、祈禱を終へて余は彼の疲勞を慮れたれば彼を辭し去らんとした、然し非常に名殘り惜しかつた、依て彼と訣別の握手を爲した、我等は久しく握りし手を放たなかつた、余は彼に言うた「君、復た確然會ふよ、今度會ふ時には斯んな死ぬべき體を以てせずして、死なざる榮光の體を以て會ふよ、今度の別れも亦先般君が洋行した時の別れと同じよ復た確然會ふよ」と、彼は低き聲を以て判然と答へた「さうです、さうです」と、斯くて我等は地上に於ける最後の面會を終へた、余の心は何んとも言へぬ感を以

溫厚であつた、大に敎へられ且つ慰めらるゝ所があつた、再臨の信仰は宣敎師と余との間に設けられし乖離の墻を取除くに於て大に與りて力があつた、實に喜ばしき事である。

二月二十八日（金）晴　好き春日和であつた、敎友古崎彊君危篤の報に接し見舞のため相州平塚に行つた、車中余は竊に思うた、今日は辛らき御用を務めねばならぬ、將さに死せんとする者を慰むるの責任は重大である、余は之に耐へ得るであらう乎と、斯くて昨夜來祈禱の準備を爲して平塚海岸松林の中に彼の病床を訪うた、彼の喜び譬ふるに物なく、余は彼を見て胸が一ぱいになつた、而して彼の元氣と云うたらば！　これが死ぬる病人であらうとは如何しても思はれなかつた微笑は彼の滿面に漲り、彼の語は時々滑稽を交へ、平常と少しも異ならなかつた彼は曰うた「私の心の中に平和の王國が既に築かれました、感謝です、感謝です先生大に働いて下さい、此の福音は世界萬民に傳へなければなりません」と、余は

れて來たのである、二千乃至三千の日本人に二十年間毎月少しづつ聖書知識を供給して來た乎と思へば感謝と滿足の至りである、人生五十功なきを恥づではない、人生六十此事ありしを感謝すである　今ペンを執りつゝ死んでも惜む所はない。

二月二十六日（水）晴　雜誌編輯終り大に寛ろいだ、英國百科字典を繙き鳥類學魚類學軟體動物學と漁つた、終にトゲ魚の一項を讀んで止めた、心を淨うする者にして天然學の如きはない、其點に於て天然學は遙かに神學に優る、天然學に神學に於けるが如き辛辣なる攻擊はない、萬事が嬰兒らしくあつて其點に於て能くイエスの教訓に似て居る、懷かしきは古き變らざる天然である。

二月二十七日（木）晴　半日を齒の治療に費した、辛かつた。午後二人の西洋婦人の訪問があつた、珍らしい事である、其一人は米國レホームド教會傳道會社派遣宣教師パイファー女史、他の一人は鐵道ミッションのジレット女史であつた、共に再臨信者である、前者は米國婦人であつて快活であり後者は英國婦人であつて

し外は至て靜肅なる好き會合であつた、余は前回に引續き馬太傳廿四章に就て講じた。

二月二十四日（月）晴　春暖を催し氣持良くある、昨日の勞働に疲れて半日休んだ、久振りにてカイムのイエス傳を引出して讀んだ、彼は余と聖書の見方を全く異にするも確かに大家である、イエスの人的方面を畫いた書にして之よりも大なる者はあるまい、獨逸流の乾燥無味の歷史研究ではない、生血（なまち）の流るゝやうなる傳記である、イエスに確にカイムの見たる一面があつた、基督者は其方面を見逃してはならない。

二月二十五日（火）晴　終日雜誌編輯に從事した、今に至るも猶ほ余は『聖書之研究』の持主にして主筆にして唯一人の編輯人である、ロイド・ガリソンの『解放（リベレートル）』と同じく純なる一人雜誌である、さうして其れが二十有餘年續いたのである、幸ひである、余は是れ以外に他の仕事を求めない、余は之れがために生

ない、余は素より宗教家と稱せらるべき者ではない、弱い情の人である、預言者エレミヤの小なる者である、「噫我れ我が首を水となし、我目を涙の泉となし、我民の爲に終夜泣かんものを」と叫ぶ質の者である（エレミヤ記九章一節）、若し余の著述が『なぐさめ』を以つて終つたならば余は甚だ幸ひであつたらう、余が進んで教會の教師や傳道師が爲す事を爲した故に多くの不愉快が余の生涯に臨んだのである、宗教は素々深き情であり詩であり歌である、是が教會と變じ神學と化する時に最も忌むべき者となるのである、噫歸らんかな『なぐさめ』時代に！

二月二十三日（日）雨歇み午後晴る　引續き好き日曜日であつた、聖書講演會不相變盛會、聽講者七百餘と註せらる、但し其内には聯合軍慰問使日疋信亮氏が戰地より持歸られし戰時參考品を觀んとて會館に集ひ來し者の流れ込みし者が尠からずあつたらしくある、神聖なるべき基督教青年會が而かも聖安息日に於て斯かる人に見舞はるゝは歎ずべき事である、然し乍ら聽衆中一二の無禮漢の有り

日は其機關雜誌を以て「聖書の言なりとて信ぜずともよし、基督の教にありたりとて信ぜずともよし」と教へるのである、ユニテリヤン主義を以て余を責めしメソヂスト教會が今や此主義の先鋒隊となつた、面白い現象である。

二月二十一日（金）曇　原稿日が來た、終日雜誌編輯に從事した○近頃に至り再臨のキリストは私の戀人（こひびと）なりと言ひ來りし婦人が二人あつた、其一人の如きは余に聖書の研究を止めて自分の戀人の書翰の研究に從事せよと言ひ來つた、困つたものである、乍然迷信を生む丈けの信仰でなければ取るに足りない、反對の好き材料であらう。

二月二十二日（土）雨　終日書齋に籠り『全集』校正と雜誌編輯に從事した、今より二十七年前に自分の著た『基督信徒のなぐさめ』の校正を終り今昔の感（かい）に耐へなかつた、自分は素（はじ）めよりヒューマニタリヤンであり、贖罪信者であつたのである、自分の傳道なる者は決して社會改良又は教會建設を目的として始つた者で

臨の信仰は基督教界名士の多數決を以て否決せられたのである、乍然何ぞ恐れんである、牧師神學者等は否決したれども平信徒は可決したのである、而已ならず富永君の言はるゝ「廣き世間」は案外にも余と此信仰とを歡迎するのである、余の雜誌の發行部數は激增し、余の聖書研究會來聽者は再臨唱道以前に比べて或ひは三倍し或ひは六倍し、余の同志の信仰は復興し、其愛は燃え、其結合は益々鞏固となつた、再臨の信仰は不道理であるかも知らない、乍然人の最も深き所に訴ふると見えて世の之を歡迎する事益々熱く且つ之を信受する者益々多いのである、余自身の生涯に於て今日ほど愉快なる時はない、余は今日メソヂスト教會の機關雜誌に此痛烈なる反對論を讀んで奇異の感に打たれた、余は初めメソヂスト教會の宣教師より洗禮を受けて一時其會員と成つた者である、而して今日に至り斯かる背信教會より早く脫會せし事を神に感謝せざるを得ない、メソヂスト教會は明治の初年には余等に聖書を文字通りに神の言として信ぜよと教へて置きながら今

もよし、再來說は不道理なり不必要なり有害なり」と、斯くパツキリと言はれて富永氏と余との信仰的關係は斷然絕えたのである、氏の言はるゝ通り「道同じからざれば相與に語らず」であつて、氏が斯く言はれし以上、勿論余は氏に對し余の信仰を辯明するの必要はないのである、實を言へば余は今日まで富永氏に對しては陰ながら尠からざる尊敬と同情を表し來りし者であつた、而して今日の今まで氏の信仰と余のそれとの間に斯くも甚だしき懸隔があらうとは思はなかつた、然し止むを得ない、氏と余とは信仰の別天地に住む者なる事が今に至つて明白になつた、余が再臨信仰を發表せし以來、余に對して明白に反對を表せられし基督教界の名士の中に海老名彈正君あり、三並良君あり、內ケ崎作三郞君あり、今岡信一良君あり、杉浦貞二郞君あり、クレー・マツコレー君あり、E・H・ザウグ君あり、帆足理一郞君あり、而して今又富永德麿君あり、其他の諸君にしても若し其意見を發表せらるゝならば其大多數は同じく反對側に立たるゝであらう、斯くて基督再

俗化腐敗の培養地である、やがて主の口より吐出さるゝ者である〇此夜目下歸國中の在桑港敎友小林政助君夫妻の歡迎感謝祈禱會を今井館に於て開いた、會する者三十餘名、小林君の興味津々たる實見談あり、聞く者をして身自から米國太平洋岸に在て我同胞に接するの感あらしめた、余等が柏木に在りて爲す小なる事業が斯くも海外に在りてまで大なる波動を起しつゝあるを知りて感謝と歡喜とに堪へなかつた、又復恩惠溢るゝの會合であつた。

二月二十日（木）晴　或人より青山學院神學部（日本メソヂスト敎會の本山）發行『神學評論』第六卷第一號（一月號）を送られ、大なる興味を以て其内に掲載せられたる富永德麿氏の筆に成りし「基督再臨說と基督教」と題する長論文を讀んだ、是れ蓋し日本文を以て書かれし最も痛烈なる、最も思ひ切つたる、而して最も頑冥なる再臨反對論であらう、氏は曰ふ「基督は決して目に見ゆべく再來すべからず、聖書の言なりとて信ぜずともよし、基督の敎にありたりとて信ぜずと

愛顧的態度に立つが故に余輩は彼等と深き友誼的關係に入ることが出來ないのである、余輩は堅く信じて疑はない、余輩は彼等に何の劣る所はないと、余輩は彼等の友人又は兄弟たらんと欲する、彼等の被雇人たらんことを欲しない、彼等は東洋に於ける數十年間の經驗に由て既に此事を知るべきである、然るに未だ此事を學ばない、頑愚にして高ぶりたる宣敎師等よ、彼等は余輩に敎ふる前に先づイエスの足下に跪いて基督的謙遜の何たる乎を學ぶべきである。

二月廿九日(水)晴　終日眼が痛くなるまで讀書に耽つた、在紐育獨逸種の米人A・C・ゲーベライン氏著『預言研究』を讀み大に敎へらるる所があつた、余は氏の如きを以てユニオン神學校、シカゴ大學等の敎授連に遙に優さる聖書學者であると言ふ、氏は余の如く敎會を離れ單獨で聖書研究雜誌を發行し併せて多くの著書を出版して居る、能くも似たる者が洋の東西に在る哉と思ふ、如何に寛大に見ても敎會は今や純福音の根據ではない、其反對に世界孰れの國に於ても敎會は異端

いて强き感に打たれた、盲人にすら此意氣がある、世の見えて見えざる腰拔け信者輩は慚死すべきである。

二月十八日(火)雨　朝より來客あり又『全集』校正と手紙書きとに從事した。南淸梧州滯在の或る米國宣敎師より書面を寄せ來り、余に彼が支那人に讀ませつゝある聖書の硏究雜誌を每月日本文に飜譯して之を日本人に讀ませよとの註文であつた、傲慢無禮なるは相も變らず是等の米國宣敎師である、彼等は我等日本の基督信者を見るに彼等の通辯又は飜譯者なりとし、我等が彼等に役せらるゝ事を最上の名譽なりと思ふが如くに信ずる、余は彼に返辭して言うた「余には余が過去二十年間發行し來りし余自身の聖書硏究雜誌がある、余は君の雜誌の飜譯の任に當る能はず、余は又過去四十年間の信仰的生涯に於て未だ曾て一錢たりとも敎會又は宣敎師の補助を受けし事なし、君は多分余の如何なる人なる乎を能く究めずして斯かる書面を余に書き送りしならん」と、英米宣敎師は余輩に對する常に此

つて神の子キリストを崇めんとする言葉ではない、而して是れが日本基督教會同盟の主張である、余が屢々唱へしが如く今の基督教會なる者は世を導く者に非ずして世に導かるゝ者である、社會の首に非ずして其尻尾である、世が忠君愛國を唱ふる時は其聲に和して忠君愛國を唱へ、世がデモクラシーを唱ふる時は又之に應じてデモクラシーを唱ふ、殊に「神の父たる事並に人類の同胞たる事」との宣言に至ては是れユニテリヤン教徒の信仰箇條第一である、何故に今日之を奪つてオルソドツクス諸教會同盟の宣言第一條となすのである乎、而して聞く所に依れば此同盟はユニテリヤン教會及び其信徒を其内に受けないとの事である、他人の永らく唱へ來りし信仰箇條を奪つて之を我がものとし、而して之を唱へ來りし者を其内に受けないと云ふ、是は甚だ卑劣ではない乎、余はユニテリヤン教徒のために憤慨に堪へない○盲人教師中村京太郎氏の訪問あり、彼が彼の同志(孰れも盲人)三十三名と共に宣教師學校を離れ相助けて獨立的信仰團を作りし實話を聞

要つた、此日纔かに其緒言を試みた丈である、聖靈の導きに由り全章を說明し得るやうに祈る、恰も好し昨夜在紐育A・C・ゲーベライン氏より氏の著述に成る馬太傳註解の贈與に接し大に余の講演を援けられた、神は如斯して常に我等を助け給ふ、遠方より機に合ふ援助を招き給ひて我等の不足を補ひ給ふ、感謝。

二月十七日(月)好晴　春日和の連續である、緊張せる我心までが緩和されしやうに感ずる、「春の日は琥珀の光を放ち」と自製の一句の自づから口より迸るを禁じ得ない○近頃日本基督教會同盟なる者が成立して其宣言の一節に曰く「日本基督教同盟は茲に見る所あり、此際吾人が特にデモクラシーの要旨として主張努力すべき數點を揭示し、全國教會又信徒と共に此新局面に於ける精神的開拓に從事せんと欲す。一、神の父たる事並に人類の同胞たること云々」と、誠に結構なる事である、乍然余が宣言書を讀んで怪んで止まざる事は、其内にキリストのキの字も見當らない事である(基督教と云ふの外)、是はデモクラシーを讚美する文字であ

元々基督再臨は世界の大亂に激成せられて勃興したる信仰ではない、縱しまたさうであるとするも大亂が息んで世界が「鏡のやうに平靜に」成つたとも亦成るとも思はれない、世界は依然として行詰りの狀態に於てある、國際聯盟は大失敗に終らんとし、世界は益々混沌たる狀態に陷らんとしつゝある、「鏡の如き平靜」どころではない、戰爭、饑饉、疫病の續發である、其點から見ても再臨の信仰を抛つことは出來ない、三並君と余とは再臨の信仰を異にするに止まらず世の觀察を異にする、世が平和平和と唱へつゝある間に、滅亡は忽焉と世に臨むのであると余は聖書に順つて信ずるのである。

二月十六日（日）半晴　無風の好き日である、午後の聖書講演不相變盛會であつた、來聽者六百人、或ひは其れ以上であつたかも知れない、篠原、高山兩氏の信仰證明は一同に强き感動を與へた、余は「イエスの終末觀」と題し馬太傳第二十四章の研究を試みた、難解の章とて之を聽衆に解らしめんと欲して多くの努力が

幽暗には歩む疫病あり、日午には害なふ勵しき疾あり、然れど汝恐るゝことあらじ、千人は汝の左に仆れ、萬人は汝の右に斃る、然れどその災害は汝に近づく事なからん。

とある（詩九十一篇六、七節）、神を信じ彼の御用に從事して我等は安心して此疫癘の地に働くことが出來る。

二月十五日（土）快晴　稀に見る日和であつた、今朝漸く雜誌發送を終り心大に寛いだ、發送の今度程遲れし事は未だ曾て無つた、久振りにて市中に行き書店と樂器店とに立寄り少しく春風を我心に吹入れた○三並良君の余の基督再臨の信仰の批評に曰く「世界の大亂に激成せられて勃興した内村氏の再臨信仰も世界が平和となるにつれて、再び以前の平靜に復する事と思ふ。之は急に起つた狂瀾怒濤であるが、鏡の樣に平靜となるべき世界は氏の心池にも舊の如く春風が靜に吹きそめん事を希望する」と、此は誠に親切なる言葉である、乍然眞理を缺いて居る

て終る十二週間に於て全世界に於て此病に由て斃れし者は凡そ六百萬人あるとの事である、倫敦市に於てのみ一萬人斃れ、其本元の西班牙に於てはバルセローナの一市に於て一日に千二百人の死亡者を出せる時があつたと云ふ、米國に於て五十萬の死亡者あり、其内多數は出征軍人の内にありて、敵軍の銃丸に斃れし者よりも遙に多數なりと云ふ、其他亞細亞、阿弗利加、歐羅巴、濠洲、到る所此病に襲はれ慘憺の狀を呈しつゝある、是れ實に世界的疫病である、「民起りて民を攻め國は國を攻め饑饉、疫病、地震有るならん」とありて世界的戰爭に續いて世界的疫病が來たのである、而して此疫病に限つて不思議なるは人々の之に就て多く注意を拂はない事である、東京市中に於て今日でも毎日二三百人の死亡者ありと雖も其市民は死の其門前に立ちつゝある事に氣附かないのである、斯くて劇場は滿場の盛況を呈し政談演說會亦立錐の地なしとの事である、斯の如くに世界の審判は行はるゝのである、惡魔は人をして神の審判に無頓着ならしむ、恐るべき哉。

二月十二日(水)晴　北風寒し。『哲學雜誌』二月號に於ては今岡信一郎君(統一基督教弘道會幹事)、『六合雜誌』同月號に於ては三並良君、孰れも余の『基督再臨問題講演集』に對して批評を試みられた、兩君共にユニテリヤン主義者であれば此問題に就て余に贊成されやう筈はない、乍然兩君共に余に對して公平であり又親切である事を感謝する、ユニテリヤン主義者の貴きは其冷靜なる研究の態度に在る、彼等の評論に大に傾聽すべき所がある、余は玆に前記兩君に對し厚き感謝を表する。モアブ婦人會下谷杉江氏宅に於て開かる、我家の主婦出席する能はず余代りて參會し「ユダの理想婦人」に就て前日曜日の講演の不足を補うた。

二月十三日(木)半晴　印刷所(秀英舍)で今日に至るも未だ今月號の雜誌を作つて呉れぬ、甚だ困つた、自から往いて催促したが埒があかぬ、競爭雜誌の多い中である、止むを得ない、忍耐するまでである。

二月十四日(金)雨　恐ろしいのは此流行性感冒である、去る一月十五日を以

い、悪き樹が悪き果を結んだのである、神は慢(あなど)るべき者に非ずである、我等は今より維新政治家どもの爲さゞりし事、然り爲す能はざりし事を爲さなければならない、噫神よ我等の愛する此日本國を惠み給へ〇夜八時在朝鮮京城高橋濱子永眠の電報に接した、彼女は我家の主婦唯一人の妹である、前者に對しては悲歎に、後者に對しては同情に耐へない、濱子は怜悧なる勝氣(かちき)の婦(をんな)であつた、彼女の娘時代に於て久しく角筈の我家に客となり、恰かも『東京獨立雜誌』廢刊の時に際したれば我等を慰むること尠からず、又『聖書之研究』發行の事に就て大に我等を勵まして呉れた、彼女の其後の生涯は幸福なる者ではなかつた、然し彼女は能く奮鬪してすべての困難に耐へた、今や少しく春風の彼女の生涯に吹かんとするに方て此世を去る、實に悲みに耐へない、彼女の最後の書面は希望と感謝に滿ちて居た彼女は死の準備が成つて死んだのであると信ずる、復活の朝に於て我等はルツ子同樣亦彼女にも會ふであらう、悲哀の中の希望である。

に耐へず、又寫音盤數枚到着し、之を聽いて靈感に打たる、商賈の船遠き國より糧を運ぶとは此事である（箴言三十一章十四節）。

二月十一日（火）半晴　紀元節である、憲法發布第三十周年である、其時余は東京小石川上富坂町に住んで居た、余の父も母も一緒であつた、大雪であつた、何にか珍事が起りはしまい乎と思つて居た、而して夕刻に至つて森文部大臣が西野文太郎に刺されたと云ふ事を聞いた、憲法が發布されて黄金時代が日本に臨んだやうに感じたる人が多くあつた、然し其れは夢であつた、其時以來日本は道德的には段々と惡くなつた、殊に政治家の墮落、愛國心の減退は最も著るしくある如何に完全なる憲法なりと雖も國家を根本的に潔むる事は出來ない、法律と教育とで日本國を改築しやうと思うた薩長の政治家等の淺薄さ加減、今に至りて嗤ふに堪へたりである、伊藤、井上など人生の深き事には全然沒交渉なりし政治家等に由て作られし新日本が今日の如く浮虚輕薄の國に成りしは敢て怪むに足りな

ス草の咲く頃ペンシルバニヤ洲エルウインに舊師の墓を訪ふも惡くはない、或ひは夢が事實となりて現はるゝかも知れない、乍然强ゐて行きたくはない、ホームに勝る所はない、日本に在りても手に餘る程の愉快なる仕事がある、今や「洋行」は少しも余を引附けない、「洋行」は少しも人を慧くしない、すべての善き智慧は「洋行」せずとも家に在て得られる。

二月九日(日)快晴　昨日來大雪、東京に於ては明治十六年以來の大雪であると云ふ、漸く雜誌校正を了つた、非常に困しい編輯であつた、遠方に演說に出掛くるの祟りは常に玆に至るのである。青年會に於ては箴言第三十一章「ユダの理想婦人」に就て語つた、來聽者四百人餘、靜なる良き會合であつた、聖書を講ずるに勝る愉快なる仕事はない、宗教的事業も「傳道」となり「說敎」となりては俗化して不愉快なる仕事となるのである、自今余は聖書を講ずるの外、何事をも爲すまじと意を定めた。春洋丸桑港より歸航し彼地の友人より品々贈り來る、喜び

められし基督教は歐米人に由りてよりは日本人に由りてより容易く且つより深く解せらるとの意見を述べた、但し咽喉未だ平常の如くならず殊に夜氣に觸れて語るに困難を感じ頗る苦しき演說であつた。

二月六日(木)晴　珍らしき好き日である、引續き校正に從事した、元氣未だ快復せず、故に室に在りて讀み書き又考ふ、却て幸福である、幸にして時々健康を奪はれて復たび素の書齋の人となる事が出來る、幸福此上なしである、獨り煖爐と相對して世界大家の著書を手にして眞理の饗應に與る時、余に何物も他に求むる所はない。

二月七日(金)晴　引續き校正、咽喉の痛み未だ全く去らず、冬が厭になり春が待たる。

二月八日(土)大雪　引續き校正、渡米の可否に就て考へつゝある、友人は頻りに行くを勸む、行くも惡くはない、米國の山野が眼にチラ附く、アービユータ

ある、時には「乾きたる冷たき哲學の光線」を余の心に投入れて之を澄すの必要がある。…………

二月四日（火）晴　久振りにて日光を見て嬉しかつた、少しく編輯に從事し、又幾分かの讀書を爲した、申命記を讀み馬太傳廿四章を研究した、若き婦人ども來り余に罪なき多くの世間話しを聞かせる、惡しくはない、貴き時間を奪はるゝとは知りながら之を聞いて笑ひ樂しむ、之も亦人生である。

二月五日（水）晴　寒氣強し、半日を校正に、半日を讀書に費した、夜三崎町バプチスト會館に於て神戸在留の英國猶太人ニユマーク氏を招き猶太人問題研究會が催された、來會者堂に滿ち六百人もあつたらう、中田重治君主會し、次いでニユマーク氏の二時間餘に渉る談話的講演があり大に敎へらるゝ所があつた、最後に余も亦三十分間程余の猶太人觀に就て述べた、猶太人と日本人とは其の骨相に於て、其情性に於て、其思想の傾向に於て類似する所多し、故に猶太人に出て創始

にあらざれば絶對的正義を世に施すことは出來ない、ウイルソン氏如何に偉大なりと雖も米國合衆國大統領として世界を治むることは出來ない。

二月一日(土)曇　寒い嫌な日であつた、漸く雜誌原稿を終つた。芬蘭土宣教師ミンケネン氏の訪問あり、再臨とバプテスマと贖罪とに就て語り相互に大に教へられ且つ慰めらるゝ所があつた。

二月二日(日)朝晴午後曇　久振りにて東京の高壇に登り愉快であつた、來聽者五百餘、詩篇第二十三篇を講じた、純福音を語るは他の利益であつて我が歡喜である、之を傳へし後の感に比ぶべき滿足はない。

二月三日(月)雪　雜誌原稿全部を印刷所に送り大に寛ぎ好き休息を得た、書齋にあり暖爐と相對し『ヒッバート雜誌』十月號を手にして善き半日を費した、ボイス・ギブソン氏の論文「科學より宗教まで」殊に強く余の心に訴へた、余は時々純科學者となるの必要がある、宗教にのみ沒頭して余の信仰が混亂するの虞が

ん乎とは其解決に深き智慧を要する問題である、嗚呼得たきは靜かなる讀書と默考の時である。

一月三十日（木）雪　病氣稍全快、然し疲勞未だ全く去らず原稿製作頗る困難である、再臨世界大會出席につき既に交渉あり、行きたくもあり行きたくもなし、或ひは米國再遊を夢み或ひは故國に在りて富士山下に於ける夏期講談會を想ふ、孰れも可なり、惟天父の指導に一任す、未だ自分で確定する能はず。

一月三十一日（金）曇　書齋に籠りて終日雜誌製作に從事す。ロイテル電報に由れば巴里に在る米國人の意見を以てすれば若し大統領ウイルソンにしてカロリン、マーシャル群島を日本に讓り渡すことに同意して本國に歸るが如き事あらば氏は必ず米國中部及び極西部の全投票を失ふに至らんとのことである、憐むべし大統領ウイルソン、外に正義公道を行はんとすれば内に投票を失はざるべからず人に由て與へられし權能は人に由て奪はる、神に由て與へられし權能に由て行ふ

者のみの神ではあり給はない、彼が我等を選み給ひしは特別に我等を愛し給ふからではない、特別に我等を以て萬民を救ひ給はんが爲である、「アダムに在て(「屬る」ではない)衆の人の死る如くキリストに在りて(「屬る」ではない)衆の人は生くべし」とある(コリント前書十五章廿二節)、生くるに種々と程度はあら、然しすべての人がキリストに在りて生くるは事實であると思ふ、讀まず書かず獨り床の中に在りて默想して余に如上の思想が勃然として湧き來つた、是れ勿論新らしき思想ではない、幾回か起りし思想であつた、然し今日復たび新らしく之を感じた。

一月二十九日(水)晴　一度も床に就かずして濟んだ、更らに原稿十六頁を作りて印刷所に送つた、疲勞未だ去らずして困る、演説の注文頻りに到り一々之を斷はるに勘からざる困難を覺ゆ、身は一個である、而かも頑丈といふ身ではない然るに事業は夥多である、斯る場合に處し如何にして最も有効的に我一生を送ら

萬事を神と兄弟等とに一任し自分は床中に在て靜養した、玆に至て大阪講演のために拂ひし代價の高き事が明分つた。

一月二十七日（月）曇　醫藥效を奏し熱は昨夜より下り出し夜に至て平常に復した、善く寢ね善く休んだ、休息は病氣の大なる恩賜である、多忙にして寸刻を爭ふ時に二日間たゞ床中に在りて休む、然れども是れ亦他に得難き恩惠である、「ヱホバその愛する者に寢を與へ給ふ」（詩百廿七篇二節）、此安眠は余の大阪に於ける劇働に酬ゐんとて與へられし恩賞である、若き婦人連交はる交はる入り來りて主婦を助けて余を看護し吳れた。

一月二十八日（火）晴　今日病氣少しく快く、床を出て雜誌原稿十六頁を作り之を印刷所に送り而して復た床に就いた、床中獨り瞑想して大に得る所があつた、哲學思想が勃興して來た、哲學書が讀みたくなつた、直に丸善に一冊を注文した、如何見ても我救主イエスキリストの御父は萬民の神であり給ふ、彼は我等少數の信

一月二十五日（土）雪　大阪大會の疲勞今に至りて勃發し、炬燵に據りウトウトとして終日を送つた、精神的疲勞の何たる乎を知らない者は世に甚だ多くある、是れ疲勞中の最大なる者である、肉體の疲勞であるよりは寧ろ靈魂の疲勞である、全身全靈が堪へ難き空乏を感ずるのである、隨て種々の肉體的疾病を併發するのである、而して其治療の任に當る者は常に家の主婦である、彼女は疲れし夫を引受けて之に力を回復せしめて再び活動へと送り出すのである、疲れて休み、休みては又疲る、何の爲に乎、主イエスの福音を傳へて一人なりと多くの人を天國の民となさん爲である、我等は此事を爲さずには居られない、然し精神的疲勞！之に罹り居る間は他道は再び爲すまいと思ふ。

一月二十六日（日）晴　遂に打られた、昨夜發熱三十九度に達し、顏面神經疼痛を感じ、醫師を迎へて治療を受けざるを得ざるに至つた、唯耐へ難きほど殘念なりしは青年會に於ける講演を休まざるを得ない事であつた、然し止むを得ない

一月二十四日（金）曇　家に在りて終日休養、心地良き休日であつた。大阪大會有志晩餐會に於て述べられし多くの興味ある感想の内に最も強く余の心を動かせし者は下の如き者であつた、神戸在留廣東人張金棟君は日本語を能く語り得る支那人であるが、君の言に依れば君は今より三年前或る古本屋にて金五錢にて『求安錄』の古本一册を買求め、之を讀みて自己の罪を悟り悔改めて基督信者と成り續いて他の同國人と共に今や一小教會を設立するに至りしとのことであつた、余は此實驗談を聞いて思うた、爲すべきは信仰的著述である、此一人の支那人を救ふを得て我が著述の爲めに費せし勞力は盡く償はれたりと、何も何十版を重ねて世の熱狂的歡迎を博するに及ばない、此一人を救ふを得ば足りるのである、余が今回大阪に行て得し最大の獲物は此一事である、噫神よ今より二十六年前熊本市外託摩ケ原槇樹の下に於て古き支那鞄を臺にして書きし此書が今日此果を結ぶに至りしは如何なる恩惠ぞ、感謝々々。

然し戰爭は敗北でなかつた、復たび來て攻擊を續けるであらう。

一月二十三日(木)好晴　夜は富士山下に明け、足柄山以東の原野は一點の雲なき晴天に輝きて我が歸るを迎へた、橫濱に至れば社員、品川に至れば家人は我を待受け相携へて家に歸つた、頭腦は疲れ咽喉は爛れ、苦戰の跡歷々たるものがあつた、二三日は休息である、休むに家ほど善き所はない、相變らず數十通の書翰が待つて居た、其内宮崎縣都城町日本基督教會牧師園部丑之助君よりの信書の内に以下の如き言があつた、「吾が教會信者が皆吾人と同一信仰(再臨の信仰)に依りて從來養はれ來りしを感謝致し居り候、當町に組合派も有之、過日の岡山御講演に出席して失望したと申さるゝは勿論に候が、同派信者中小生方へ參りて此の室所を充たさんと努力なし居る向きも有之候云々」と、分離は何れの處に於ても始まつて居る、之を信ずる者と信ぜざる者と、基督教界は今や判然と二派に分れつゝある。

振りにて常習に倣ひ十時前寝に就くことが出來た。

一月二十一日(火)晴　風未だ歇ます、蘆屋に至り好本督君を訪ひ盲人傳道に關し君の相談を受けた、又江原萬里の新家庭を見舞ひ新婦に會うて我子に會ふが如くに感じた、大阪に歸り午後六時大阪クラブに至り住友吉左衞門氏の懇篤なる饗應を受けた、余が日本の富豪の饗應を受けたのは是れが生れて始めてゞある、令息寛一君との靈的關係が玆に至らしめたのである。

一月二十二日(水)半晴　近頃新婦を迎へし或る家庭を訪問し其上に祝福の加はらんことを祈つた、午後永廣堂主人に伴はれ寶塚に遊び鑛泉に浴し大阪に於ける疲勞の一部分を洗ひ去つた、途に攝津の中山寺と清荒神(きよしくわうじん)とを見た、前者は聖徳太子以來の古刹、後者は近代式の流行神である、佛教にも基督教に於けるが如く淸俗の二種がある、大阪に歸り午後七時二十二分發列車にて歸途に就いた、滯留五日、所謂東洋のマンチェスターの煙と塵とに厭々した、

此日疲れし頭腦と爛れし咽喉とを以て爲し得る最善のものであつた、之にて感謝の裡に大阪大會を終り午後七時より隣家の大阪ホテルに於て來會者有志の晩餐會を開いた、會する者七十餘名、例に由り「主の座」を設け之に對し御料理代を募りしに獻金五十三圓を得たれば之を貧者に頒つことゝし、不取敢教會内の貧者に一人に付き三圓づゝを贈り、彼等をして我等と共に歡喜を頒たしめた、午後十時時間の不足を惜みながら散會した、恩惠溢るゝの會合であつた。

一月二十日(月)晴　昨夜來風強く寒氣嚴しく、大責任を終へて肩より重荷が落ちしやうに感じた、京都より便利堂主人來り相連れ立ちて和歌之浦見物に出掛けた、久振りにて住吉神社を見舞ひ其古風の社殿を賞し、南海電車にて泉南の平野を馳せ、淳茅海の波の荒ぶる狀を眺めながら午後一時半和歌之浦に達す、此所に晝飯を認め舊友相共に舊きと新らしきを語り、寒風强きが故に思ふ存分に風景を樂しむ能はざりしも尠からず心志を慰むる所ありて七時大阪に歸つた、此夜久

昨日の續きを演じ基督再臨の證明として第一に聖書、第二に猶太人の歴史並にパレスチナの地理に就て述べた、五時一先づ閉會、七時再會、黑崎、淺田、河邊、中田、森本諸氏の辭詞があつた、來會者千八百餘、但し中には新築の公會堂見物の爲に入來りし者もあつたらしく、出入頻繁にして尠からず會の嚴肅を妨げた、又講演者の間にも多少の思想の相違もあり少しく歩調の亂るゝ觀があつた、止むを得ない、更に祈るまでゞある、十時閉會。

一月十九日(日)晴　昨夜雨、正午に至て晴る、午後二時開會、來聽者二千三百と註せらる、今日までに再臨問題研究會として開かれし最大の會合であつた、青木庄藏、トリストラム女史、コルテス、平出、中田等諸氏の證詞並に講演あり、五時高壇は余に渡された、與へられし問題は「傳道と基督の再臨」であつた、余は馬太傳廿八章十六節以下の抄譯を試み續いて再臨の信仰の傳道を賛くる事實と理由とに就て述ぶる所があつた、自分に取ては甚だ物足らぬ演說であつた、然し

余の言はんと欲せし所に耳を傾けて呉れた、大なる感謝である、我等は第一日に勝利を博してハレルヤの聲を揚げた、夜半十二時床に就いた。

一月十八日(土)好晴　午前永廣堂の二階に獨り靜かなる時を有つた。午後二時開會、來聽者千餘、石川鐵雄、藤本壽作、猶太人ニユマーク、藤井武の諸氏と共に高壇に立つ、ニユマーク氏の演説殊に有力であつた、若きタルソのパウロが我等の前に立ちしやうに感じた、言葉は簡潔で辭々力あり、洵に猶太式の有力なる證詞であつた、如斯にして猶太人が基督者となりし時に最も有力なる傳道師が現はるゝのである、「若し彼等の錯失(あやまち)世の富となり其衰へ異邦人の富とならんには況して彼等の盛なるに於てをや」とのパウロの言を想出さゞるを得なかつた(羅馬書廿一章十二節)、會衆一同の感動甚だしく、直に寄附金を募り猶太人傳道の資に供せんと諮(はかり)しに一同之に應じ百二十圓餘の献金ありたれば之をニユマーク氏の手に渡し彼の同胞に對する福音宣傳の志に對し聊(いさゝ)か同情の意を表した、余は此日

一月十七日（金）晴　昨夜を東海道汽車中に過し午前九時大阪驛に達し數多の友人の歡迎を受けた、不相變安堂寺橋通永廣堂今井氏の客となつた、午後二時より中之嶋公會堂に於て基督再臨問題研究關西大會を開いた、會堂は新築の東洋第一と稱せらるゝ者、其高壇に立つかと思ひ少しく身に恐怖を感じた、會する者千餘平出、宇津木、松岡、藤井諸氏の證詞あり、續いて中田重治氏の講演ありて聾の會を終つた、豫想外の盛會であつて一同感謝に滿ちた、別に會堂の廣きに過ぐるを覺えなかつた、四時半一先づ閉會、談話を交へ、夕食を終へ、夜七時再び開會林、森兩氏の證詞あり、下關コルテス氏の東京に於けると同じ然り其れ以上に熱心なる講演あり、午後九時に至りて高壇は余に讓られた、余は「萬民に關はる大なる福音」と題し基督再臨の單に基督信者にのみ關はる問題に非ずして人と云ふ人何人にも關はる問題であることに就て演べた、此夜來り會する者千六七百人、其半數以上は確に未信者であつた、然れども彼等は水を打ちたるが如き靜肅を以て

題でもなければ亦純道德のそれでもない、含宜の問題である、基督教の問題と言はんよりは寧ろ武士道の問題である、日本の武士道は斯かる事を爲さないのである、既に『聖書之研究』の成立するあり、何故に寛大を以て此名を余輩に讓り、自分は全然之と異なりたる名を擇ばないのである乎、余は斯く言ひて戰を余の同業者に向て挑むのでない、唯同信の士に對して注意を促すまでゞある、『聖書之研究』は我國の社會が斯かる名を忌嫌ふ時に方て多くの血戰を經て贏ち得し名稱である、然るに今や世が之を迎ふる時に際して之に紛らはしき名を採用するは他人の耳にはいざ知らず余輩の耳には何やら男らしく聞えないのである、斯く言ひて余は繰返して言ふのである「如何なる名稱の下になりとも余は聖書の眞理の說かるゝ事を悅ぶ」と（ピリピ書一章十八節）○午後七時三十分中田重治、平出慶一、藤井武の三君と共に大阪再臨大會へ出席のため東京驛を發す、源義經、熊谷直實、畠山重忠、梶原景季等轡を並べて西征の途にと上つたのである。

を破らんとて西下するのである、東西相對して東軍の勝たなかつた例はない、一ノ谷、關ケ原の吉例は亦繰返へさるゝに定つて居る、感謝、感謝。

一月十五日(水)曇　國際聯盟か基督再臨か、世界の平和は二者孰れに由て來る乎、此問題に依て基督教會は今や二大流派に分れて居る、彼等は彼なりと曰ひ我等は是なりと曰ふ、旗幟は孰れも鮮明である、洵に氣持良き競爭である、然し我等は必勝を期して毛頭疑はない。

一月十六日(木)晴　山口縣長府に於て發行する雜誌に『聖書之研鑽』といふ者がある、其體裁は善く『聖書之研究』に似て居る、主に日本基督教會の先輩の論文を揭げて居る、福音の缺乏する今日如何なる名稱の下になりとも聖書の眞理の說かるゝことは余の感謝して止まざる所である、然し乍ら既に十數年來『聖書之研究』の存立して居る以上、『聖書之研鑽』の名稱は甚だ紛らはしいではない乎、殊に其體裁に於て後者の前者に善く似寄たるに於てをや、斯かる事は勿論法律の問

述べた。

一月十三日(月)曇　雜誌漸く發送を了る、今月の發行部數三千、昨年の一月よりは六百部の增加である、再臨高唱に由て部數は減ぜずして却て增加す、實に奇異なる現象である○柏木兄弟團有志晩餐會を市内某所に催した、會する者三十餘名、内に角筈(つのはず)時代よりの舊株(ふるかぶ)が八名あつた、彼等各自の「余が始めて先生に會ひし時」の感想があり、先生自身も尠からざる興味を以て之に耳を傾けた。

一月十四日(火)晴　昨夜大風、今朝寒氣強し、午後三時より大阪大會祝福特別祈禱會が今井館に於て開かれた、會する者十五六名、中田重治君司會す、實に熱烈なる祈禱會であつた、司會者に由つて供(あた)へられし聖語(テキスト)は默示錄六章二節であつた、曰く「彼れ常に勝てり又勝を得んとて出行けり」と、實に適切なる題辭であつた、我等は必勝を約束せられた、故に祈禱會は化して感謝會となつた、會終へて後に余自身は心に大なる平安を感じた、玆に日本歷史に於て東軍は復たび西軍

勵まして主の命じ給ふ仕事に就いた。

一月十二日(日)曇　雨後の泥濘甚し、午前家族三人花輪を携へてルツ子の墓を雜司ケ谷の墓地に見舞うた、家の親友蒲池春惠同道、墓前に祈り「千代へしいはや」を歌うて後に直に青年會へと行いた、詩人テニソンの曰へるが如くに「すべてが墓に終るとならば人の世に在る何故ぞや」である、然し墓に終るのではない、永生に終るのである、墓は暫時の紀念碑である、地上の墓地が全部取拂ひになる時がぢきに來るのである○午後の講演は不相變盛であつた、來聽者は七百人位ゐあつたらう、畔上と高壇を倶にした、彼は「罪の贖」に就て語り、余は創世記第一章に就て第三回の講演を試みた、「神言ひ給ひければ……夕あり朝ありて造化は益々完全に向て進んだ、而して最後に神言ひ給うて愈々完全に達するのである、此世は未だ完全の世ではない、完全に近づきつゝあるのである、神言ひ給うてキリスト榮光の體を以て現はれ、造化の目的は完全に達せらるゝのである」と

會の報告達し、其盛大なりしに驚き且つ感謝した、東京大會より發せし祝電十一月二十六日午後會衆の前に朗讀されし由記された、祝電を送りし者は外國よりは唯我等のみであつたらしくある、誠に善き思附であつて神に感謝する。大阪大會の期日近づき同志の心意益々緊張し來る、願ふ天の戸開け聖靈の大雨我等の上に注がれんことを。

一月十一日(土)曇　ルツ子訣別の第八年である、美くしき花輪を購ひ彼女の肖像を飾つた、朝より幾回か胸が一ぱいになつた、然し彼女の逝きしは善き事であつた、之ありしが故に我等に再臨の信仰が起り自分も覺め他人も亦醒めたのである、彼女は此ために世に生れ來つたのである、今になりて考へて彼女の十八年の生涯の意味深長なる者なりし事が明白に解る、然し生みの父母に取りて代價高き犠牲であつた、誠實の生涯は孰れも悲劇である、然し終りは感謝の喜劇である、實に「聖なる喜劇」である。ハンデルの「ラツパ鳴らん時」を聽いて沈める心を

であらう、「我らが外なる人は壞る丶とも內なる人は日々に新なり」である。夜柏木兄弟團祈禱會あり、來會者僅に十二人、然し祈禱は熱心であつた。

一月九日（木）曇　桑港小林政助君來訪あり、彼地の敎勢に就て聞き大に慰めらる丶所があつた、在紐育加納久朗君より書面あり彼地に於て余の身に變事ありしとの噂あり友人等は驚愕を感ぜられしと云ふ、事は桑港の某邦字新聞に「嗚呼內村先生」と題し余に關する論文の現はれしに原因するとのことである、「嗚呼」と聞いて其論文を讀まずして余は死せりと解したのであると云ふ、此世に於ける余の天職を爲し盡した後には余は召されて一先づ眠に就くであらう、然し其れまでは大丈夫である、リビングストンの曰ひしが如くに「人は其天職を終るまでは不死なるが如し」である。

一月十日（金）雨　全集編輯室に行いた、畔上賢造千葉より東京に轉居し全集編纂を擔任することになつた、適任者を得て幸福である。米國より紐育再臨大

の新年」を祝しつゝある間に四萬の波蘭土軍は伯林市に迫りつゝあると報せられ、又米國海軍大臣ダニエル氏は議會に報告するに、若し國際聯盟にして成立せずんば米國は無比の大海軍を建造し、之を大西洋艦隊と太平洋艦隊とに兩分して「世界の平和」を計るべしとの事を以てせりと云ふ、之に對して『倫敦デーリー・グラフイツク』紙は、米國海軍大臣の海軍大擴張計畫は故意に英國を侮辱すべく發案せられたる者なりと斷言せりと傳へらる、而して同じ侮辱を感ずる者は惟り英國のみではあるまいと思はる、斯くして「平和の新年」に入りしも「戰爭と戰爭の風聲」は絶えないのである（馬太傳廿四章六節）、今や平和到來を祝すべき時ではない、基督再臨を唱ふべき時である、噫信なき教會と宣教師となる哉。

一　八日（木）晴　終日家に在りて來客に接し又讀書した、マクス・ムラーの『宗教起原論』中の長い二章を讀んだ。更に齒一本を失つた、殘餘の齒が段々少くなつた、然し心配するに及ばない、余の一生に食物を供給するに足る丈けの者は殘る

日東京市民三百萬の噂の主なる題目であらう、而して幾多の文學者、藝術家、其他近代流の紳士淑女等は彼女に對して賞讃の辭を手向けるであらう、然し乍ら余の立場より見て此事たる決して賞すべき事でない事は言ふまでもない、健全なる清黨的信仰は斯かる演劇的行爲を否認する、彼女の誠意は取るべしとするも是れ病的誠意と稱せざるを得ない、彼女をして玆に至らしめしは彼女が屢々演ぜしと云ふ北歐文學が與りて力ありと言はざるを得ない、實に忌むべきは北歐文學である、徒らに情の強きを貴び意志の清淨なるを問はない、深刻であると云へば深刻である、然し神聖でない、其點に於ては英米文學は遙かに大陸文學に勝さる、斯くして問題は單に一女優のそれではない、我國青年男女全體のそれである、北歐文學の感化に由り其一生を誤まりし日本人は決して尠くない、警誡すべきは實に此北歐文學である。

一月七日（火）晴　讀書と應接に全日を費した。基督教の宣敎師までが「平和

善く其事を示す、余は余の友人が明年より之を改められんことを勸告する。

一月五日（日）晴　靑年會の聖書講演、不相變盛會、來聽者益々增加して六百餘に及んだらしくある、長尾半平君と高壇を共にす、君は「靈的三角形」に就て語り、余は創世記第一章に關し第二回の講演を爲した。今の時に方りて宗教と科學の關係に就て語る、人は之を「舊（ふる）」しと曰ふならんも余は之を「必要なり」と曰ふ、創世記の記事は今も猶ほ永久的價値を有する者である、講演終て後に山縣五十雄君に招かれて東京驛樓上に夕食の饗應に與かる、種々の問題に就て語りしも我等が最も深き興味を有するは未來に於ける死者との再會の問題であつた、人生問題中何ものか之に優りて重要なる者あらんやである、古參の新聞記者二人相會して此問題に就て興味盡きざりしは實に奇異なる現象であつた。

一月六日（月）晴　家に在り休み且多くの友人の訪問に接した。此日新聞紙は女優松井須磨子が其戀人の跡を逐うて自殺を遂げたる事を報じた、多分此事が今

に至り稚兒ケ淵の岨上より富士山の雪景を望み、鎌倉に出で久振りにて鶴岡八幡鎌倉神社、賴朝の墓等を見舞ひ、大に青年に教ふる所あり、六時柏木の家に歸つた、貴き一日を一青年の爲に費して惜しくなかつた、彼の長き生涯の間に彼が此日の教訓を思出す時があるであらう、讀まず書かず考へずの一日であつた、余の休養のためにも甚だ宜くあつた。

一月四日（土）晴　校正と年始狀書きに一日を費した、年始狀は讀んで字の通り年始に書くべき者であつて年末に書くべき者でない、年始狀は年の始に方て友人の安否を問ふ者である、故に氣の緩やかなるに至て心を籠て書くべき者である、然るに今の人は如何？　單に「謹賀新年」と、然も活版刷りにて、然も年末忙はしき際に、何んと不人情ではないか、實に世人の爲す事は大抵惡しくある、我等基督者は世人の爲す事の正反對を爲して大抵は誤らないのである、然るに今の教會信者は萬事に就きて世人に傚うて普通の人情にすら逆ふのである、年始狀の事が

る所である、數百通の年賀ハガキの內、其多數は「平和の新年」を賀する者である、然るに此日國際社華盛頓發電報として新聞紙に掲げらるゝ者に曰く「海軍卿ダニエル氏は海軍委員に告げて曰く假令ヴェルサイユ講和會議が海軍擴張に同意せずとするも米國は世界無比の大海軍を設けざるべからず」と、若し之が事實であるならば「平和の新年」が來たのではない、新たに世界戰爭が始つたのである、而して神扱の平和會議に由て恆久的の平和の來りやう筈はない、余の殊に怪んでやまない事は基督教の宣教師までがウイルソン大統領の斡旋の下に國際聯盟と稱するが如き純外交的手段に由て世界の恆久的平和が來る事と信じて其事を年賀狀に書記して耻とせざる事である、此教師あり此政治家ありて世界は益々暗黑である、我等の恆久的平和の希望は他に在る、而して此等の宣教師は之を知らない、盲人を導く盲目的教師等よ。

一月三日（金）晴　近縣旅行を試みた、仙臺より來りし一人の甥を伴ひ江の島

一九一九年

一月一日（水）曇　茲に又新年を迎ふ、取て五十九歳、少しく短氣になつた丈けであつて別に老を感じない、否な、余の事業は今始つたやうに感ずる、今日までが長い長い間の準備であつた、而して今からが仕事である○支那流の年賀の虚禮を廢し今年よりは元旦に聖書の講義を爲すことにした、午後一時より青年會館に於て青年會主催の下に新年禮拜會を開いた、來會者三百人餘、此日舊友農學士伊藤一隆氏と共に演壇に登る、感無量、余は創世記第一章第一節に就て講じた、新年の題目として最も適當なる者であつた、元日の最も善き使用法である。

一月二日（木）曇　昨夜暴風雨、友人に箱根へ誘はれたが辭して家に在り手紙書きと讀書に從事した。マクス・ムラーの『宗敎起原論』今更らながらに面白く讀んだ、四五の來客に接した、或ひは勸め或ひは祈つた、新年の我家は敎會のやうな

苦き酒を飲ましめ給ひしも其終りに近づくに順ひ多量の旨き酒を飲ましめ給ふ、「神は我が仇の前に我がために筵を設け、我が首に膏を注ぎ給ふ、我が盃は溢る也」とは一言一句盡く我が歳末の感である（詩廿三篇）。

十二月三十一日（火）好晴　世の所謂大晦日である、然し我等は至て平靜である、借金取は一人も來ない、我等は愛のほか何人にも負ふ所はない、然し乍ら愛に於ては負ふ所無限である、我等の缺乏を補はんとて我等が乞はざるは勿論、謝絶するに關はらず友人は東西南北より此世の物に愛を籠て之を贈りて我等の歳暮を賑はす、我等は何を以て之を謝して宜しきやを知らない、權利でもない義務でもない、凡が愛である、天國の小なる雛形である、斯くて年は始まり年は終る而して最後に神の國は來るのである、惠まれたる生涯なるかな○友人の援助に因り更らに優れたる蓄音器を購ひ居ながらにして世界の大音樂を樂しむ事が出來て感謝に堪へない。

る、而して之を貧民に施すも彼等少數の一日の空腹を充たすに過ぎない、而して余が一貫の體となる時に『聖書之研究』の發行は止まるのである、嗚呼世人の註文は種々様々である、一々之に耳を貸して我が生涯は失敗に終らざるを得ない、我生涯の進路は我れ自身之を定むる、他人の之に喙を容るゝを許さない、「汝何人なれば他人の僕を審判するか、彼の或は立ち或は倒るゝことは其主に由れり、彼又必ず立てられん、神は能く之を立て得れば也」である(羅馬書十四章四節)。

十二月三十日(月)曇　用事少しく片附き讀書の時間を得て愉快であつた、歳末に際し種々の感が起るが一として感謝にあらざるは無しである、「準繩は我がために樂しき地に落ちたり、宜べ我れ善き嗣業を得たるかな」である(詩十六篇六節)、日本人の中で我れ程惠まれたる者は無いやうに思はれる、キリストを信じたること、聖書研究に身を投じたる事、教會や宣教師の世話にならざりし事、是れ今となりては余に取り最も善き事であつた、神は余の生涯の始に於て余に多量の

高尚なる論文を掲ぐるも靈魂を救ふための機關とならない。又多數の手紙を書いた、而して又宇宙人生の最大問題に就ても少しく學び且考ふる所があつた、歳の暮は物の贈答（やりとり）に忙はしくして我靈は自（おのづ）から塵（ちり）に就き易い、此時に方りて聖書研究は特に必要である。

十二月二十九日（日）晴　今年最後の安息日であつて同時に又高壇に立たざる唯一の安息日である、奇異なる感がする、然し惡（わる）くない、他人ばかりを養ふべきではない、我れ自身をも亦養ふべきである、今日の安息日は是れ我が安息日である、感謝〇人あり余を訪うて曰く「先生にして若し先生の所持せらるゝ書籍を盡く賣拂はれて其代價を貧者に施し而して先生御自身は一貫の體（からだ）となりて傳道せらるゝならば其効果は更に著しかるべし」と、實（まこと）に親切なる註文である、若し余が其註文に順ひて實行したならば人は或ひは余の淸淨潔白を賞（ほ）めて呉れるであらう然し余が一生かゝつて集めし書籍を賣拂ふとするも其代價たるや至て少額であ

事に逐はれて大問題を閑却するに至るは大なる不幸である、余は素々學者である事を忘れてはならない、亦他にも忘れて貰ひたくない。夜家族と共に蓄音器にハンデルの「メシヤ」を聽き大に我が噪げる靈を靜めた。

十二月二十七日(金)曇　在紐育竹田俊造氏より中田重治氏への通信に由り東京再臨大會の發せし電報が彼地開會の同大會に達し拍手大喝采を以て迎へられし由の報道あり甚だ嬉しかつた、斯くて我等の目的は達し此運動の世界的なる大證據が擧つたのである、感謝、感謝、此電報料を單獨にて負擔せられし千葉縣鳴濱村の海保竹松君に我等は深謝せざるを得ない。

十二月二十八日(土)曇　濕ぽい冷たい厭な日である、咽喉痛み家に在り靜養しながら働いた、不相變校正に從事した、主筆が表紙の廣告までを校正すると云ふ狀態である、然し乍ら如斯にして雜誌の神聖を維持することが出來る、雜誌其物が傳道である、共內の論文のみに限らない、如何がはしき廣告を載せて如何に

親切を以て余等を殺さん計りである、余は此一週間ばかりは毎日唯「感謝す」「有難う」と言ひ續けて居る。午後丸善書店へ行きマクス・ムラーの著書二冊を買求めた、一は友人に贈らんため、一は自身で此休暇中に讀まん爲である、ムラーの著書に接して舊き先生に會ふの感がする、三十年前始て言語學の何たる乎、比較宗教の何たる乎を教へて貰うたのは此英國歸化の獨逸人からである、ムラーは大學者にして福音主義の基督教の有力なる辯護者である、彼の懷かしきは是が故である、斯かる宗教學者は今は盡きてシカゴ大學やエール大學等の砂の如き乾燥せる學者のみ殘つたのである。

十二月二十六日(木)晴　昨夜大雪、今朝四面銀世界と成る。校正始まり遊ぶこと出來ず甚だ困る、小問題に逐はれ大問題を閑却するの虞あり大に注意を要す、依てS・アーレニウス、A・ホルムス等の著書に依り宇宙創成論の復習を始む、新年早々始めんと欲する創世記講演に備へんが爲である、仕事、仕事と云ひて仕

である、主イエスは確かに彼等の內に在さずして我等の間に在し給ふ。

十二月二十四日（火）曇　連日の集會つゞきにて疲れた、一月號雜誌編輯を終へた、然し未だ讀書の快樂を貪る事が出來ない、全國の兄弟姉妹我等を憶て呉れて如何にして之に酬ゐて宜いか其事に就て惱んで居る、我れ我が爲すべき當然の事を爲したるに之に酬ゐられて我は却て苦しいのである、每年クリスマス到る每に我等に此苦痛がある、「感謝の苦痛」である、世の人の知らざる苦痛である○京都大學講師富岡謙藏氏の死を聞いて悲んだ、余は彼の英語の手解きを爲したる者故に彼は余に對し終りまで師弟の禮を盡した、然し余は彼が余より英語を學んで更らに重要なる者を學ばざりしを悲む、願ふ天の父彼の靈を守り彼に平康を賜はんことを。

十二月二十五日（水）曇夜雪　クリスマスデーである、午前を手紙書きに使つた、凡て感謝と謝禮の手紙である、全國に散布する信仰の兄弟姉妹等は此際此日

岡山まで高壇に立つ事五十八回、二萬餘人に福音を說いた、其點に於て今年は余の生涯に於てレコード破りである、願ふ來年は更に之れ以上たらん事を。

十二月二十三日（月）雪　柏木兄弟團のクリスマス晩餐會を麹町寶亭に於て催した、會する者老若男女六十二名、明治三十三年角筈に聖書研究會を開いて以來こんな恩惠に充ちたる晩餐會は無かつた、眞實の平和は我等の間に臨んだ、歡喜の感想は湧いて盡きなかつた、實に主イエスの降誕を感謝する聖なる歡ばしき會合であつた、倫敦では三鞭酒を飲み盡すべしと云ひ、巴里では新年までは殆んど踊り續け飲み續くべしと云ひ、我帝國ホテルに於ては一千餘人の紳士淑女を招いて大舞踏會を開いて翌日の夜明け迄舞ひ盡し踊り果たすと云ふに、我等は主のために空席を供へて共周圍に握手の一鏈を作りて「ちゝ子みたま」の讃美を唱へた、眞に眞個のクリスマスは倫敦や巴里や又は所謂基督教國を代表する外交官等に由て守らるゝに非ずして、我等低き卑しきクリスチャンの間に記念せらるゝの

宇宙廣しと雖も矢張り人間の咽喉に優るの樂器はないのである〇此日一月分雜誌の原稿六分の五を印刷所に送つた、之で多分來月も日限通りに雜誌が發行のであろう、一先づ安心した、今からが眞のクリスマスである。

十二月二十二日(日)雨 本年最後の會合であつた、來會者四百餘人、余は路加傳二章十四節天軍讃美の歌に就て講じた、今や平和は到來したが是れ天使の告げし平和ではない、基督者の求むる平和は英國の首相や米國の大統領の供し得るものではない、是れ人の凡て思ふ所に過ぐる平和であつて神に善く思はるゝ者のみ享くる事の出來る者である、「地には和平、人には恩寵」と云ひて其意味を淺薄に解してはならないと語つた、講演終て後に講堂に於て有志のクリスマス晩餐會を開いた、會する者百三十餘名、特に空席を設け主の座と定め彼に供すべき者を貧者に頒ちて彼を歡ばし奉つた、記憶すべき會合であつた、是で今年の公的會合を終つた、一月六日第一安息日に同講堂に於て聲を揚げし以來、北は北海道より南は

悲痛を癒す能はず、而してキリストの福音のみ此希望を供するのである。

十二月二十一日（土）曇　年將さに暮れんとして余に一大感謝がある、其事は余の生涯が敗北でなかつた事である、余は政府に頼らず教會に據らずして余の生涯は必然失敗であると思うた、余は來世に於ける成功を期した、然れども現世に於ては失敗を覺悟した、然るに見よ余の現世に於ける生涯までが敗北に非ずして勝利である事が日々に明かになりつゝある、余は此の世に壓伏されずして此生涯を終り得るを神に感謝する、然し是れ余が世に勝つたのではない、既に世に勝ち給ひし主イエスが余の衷に在りて勝ち給うたのである、カイゼル斃れ、軍國主義斃れ、帝國主義斃れて余は夜が明たやうに感ずる、終まで忍んで我等は勝たざるを得ない、然れども嗚呼夜の如何に長かりしよ、其事を思うて余は感涙の滂沱たるを禁ずるを得ない。忙中閑を偷んで岩永氏へ蓄音器を聽きに行つた、ガリクルチの聲樂を聽いて驚いた、彼女の聲は人間の聲とは思はれない、鶯か、オリオル鳥か、

朝報社舊同僚二人と會食した、其一人は斯波貞吉君であつて今は萬朝報の編輯長である、其他の一人は山縣五十雄君であつて朝鮮京城スール・プレスの持主兼主筆、日本第一の英文記者である、而して余は『聖書之研究』の主筆であつて、今猶「記者」の一人である、我等相識りてより茲に二十三年、紳士的交際を繼續して今日に至りしを歡ぶ、禮あり情ありて人は宗教を異にするも善き友人たる事が出來る。

十二月二十日(金)雨　原稿製作にて多忙。午後今井館に於て高山鉀吾夫人タミ子の葬式を執行した、彼女齡三十八歲、基督再臨の信仰を懷き希望を以て眠に就いた、快活にして同情に篤き婦人であつた、我等一同彼女を惜まざるを得ない藤井君司會、余はテサロニケ前書四章十三節以下に就て說敎した、再來、再生、再會を傳ふる聖語である、余は確信を以て此信仰を傳ふるを得て感謝する、死を慰むるに足る唯一の途は再會の希望を供するにある、確乎たる再會の希望なくして死の

十二月十八日（水）晴　無風の好き日であつた、婦人會を今井館に於て開いた、來會者二十八人、氣持の好き會であつた、余は約翰傳十六章卅二節に就て話した、又『小供の聖書』の讀方を傳習した後、歡談に移り五時解散した○此日各地友人より品々送り來る、其内最も氣に入りしは和歌山縣の唐橋君より送來りし自製の雨傘三本と又長野縣の原田君より送來りし雪中の八ケ岳に於て採集せし高山植物二種であつた、余は斯かる贈物に接して殊に有難く感ずる、恩惠裕に教友一同の上に加はらん事を祈る。

十二月十九日（木）晴　爲したい事を爲した時に幸福は來らない、義務に強いられて爲したくない事を爲した時に大なる幸福は來る、行きたくない祈禱會に行きて大なる幸福を得て歸り來る事がある、訪問したくない人を訪問して大なる感謝を以て歸る事がある、感情は當にならない指導者である、義務の命ずる所を行つて我等は誤らないのである、義務なる哉、然り義務なる哉○東京驛樓上に於て

る、彼の中に福音は日本到る所に運ばるゝであらう、喜びの音信を運ぶがために用ゐらるゝ彼れ鞄は幸福なる奴である。

十二月十七日(火)曇　クリスマス週間である、一年中の交友時期である、多くの喜ばしき音信が諸方の友人より來る、宇都宮市の青木義雄君より左の書面が來た、

拜啓、陳は本日旅行鞄二個を送りました、右は先生が基督再臨之福音宣傳に東奔西走の御働きに隨伴されて聊かなりとも御便宜を計りたき考からであります、願くは先生が父の大なる恩惠を得て人口十萬以上の都市をめぐり悉して後、再たび當市に於て汝(鞄)を見ることを得ば幸福と存じ申候匆々、

友は我が要求を知つた、斯くて余は忽ちにして鞄大盡と成つた、余の買求めし者は小にして劣、友の送りし者は大にして優、大小共に靈的彈藥を詰込て東奔西走に快なる時を有つであらう、希望多き歳の暮なる哉。

高壇を共にす、君は青年會代表者として聯合軍を慰問し其際に實見せる二三事實に就て語つた、君子國を以て自から誇る日本の遠く英米佛に及ばざるを示されて聽衆一同深き感に打たれた、續いて余はクリスマス準備講演として「イエスの母マリヤ」に就て語つた、處女の心を能く了解せる路加傳第一章の記事に就て述べた會終つて後に青年會宗教部主任と會見し、來年も亦引續き同會主催の下に此講演會を繼續する事に決議した、余自身に取り方法は余の問ふ所でない、余は唯神の言の說かれん事を欲する、斯くて來年も亦善き高壇の余に與へられて余は深く神に感謝する。

十二月十六日（月）晴　歲末につき編輯を一週間早く始めた。旅行用具を買求めに三越に行いた、暈がする樣な混雜であつた、三越呉服店は三越虛榮店である、但し買求めし鞄は可愛くある、彼は來る十數年間余の旅行の友であらう、彼が先きに消磨のであるか、余が先きに消磨のであるか、何れにしろ面白い競爭である

が達した、彼の感想として左の一首を載す。

濁りつゝ幾千代を經し楊子江
君を待ちてや澄みわたるらん

雄大なる美はしき思想である、眞の平和が禹域四百餘州に臨むは其時である、支那問題の最後の解決は玆に在るのである、何んと優さしき勇ましき美はしき軍人の心でない乎○此日接手せる紐育發行 Our Hope 雜誌に余が去る八月輕井澤に於て爲せる英語演說の拔萃が載せてあつた、記者は之れに附記して曰く「余輩は此日本の兄弟の基督再臨に關する明白なる證詞に對してハレルヤと叫ぶ」と、余は余の微かなる聲が海外にまで響き渡りしを感謝する○此日又英國よりA・プラムマー著「馬太傳註解」が達した、是れ亦福音書研究上の一大勢力である、爾今余を助くること尠くないと信ずる。

十二月十五日（日）晴　聖書講演不相變盛會、來聽者五百餘名、益富政助君と

ダ外一同款待至らざるなし、一年に一回又は二回此所に來り相互の信仰に由りて相共に慰め又慰めらる、過去十七年間此歡喜は連續して今日に至つた、余に亦余の團體以外に聖き交際のある事を多くの人は知らないであらう、朝飯を終へて後に伯母ホンダと共に久里濱に至り十八年振りにてペルリ上陸紀念碑を仰いだ、恰かも軍艦生駒の共巨體を現はして我等の前を通過するあり、今より六十五年前に米國の黑船の此海に投錨せしを思ひ今昔の感に堪へなかつた、浦賀海峽を隔てゝ房總の風景を恣まゝにすること暫時にして徒歩平作川に沿うて歸途に就いた、三浦半島の山々の初冬の日光に輝く所、稀に見る景色であつた、午後二時四十分横須賀を辭し鎌倉に下車し一人の「娘」を見舞ひ、夕暮れ過ぐる頃家に歸つた、洵に樂しき二十四時間であつた、到る所に「伯母」あり「娘」あり世界は我家の如くに感ぜらる。

十二月十四日（土）晴　軍艦須磨乘組海軍少佐田中謙治より支那漢口發の書面

人類と國と社會とに盡す途は之を除いて他に無い、余は忠實に福音宣傳に從事して余の爲すべき全部を爲したのである。此夜兄弟團の祈禱會が催された、大雪にも拘はらず來り會する者二十餘名。

十二月十二日（木）曇　人を信ずるは疑ふよりも善くある、信じて瞞さるゝは疑うて安全なるよりも善くある、余は今日まで多くの信すべからざる人を信じて多くの苦痛を身に招いた、然し余を瞞した人は一人殘らず消えて了つて瞞されし余は幸にして今猶ほ希望の中に神の御事業に携はりつゝある、欺瞞さるゝ事は耻辱ではない、之に反して人を信じ得ない事は大なる不幸である、眞の英雄、偉人、聖者はすべて人に瞞された、音樂者ベートーベンの如き瞞されて破産したりと雖も彼は偉人たるを免かれない、然らば信ぜんかな、瞞されてもなほ信ぜんかなである。

十二月十三日（金）雪後好晴　昨夜横須賀傳道義會に來り一泊す、ミス・ホシ

である、主よ、余は汝が此事を此時余に示し給ひし事を汝に感謝し奉る。

十二月十日(火)晴　黑木三次歐米漫遊の途に就く、同志一同と共に彼を東京驛に見送つた、後に警醒社編輯室に行き靜なる一室に午後三時まで二十六年前に成りし舊著『傳道之精神』の訂正に從事した、恰も他人の著書を讀むの感がした、其時余はカーライルと詩人ローエルとの感化の下に書いたのである、故に人道的ならざるを得なかつた、然し乍ら「無形の神は之を有形の人に於て拜せざるべからず」と書きし時に余に再臨のイエスを迎ふるの下地があつたのである、余の今日の信仰は今日始つたのではない、其萠芽は初よりあつたのである、自分の舊き著書を讀んで今昔の感に堪へざる者がある。

十二月十一日(水)雪　雜誌成り發送した、大雪降り暖かき室に在りて靜かな仕事を爲した、紙とペンとインキと參考書とありて余の極樂世界がある、余の事業は福音宣傳である、余の慈善も夫れである、余の愛國も夫れである、余が神と

人、根本的惡人とは共に働く事は出來ない、然れども然らざる以上は人擇を爲してはならない、政略の爲の宏量大度ではない、主の事業に對する熱心より出るそれである、後なる者を忘れ前なる者を望みて聖徒は自づから一致せざるを得ない

（此日余は又決心した、一生の間決して教會堂を有つまいと決心した、會堂を有ちて余の信仰は團結せざるを得ない、信仰は自由にして流動的ならざるべからずである、故に會堂は信仰の大なる妨害である、故に大宗教家はすべて寺をも會堂をも有たなかつた。法然、親鸞、日蓮すべて然りである、余は小なりと雖も彼等に倣はざるべからずである、此決心を爲して今日まで會堂建築の爲に送來りし數千圓の金を夫れ〳〵寄附者に還附するの手段を取て、而して後に大なる安意を感じた、「畑は全世界なり」である（馬太傳十三章三八節）、而して若し我が會堂ありとすれば其れは木の蔭である、或は碧空の下の綠野である、教會堂、然り教會堂は傳道の妨害である、若し他人に取りて爾うでないならば余自身に取りては爾う

章を暗誦(そら)んじながら原の眞中(まなか)を横斷(よこぎ)りて家に歸り感謝して家人と共に夕餉(ゆふげ)の膳に就いた。

十二月八日(日)晴　靑年會に於ける聖書講演、不相變盛會であつた、聽衆五百餘名、演題は「クリスマス準備講演其一イエスの系圖」であつた、馬太傳一章一—十七節の研究であつて稍々神學校の講義に類して聽衆には氣の毒であつた、然し偶(たま)には斯る講演は彼等の忍耐を試むるために必要である、講演は說敎ではない、必しも面白い者ではない、時には乾燥無味の講義に堪へ得る者でなくては聖書の眞味を味ふことは出來ない。

十二月九日(月)晴　北風にて寒し。家に在りて休む。平和と言ひ一致と言ひ退いて自己(おのれ)を守らんと欲して成らない、進んで主の爲に盡くさんと欲して成る、我が爲ではない、又我敎會又は我團體の爲ではない、我主イエスキリストの爲である、彼の爲には何人とも共に働き如何なる事をも爲す、勿論不信の人、異端の

にした、農學校時代に彼の創世記を讀みて以來今日まで之に手を觸れなかつた、實に大著述である、マイヤー、ゴーデーと共に謹讀すべき書である、最も深い信仰はやはり獨逸に於て在る、其事は爭はれない事實である、ベンゲル、ネアンデル、トールツク、ヘングステンベルグ、ランゲ、斯んな大聖書學者は英國や米國よりは出なかつた、軍國主義の斃れし後の獨逸は復た舊時の靈的偉大に還るであらう。

十二月七日(土)晴　校正未だ終らず、一冊の雜誌を出すは容易の事業でない、

○初冬の夕陽相變らず美くしくある、之を戸山ケ原より望んで聖國を偲ばざるを得ない、此夕新月碧空に懸り、富士山系以西の紅と相對して得も言はれぬ好き景色である、斯る美はしき天然と死して永久に別れるのであると聞ては堪へられぬ悲みである、然し乍ら主再び來り給ふ時に我も亦愛する者と共に榮光の自由に入るのであると聞て身が躍り立つ程嬉しくある、余は獨り杖を曳き默示錄第廿一

十二月四日(水)晴　雜誌校正にて全日を費した、校正(後世)恐るべしである、隨分の仕事である、然し之を他人に任す事は出來ない、充分の注意と責任とを要する仕事である、六號活字の校正は殊に閉口である。

十二月五日(木)晴　半日は校正に、半日は訪問者の接待に過した、訪問者の內に戰艦の機關長あり、貴顯の若夫婦あり、失敗せる事業家の夫人あり、朝報社時代の舊車夫あり、孰れも誠實の人たちであつて余に取りては彼等を遇するに何等の差別がない、余は各自の要求に順ひ余の最善を爲すべく試みた、又三四本の手紙を書いた、是れ又善を爲すの善き機會である、余はキリストの僕としてすべての機會を利用して彼の聖旨を爲すの特權を與へられて神に感謝する○夜に入りて船長山桝來り快談に夕食後の一時間を過した。

十二月六日(金)晴　家の大掃除を行つた、之を家人と出入の者に任し余は勞働室に在りて校正と讀書とに從事した、殆ど四十年振りにてランゲの註解書を手

んとする法學士黑木三次の送別會を開いた、會する者二十餘人、皆な深き信仰の友であつた、食後祈禱會を開き熱き祈禱が捧げられ、溫かき感想が述べられた、實に Blest be the tie that binds, Our hearts in Christian love である、斯かる美はしき送別會が他の人に由て開かるゝであらう乎、最も眞實なる親睦會は祈禱會に變ぜざるを得ない。

十二月三日(火)晴 寒し、新たに設けられし警醒社書店編輯室に行き終日を全書編輯の爲に費した、今より十三年前朝報社の編輯室を去りし以來初めて一日を市内の一室に送り異樣の感に打たれた、自分の著書を纏めて全集を作らんとするのである、六百頁位のものが十四五冊も出來やうと云ふのである、今日の如き紙價騰貴の時に際し斯る大冊を作るは確に一の罪惡であるまい乎、後世余を稱して「無用の紙潰し」と云ふ者はあるまい乎、十五冊と云へば凡そ四百萬字である之を三度校正するとせば千二百萬字讀まねばならぬ、大事業である。

判」と云ふ題に就て亞歴士書一章二章を引き述ぶる所があつた、露獨墺の三國は今より百二三十年前何の理由なくして波蘭を分割せし其刑罰として今や國は亡び王朝は廢れし事を述べた、而して英佛米亦多くの罰せらるべき國家的罪惡を犯せし事を語り、而して日本國も亦悔改めずして其犯せし又犯しつゝある國家的罪惡に對する適當なる刑罰より免るゝ能はずと斷言した、非常に緊張したる講演であつた、聽衆は如何に感じたか解らない、余自身は能くも斯く思切つて言ひたりと思うて反て愉快であつた、福音宣傳者は恩惠計りを述べてはならない、時には神の恚怒を述べなければならない、英も米も日も恐るゝに足りない。講演終へて後に船長山桝と某所に夕食を共にして大に寛いだ。

十二月二日（月）雨　相變らず疲勞の月曜日であつた、蓄音器にゼムブリッヒ、ジュリヤ・クルプ等の音樂を聞いて疲れし靈を癒さんと努めた、午後宇佐美新夫婦の訪問に接し彼等の爲めに祝福を祈つた。夜中野神田男爵邸に於て將さに渡米せ

な世に堪えられませふ云々

「舟にて海に浮び大洋にて事を營む者はヱホバの聖業を見、又淵にてその奇しき事跡を見る」と詩人は歌うて居るが實に其通りである、神學者や教師の見る事の出來ない天と靈との事を是等「大洋にて事を營む者」は見るのである（詩第百七篇廿三、廿四節）。

十一月三十日（土）晴　編輯終り少しく氣が樂になつた、亞摩士書の復習をなして大に敎へらるゝ所があつた。プーシーの小預言書註解は侮るべからざる良書である事を發見した○夜上野精養軒に法學士宇佐美六郎の結婚披露會に出席した聖くして樂しき家庭を作らんと欲せばナザレのイエスを其主人公として据まつるより他に途なしとの勸言を爲した。

十二月一日（日）半晴　此日青年會に於ける會合は盛なる者であつた、來聽者六七百人もあつた、法學士三谷隆信所感を述べ、次いで余は「國家的罪惡と神の裁

仕事は後へ後へと出來て來る〳〵、最早來年の仕事のプログラムが大略出來た、斯くして生命が十あつても二十あつても足りない、余は天國に行いても斯る生涯を續けたい、Loborare est orare 働く事是れ拜する事である、而して不思議なる事には働かずとも宜いと云ふ余の信仰が余をして最も多く働かしむるのである。

十一月二十九日(金)晴　引續き雜誌編輯に全日を費した。東洋汽船の或る若き機關士より左の如き書面が來た。

前略　私共海に暮す者の信仰は至て單純です。海の深さを知り空の高さを仰ぎ、海の荒れと靜かさを見て自然に神の大さと人の小さを今更の如く感じます。誠に我等の航海するのは目的の地に達せんとする事です、而して乘組む者は客も船員も愛する者と相逢ふ爲です其希望なくして苦しき航海に何で堪えられませふ、希望々々です、而して何時か必ず達し得らるゝ希望です、我々人生の航海も又斯くの如しと信じて疑ひません、キリスト再び來り給ふ……然り愛する者と再び相逢ふて……盡きざる生命……此希望なくして何で此いや

十一月二十七日（水）晴　昨日米國の友人より贈り來りし寫聲盤の內にアルマ・グルツク竝にルイザ・ホスマーの合唱に成りし Jesus, lover of my soul （我が靈魂を愛するイエスよ）の音譜がある、之を蓄音器に懸けて聞いて我がハートは動き我が眼は涙を禁することが出來ない、我は此歌を聞きながら死に就きたく思ふ、我は主婦に語て言うた「嗚呼ルツ子に此歌を聞かしたかつた、然し彼女は今は是れ以上の歌を聞きつゝあるのである」と、キリストを信じ來世に關はる確信を懷くを得て我が情性は淨められて斯かる音樂を樂しみ得るに至る、我等に既に此世からして天國の快樂がある、我等の耳に既に天國の音樂が響く、嗚呼何等の福ぞ○此夜今井館に臨時祈禱會を開いた、會する者二十人。

十一月二十八日（木）半晴　雜誌原稿製作に全日を費した、甚だ氣持が良かつた、近頃は何やら生きて居る其事が愉快である、年を取ることを知らない、日の經つことを知らない、何やら此儘神の國に移されるのではあるまい乎と感ずる、

Conference, Carnegie Hall, New-York. Greeting and Love, Tokio Conference（紐育カーネギー公會堂預言大會宛「祝意と愛を呈す」東京大會より）と、多分此言葉が明日開會劈頭に大會堂の高壇上より數千の會衆に向て朗讀せらるゝ時拍手喝釆に堂も崩れん計りであらう、信仰一、主一、希望一、此希望を一にして全世界の信者は一國となり玆に敎會合同問題は其根本に於て立派に解決せられたのである、ハレルーヤ。

十一月廿六日（火）晴　雜誌編輯で多忙であつた、併せて多くの來客があつた、春洋丸桑港より歸航、太平洋岸の敎友より喜ばしき音信と贈物ありしと同時に又一の悲報に接した、和歌山縣の大鷲佐太郎十月廿九日加洲羅府に於て流行感冒にて斃れしとの事である、彼れ大に我社の事を思ひ功成りて大に之を援けんと欲したりしも其事成らずして逝きしは幾重にも殘念である、天に在す父のみ萬事を知り給ふ、彼の去りしも亦彼我の爲に最善であつたに相違ない。

十一月二十三日（土）晴　新嘗祭である、家人を盡く鎌倉見物に送り出し獨り家に在りて留守番の役を務めた、塚本善子來りて家事を見て呉れた、米國ベル氏より長き書面があつた、信書の意味と快樂とを知る者は矢張り西洋人である、雜誌編輯が始まり稍忙はしくなつた。

十一月二十四日（日）曇　青年會に於ける聖書講演不相變樂しくあつた、來聽者四五百名、大抵は聖書持參の者、之を見るさへ氣持が好くある、腓利門書を續いて講じた、大傳道師の心情を示す書、友誼維持の秘密を傳ふる書、社會改良の根本義を敎ふる書として之を講じた、若し基督敎國の民等がパウロの精神を以て福音宣傳に從事したならば今回の大戰爭を避け得たであらうと言うた時には贊成の喝采暫し止まなかつた、誠に氣持好き會合であつた。

十一月二十五日（月）晴　基督再臨研究東京大會の決議に基き自身東京中央郵便局に赴き明日より開催さるべき紐育大會に宛て祝電を發した曰く、Prophetic

賞し直に取て反し勝山町龍島に今君を訪ひ、傳道の現況並に前途に就て語り祈禱を共にし、君と君の小女とに送られ、海岸に沿うて徒歩保田町に至り、其所より汽車に乘り、夜九時柏木の家に歸つた、途中上總竹岡村に線路に近く教會堂のあるを見た、是は今はメソヂスト教會に屬すると雖も、其創設の名譽に與つた者は余自身である、明治廿四年の夏、かの有名なる第一高等學校不敬事件のありし翌年余は先愛加壽子を失ひ續いて肉體の健康を失ひ、世には棄てられ家庭は破れし後、今の鐵道院技師工學士飯山敏雄と共に此地に避暑し、其時初めて信者の集會を開き、教會建設を議決した、而して其結果が幾多の變遷を經て今の竹岡メソヂスト教會となつたのである、世に余の無教會主義を怒る基督信者多しと雖も、彼等は余が南總の基督信者の一團を勸めて始めに組合教會に、後にメソヂスト教會に入らしめたる事を知らないであらう、今回計らずも汽車の窓より余の勸諭に出て始まりし教會堂を瞥見して今昔の感に堪えなかつた。

る高山夫人を見舞ひ祈禱を共にして歸つた、一日の間に共に喜び共に悲む、是れが現世である、來世に於ては喜ぶのみであつて悲む事はないのである。

十一月二十一日(木)晴　東京市の休戰祝賀會が催された、自分は前約に循ひ午後三時五十分兩國驛發汽車にて千葉町に至り彼地基督教同盟協會々堂に於て講演を爲し瑞典人ミス・ピーターソンの傳道を助けた、七時開會、來聽者五百餘名、盛なる會合であつた、題は「世界戰爭に現はれたる神の審判」、出埃及記二十章五六節を主題として語つた、基督者として休戰を祝するに最も適當なる途であつたと思ふ、其夜ミス・ピーターソンの客となる、其質素なる瑞典風の優待を受けて嬉しかつた。

十一月二十二日(金)曇　朝八時四十四分千葉を發し、木更津線に由り房州に行いた、鳴濱村の海保竹松同行、其目的は主として勝山町に於て孤獨傳道に從事する今竹男君を訪問せんが爲であつた、先づ終點の那古船形に到り鏡浦の風景を

十一月十九日（火）好晴　久振りにて秋らしき天氣となつた、午前警醒社を訪ひ全集出版につき編輯室設置の相談を爲した、略ぼ京橋組合教會二階の一室を借受くることに定めた、それより築地八番にウェンライト氏を訪ひ種々の問題につき談話を交へた、我等は半英半和で語ることが出來て甚だ愉快であつた、我等の信仰に多少の相違なきに非ずと雖も其根本は一致して居ることが判明つた、余が今に至て知ることは信仰の堅固なる點に於て外國宣教師の大體に於て日本の教師等に遙かに勝る事である。

十一月二十日（水）晴　山形縣飽海郡西遊佐村梅木達治君より例年の通り美事なる最上川の鮭一尾を送り來る、君は余が數年前に僅計りの好意を君に表せし事を忘れずして秋到る毎に此貴重なる禮物を贈らる、眞實なる人なる哉、恐縮に堪へない、君今回一族八人を擧げて南米ブラジルに移住せらる、君の壯圖を祝し神の恩惠裕に此勇ましき教友一團の上に下らんことを祈る。此日市外駒澤村に病め

夕食を共にし聊か今夏父子並に同行三人北見野付牛に於て受けし篤き友誼的待遇に報ゐんとする所があつた、法學士三谷隆信我等の群に加はり四人食卓を圍んで愉快なる時を有つた、我等は宣教師の敵ではない、友である、彼に禮あり、我にも亦禮なからんやである、殊にキリストに在りて兄弟姉妹である、殊更にピヤソン夫人に於ては主再臨の希望を共にせらるゝあり、我等親しまざらんと欲するも能はずである。

十一月十八日(月)曇　天未だ晴れず惡しき秋である、東海の空に變化ありしやうに思はる、疲勞の月曜日である、何事も爲さず唯徒しく疲勞を癒さんと努むるのみ、對獨休戰條約成立せりとて歡ぶ聲が耳に響くと同時に軍團組織に由る陸軍對抗大演習が栃木縣に於て行はれたりとの報を以て新聞紙は充たさる、斯くして「彼等は復た戰鬪の事を習はざるべし」との預言者の言は休戰條約成立を以て實現しないのである、待たるゝは矢張り主再臨の日である。

十一月十六日(土)晴　家の靑年の誕生日に當り赤飯を炊き彼の友人を招き一家擧て彼の强健を祝した、彼れ今第一高等學校に其野球團主將たり、今年は投手として連戰連勝し殊に基督的家庭の出として能く禁酒を實行し安息日を聖守した、我等一同彼の爲に神に感謝せざるを得ない、願ふ聖父の恩惠彼に伴ひ彼に由りて此家の信仰の後世に繼承せられんことを、我等全家を擧げて主に委ね奉りし者、唯主の榮光を顯はさんが爲に用ゐられんことを祈る、女子は死して榮光を顯はせり、男子は生きて同じく顯榮の器として使用せられんことを祈る。

十一月十七日(日)雨　濕ぽくして寒し、天候惡しきに拘はらず靑年會に於ける講演に可なりの來聽者があつた、四百名位はあつたらう、始に吉岡弘毅老人約翰傳九章に依り氏の信仰的實驗に就て證明する所あり、深き感動を聽衆に與へた次いで余は腓利門書に就て講した、大にパウロ先生の情的半面に就て辯じた積りである、講演終へて後に北見在留米國宣敎師ピヤソン夫人を柏木の家に伴ひ來り

めに横濱へ行いた、信二は彼地に在りて小なる仕事に從事しつゝ茲に十數年間潜(ひそか)に聖書研究社の事業を援けて吳れた者である、今や彼が新ホームを作らんとしつゝあるに際し余は彼に對し感謝の意を表せざるを得ない。品川より横濱に至る電車中に米國宣教師にして基督教興文協會主事なるウェンライト氏と會合した、乘客多數のために席を得る能はず二人共櫻木町まで立ち通しであつた、而して車掌臺に立ち乍ら大に教勢を談じ教義を論じた、殊に基督再臨を論じた、ウェ氏は言うた「此問題に關しては余は君と海老名君との中間に立つ者なり」と、依て余は氏に問うて言うた Which do you like better (兎(と)は言へ二者孰れが貴意に叶ひます乎)と、氏は答へて言うた Of course, you (勿論貴君(あなた)が)と、余は勿論得意であつた、家に歸りて見れば左近義弼氏の再臨贊成論の原稿が届いて居た、メソヂスト教會と云へは大抵再臨反對と思ひしに豈計らんやウエンライト氏は同情的中立であつて左近氏は全然味方である、メソヂスト教會亦大に賴むに足るである。

る、但し今日此際獨逸人中神と福音とを愛する多くの人等に對し多大の同情なき能はずである、余は神が獨逸の犯せし多くの罪の爲めに彼が爲せし多くの善を忘れ給ふことなく、彼を以て亦大なる榮光を顯はし給はん事を祈る。

十一月十四日(木)午前大雨午後熄む　終日ピレモン書の復習に從事した。對獨休戰條約の條件を讀み歐洲人に愛敵の精神の更らに無きを知て悲んだ、斯くて戰爭が休止したのであつて平和が來つたのではない、眞個の平和は敵を愛するの心より來る、敵をたゝき伏せて喜ぶやうでは平和は決して來らない、宣教師を異教國に送りて愛の福音を傳へしむる英米國人にもう少し愛敵の心が行つて欲しい、彼等は言ふ基督敎の心髓はキリスト山上の垂訓にありと、然れども彼等は國家としては之を守らない、其點に於ては英米人も獨逸人も何の異なる所はない、國としては彼等は純然たるヒーズンである。

十一月十五日(金)晴　在米岩本信二夫人タケ子渡米につき彼女を見送らんた

りと謂つべしである。

十一月十二日(火)晴　始めて靜になつた、家庭的生涯を樂んだ、公會堂に於ける活動も宜ければ、小なる家庭に於ける和樂も宜い、ナヤガラの大瀑と木影の細流、孰れも樂しく孰れも感謝である、此日十一月號雜誌發送を終へた、家人其任に當り余は小園をぶらつき、書齋に小事を所辨した。

十一月十三日(水)晴　此日の海外電報對獨休戰條約調印を報じた、是にて戰爭一先づ止み、ビスマーク、ヴイルヘルム一世、モルトケ將軍等の努力は無效に歸し、獨逸帝國五十年の歷史は一朝の夢として消えて了つたのである、實に墓ない者である、ツライチユケーの政治論何處に在る、ニイチエの哲學何處に在る、人の建てたものは人に由て毀たる、政治も哲學もあつた者ではない、然れどルーテルの說きし福音、其福音の示す天國、それは天地が盡くるとも盡きない、獨逸帝國の亡びた事は世界人類のために善くある、然り獨逸其物の爲に最も善くあ

であつた、午後五時より丸ノ内中央亭に於て大會出席者有志の晩餐會が催されたオルトマンス、コルテス兩氏外六十餘名の來會者があつた、食卓の最上席は之を空席となし再來の主を迎ふる準備に當てた、彼に供し奉るべき食物は之を代價に換算し之を貧者に施して彼を歡ばし奉つた、コルテス氏之を評して The most impressive scene in the whole meeting（全會合中に於ける最も感動すべき光景なり）と言はれた、實に其通りであつた、我等食ふて彼のみ除外さるべきでない、彼にも亦食を奉りて彼を歡ばし奉り又我等の間に彼の臨在を乞ふべきである、而して彼を饗應すべき物を以て貧者に與へて彼の御心を滿足し奉る事が出來る（馬太傳廿五章三一―四〇節）、斯くて主我等の間に在まして我等は喜んで食ひ愛に充ちて相共に語り、自己紹介あり感話あり熱禱ありて此最も惠まれたる會合を終へた、我等は今後の標語として「新規播直し」を採用した、又來年一月十七日より三月間大阪中之島大阪市公會堂に於て大阪大會を開くことを決議した、實に盛た

理由を述べ、續いて平出慶一氏の講演あり、最後に余は哥林多前書第十五章五十節以下を以て再臨の信仰と傳道との間に密接なる關係ある事に就て語つた、語る者聽く者感極まり一時は數百の心靈は一體となりて滿堂ために一人となりて動く乎の如き感があつた、五時十分一先づ休會、辯士事務員等合せて三十餘名、内に外國の兄姉四名ありて共に附近の食堂に集り同一のテーブルを圍みて夕飯を共にした。七時再開宇津木中田(信藏)兩氏の證詞ありコルテス氏の有益なる講演あり最後に余も亦證明して大感謝の内に此大會を終つた。此日聽衆最も多く八百人もあつたらう、流行感冒猖獗を極め會合と云ふ會合孰れも衰微の狀態を呈する時に方り此れ丈けの會合を此問題の爲に設くるを得しは大感謝と稱せざるを得ない、此日又此預言研究東京大會より來る廿六日より三日間に涉り米國紐育市に於て開かれんとする紐育大會に宛祝電を發するの決議を爲した。

十一月十一日(月)好晴　大會の餘熱未だ冷めず來會同信の友の來訪あり愉快

と熱心とを以て此會に對せられ、其多數は三日間續けて晝も夜も出席せられて我等と天よりの祝福を頒たれた、是れ丈けあれば澤山である、是等の外國の兄弟姉妹等と共に主の再臨を證明して彼等に由て代表せらるゝ外國數百千萬の同信の友と共に此信仰を證明したのである、午後七時再開、藤井武氏とコルテス氏とは「ユダヤ人と基督再臨」に就て、余は「地理學的中心としてのヱルサレム」に就て特別に聖書學院の教員諸氏に由て調製せられたる大地圖を以て語り且つ說明する所があつた、來聽者晝夜共に昨日と多く異ならなかつた。

十一月十日（日）晴　久し振りの好天氣であつた、武藏野の小春日和は大に我等の讃美の心を勵げました、午後二時開會、聽衆は階下に溢れ階上を充たし我等の感謝と熱心とは其頂上に達した、提題は「基督再臨と傳道」であつた、聖公會の後藤久米吉氏先つ豐富なる材料を以て此信仰のために證明し、次ぎに大阪の青木庄藏氏平信徒の立場より此信仰の生命を賭して維持し且つ宣傳するの價値あるの

臨信仰の告白として特に注意を惹いた、續いて聖公會英國宣教師バンカム氏の英語講演があつた、氏の英民族イスラエル說は大分問題となつた、其後で余が英語講演を爲すべくあつたが外國人の出席餘りに少數なりしが故に余は其責任を免かれ余自身の國語を以て語ることゝなり大なる安意を感じた、依て The Second Coming of Christ Viewed From Speculative Standpoint と題し英語を以て科學哲學の立場より基督再臨を論ぜんとする余の計畫を止めて同一の論旨を馬太傳廿六章廿九節に依て述ぶる事にした、勿論聽衆の大多數はプログラムの此變更を喜んだ日本に於ける會合に於て外國語を用ふる事は今回限り廢する事に決心した、外國宣教師の此會に對する態度は至て冷淡であつた、然し乍ら明治學院のオルトマンス氏、聖公會のバンカム氏並にミス・ボイド、北海道野付牛のミセス・ピヤソン、下關のコルテス氏、青山女學院のミス・スペンサー、千葉のミス・ピーターソン、書會社のオーレル氏、近頃來朝のミス・ワイドナ、其他二三の人々は大なる同情

上は余が昨夜藤本醫學士と共に語りし所である。

十一月八日(金)曇　基督再臨研究東京大會を青年會館に開いた、來會者晝は五百餘名、夜は六百名、地方よりの來會者も多かつた、感冒大流行の此際、是れ丈けの會衆を得し事は大成功と稱せざるを得ない、頌榮あり、證詞あり、外國宣敎師の英語講演あり、ピアノあり、ヴハイオリンありて甚だ盛會である、余は開會の旨意を述べ、又夜に入りて「聖書と再臨」に就て語つた、此日會衆に最も强き感動を與へし者は京都松岡歸之氏の證詞であつた、聖書は神と人との間に成立せし契約、故に一點一劃之を尊重せざるべからずとは我等一同の主張であつた、我等は我國に於ける福音の「新規播直し」の責任を感じた、夜十時閉會、家に歸て床に就いたのは十二時であつた。

十一月九日(土)曇　數日の曇天續きには厭になつた、再臨大會第二日である、午後二時開會、群馬縣富岡組合敎會牧師住谷天來氏の證詞があつた、組合側の再

潰滅は今や時間の問題たるに過ぎない、然し今より百年後には如何に成行くであらう乎、昨日の味方は今日の敵である、今日の敵は又明日の味方となるのではあるまい乎、今や陸海軍の大擴張を行ひつゝある米國は獨逸を敵に持ちし英國と衝突するに至るまい乎、海洋の自由は米國の唱ふる所にして英國の嫌ふ所である、百年後には、然り百年を待たずして此問題が「爭鬪の骨」となつて英米開戰するに至るのではあるまい乎、而して其時には復活せる獨逸が米國の味方となりて英國を攻むるのであるまい乎、歴史は繰返すと云ふ、そんな事は無いとも限らない、多分有るであらう、何れにしても今回の大戰爭の終結を以て戰爭は廢らない、其反對に此大戰爭に由て更らに大なる戰爭は醸されつゝある、聖書の敎ふる所がやはり眞實である、戰爭は人間の努力に由ては止まない、大統領ウイルソン如何に偉大なりと雖も「鼻より息の出入する人」である、來るべき者來るまで戰爭は止まない、而して彼は必ず來り給ふ、而して平和は其時必ず地上に臨むのである。以

に面會して非常に嬉しかつた、彼に託して僅かばかりのクリスマス贈物(プレゼント)を米國の舊友に送つた、斯くて同時に二箇の舊き友誼を温めしやうに感じた、岩永の去りし後に醫學士藤本武平二が見えた、彼も亦久し振りの訪問者であつた、彼は我家の此夜の祈禱會に列した、後に彼と玄米食の利益に就て語つた、若き學士等と彼等各自の專門に就て語るは大なる快樂である。

十一月七日（木）曇　百年前には英國の敵は佛國であつた、而して英國は獨逸と與(くみ)して佛國に當り終に之を潰(つぶ)して了つた、一八一五年ワーターループの戰爭に英のウエリングトン將軍が獨のブルーヘル將軍と聯合して佛のナポレオン大帝を敗りし時に歡呼の聲は英獨兩國に於て同時に揚つたのである、然るに百年後の今日に於ては英の大敵は獨であつて、英は佛と與して二者の共同の敵なる獨に當り而して米の之に加はるありて世界平和の攪亂者としてカイゼル治下の中歐帝國を斃さんとなしつゝある、而して彼等は多分其目的を達するであらう、獨逸帝國の

十一月五日（火）雨　風邪未だ全く去らず陰鬱なる一日であつた、主なる仕事は雜誌の校正であつた。鰻の新研究に就て讀んだ、余が魚類學を棄てゝより實に驚くべき進歩である、鰻の發生の大略が判明つたのである、多くの大學者が其闡明に從事した、其一人が日本人（丸川氏）でありし事は吾人の大に誇るべき事である、鰻が我等の食膳に上る前に六七年の生涯と三千餘哩の移轉旅行がありしとは驚くべき事實である、世に奇跡が無いと云ふは僞である、人の一生、鰻の一生共に奇跡である、後者に付き簡短明瞭なる事實を知らんと欲する者は余が曾て或所に於て紹介せしJ・A・トムソン著『科學入門』第百五十頁以下を讀むべしである、A・ミーク著『魚類移轉論』の記事は詳細に渉りて面白くある。

十一月六日（水）雨　引續き陰鬱の天候である、近年稀れなる惡しき秋である、印刷所より校正の來るを待ちしと雖も來らず甚だ手持無沙汰であつた、少しく聖書の研究を爲した、法學士岩永裕吉渡米に際し暇乞に見えた、久し振りに彼

に我が疲れし靈を慰めた。此日三人の來客あり、其一人は舊き農學士であつた、彼は人生の困憊に就て語つた、精神修養としては催眠術の使用に由ると述べた、彼は容易に何人をも神と成すを得べしと言うた（催眠術を以て）、而して最後に余に金三百圓の調達を求めた、余は勿論其要求に應じなかつた、余は彼に告げて言うた「福音の宣傳者たる余の家には金錢の貸借は一切ない、我等は愛を以て贈り愛を以て受く、證文とか利息とか云ふ事は此家に於ては其文字の發音をさへ聞かない」と、彼れ去りて後に余は深き感慨に打たれた、余は第一に彼に對し深き同情を禁じ得なかつた、第二に眞の精神教育を伴はざる實業教育の終に玆に至らざるを得ざるを思うて悲んだ、事業、成功、蓄財と、噫農學校よ、汝は幾人の信仰的勇者を生みしぞ、汝の子等の多數は人生の失敗に斃れ又其成功に腐れつゝあるに非ずや、汝今にして自己(おのれ)に省み汝の途(みち)を改むるにあらざれば汝は無數の失敗兒の母となりて終らん、噫農學校よ、神を畏るゝは亦農學の始めなるを覺れよ。

十一月二日（土）曇夜雨　風邪未だ全く癒えず終日家に在りて讀書と校正とに從事す、舊き知人二人逝去の報に接した、不相變基督信者ならざる者の死を慰むるの言葉なきに苦しむ、世に悲慘なるものとて不信者の死の如きはない、然かも是れ毎日の出來事である。

十一月三日（日）晴　第六回講演會を青年會に開く、來聽者四百餘名、流行感冒にて缺席者多し、題は前回の續き、宇宙の完全なるが如くに完全なる聖書に就いて語つた、特に青年學生が天然を研究するに方り其中に神を認むることの必要に就て述べた、此日より余一人にて講演を受持つことにした、爲に正午後四時切上げとなり來聽者は滿足であつたらしくある、時間を短縮するは大なる慈善である。桑港の友人より冬帽子一箇を贈り來る、鍔(つば)廣く平民的にして詩人ホイットマンの被(かぶ)りしやうな物である、余の滿足此上なしである。

十一月四日（月）晴　休養の月曜日である、庭の小菊と山茶花(さざんくわ)が滿開であつて太

て一體とせられたれば互に勵まし信仰の善き證人たらむ事を誓ふ。我は主の我を愛し給ふ如く妻なる卿(きみ)を愛して終生渝(かは)らざる可く、其喜と苦とを共にし一身を捧げて共に神の御榮の揚らむ爲めに用ゐられん事を願ふ。

基督再臨の信仰を表明したる初めての結婚式である、此信仰を以て結ばれし縁は陰府(よみ)の門も之に勝つべからずであると信ずる。

十一月一日(金)晴　少しく風邪に冐された、故に家に在て靜養した、大責任を目前に控へて余は余の健康を害してはならない。余の友人中に余が基督再臨を高調するの結果として新たに一宗派を起すに至らずやと言ひて心配する者があると聞いた、然し其れは無益の心配である、再臨の信仰は宗派を根本的に合同する者であつて新たに宗派を作る者でない、殊に又此信仰なくして基督教はないのである、再臨除外の微弱なる基督教は終におのづから消滅するに至るは明かである。

婚式準備の爲にゴタツいた、然し原稿全部を纒めて之を印刷所に送つた、又費府預言大會の報告書を讀んで大に益せらるゝ所があつた。夜金井清に招かれて東京驛樓上にて夕食の馳走に與つた、二人九時まで種々の問題に就て談じた、清き愛すべき漢(やつ)である、斯(か)る人を友人(フレンド)として又弟子(デサイプル)として持ちたる余の特權は大である、同時に又余の責任は重くある、願ふ神の恩惠に由り彼が如き者に師として待(もて)さるゝに足る價値ある者とならんことを。

十月三十一日(木)晴　此日住友社員法學士江原萬里對黑崎祝子の結婚式を今井館に擧げた、余が司りし第十九回の結婚式である、我等の結婚式は簡單にして嚴肅である、音樂なし儀禮なし、只聖書と祈禱とを以て神の前に誓ふ、左に新郎が新婦に對して誓(ちか)ひし誓約(せいやく)の言を揭ぐ。

我等の結ばれしは我等の救主イエスキリストの御心なるを信ず。彼は我等を世より選び別ち、來る可き榮の御國の民たる事を約束し給へり、我等此世に在りて此望をもち主に在り

は何が欲しさに市街生活を營んで居るのであらう乎、若し彼等各自をして其言はんと欲する所を言はしむるならば何と言ふであらう乎、彼等の中幾人が神のため眞理のため靈魂のために興味を持て居るのであらう乎、然し神は深き憐愍を以て人間の此集團を瞰はし給ふであらう、我に用なき此大バビロンは神に用なき者ではない、故に我にも亦用ある者でなくてはならない（約拿書四章十一節）。

十月二十九日（火）曇　雜誌編輯にて多忙、原稿又原稿、何時終ることにや。此日英國シュパンク會社より好本君を經て外套を加へたる冬洋服一組に對する羅紗地を寄贈し來る、此物價騰貴の時に際して大助かりである、何を食ひ何を衣んとて思ひ煩ふに及ばない、必要の時には遠き未知の人より斯かる物を贈り來る余は無給の傳道師であるが實は有給以上である、神は其宇宙大の富を以て余を養ひ且つ裝ひ給ふ、此事を思うて終日言ひ難き歡喜に溢れた。

十月三十日（水）雨　引きつゞき原稿製作にて忙はしかつた、家は江原萬里結

まない事は確實である、恐る戰後に米國が大壓制國となりて世界に臨まんことを世界の平和は民主々義の勝利に由て來らない、キリスト再臨ありて人類を統治し給ふ時に來る。

十月二十七日（日）雨　第五回講演會を青年會に於て開いた、雨天と流行感冒とにて會衆は例會よりも寡かつた、凡そ三百人位、澤野鐵郎君と高壇を共にした題は「詩篇第十九篇の研究」、先づ第一に星と太陽とに就て語つた、星は靜かに、太陽は溫かに、神の榮光を現はし其愛を傳ふる事に就て述べた、青年時代に讀みしプロクターやフラマリオンの天文書が此時に用を爲した、福音を傳ふる者に取り不用の智識とてはない、天文と聖書との間には深い深い關係がある。

十月二十八日（月）好晴　休息の月曜日であつた、然し別に休息にならなかつた、用を達しに市中に行つた、大なるバビロンに對し嫌氣充滿ちて家に歸つた、其書店と印刷所とを除いては大市街も我に取り何の用あるなしである、其饒多の人

居る。家の婦人二人まで流行西班牙感冒に罹り余も亦多少家事を助くべく餘儀なくせられた、庭の掃除をさせられた、物置の整理をさせられた、然し是れ亦人生である、聖書を學び宇宙を究むるのみが人生ではない、「小なる仕事小ならず」である、下女の代りを爲し、彼女の仕事を助くる事も又聖き、大なる事業である、而して此事を余に教へて呉れし人は米國ドクトル・ケルリンである、彼の恩や忘るべからずである。

十月廿六日（土）曇　冷氣頓に加はり初冬の感あり、家の病人未だ癒えず家事澁滯多し、雜誌原稿二十一頁分を印刷所に送る、三四人の訪問客あり。世界の平和到らんとして到らず、米國は獨逸が再び武器を以て起つ能はざるに至るを要求すると雖も自身は海軍大擴張を計りつゝある、武器は獨逸人の手に在りて危險にして米國人の手に在りて安全なるや、大なる疑問ならざるを得ず、若し武器の撤廢を主張するならば何故に自身も之を撤廢せざる、斯くて此戰爭に由て戰爭の息

の手より余輩の所に來る、曰く「汝愛を說きしも自身愛に於て缺くる所あり」と、曰く「汝僞りの預言者の出現を憂ふると雖も自身共一人なるに非ずや」と、實に余の見し所に由れば岡山縣人程批評眼の鋭き者はない、彼等は福音を聞くも自身が之に由て救はれんとは努めずして福音を批評し又其宣傳者を非難する、彼等は祈禱の精神に乏しく循て宗教を皮相的に解して其奥に達せんとしない、キリストの再臨を說けば既に之を解し居れりと云ひ、又キリストは既に臨りて岡山附近に在ると云ふ、まことに金光教黑住教等の發源地たる岡山縣は宗教に最も熱心なるが如くに見えてキリストの福音には緣の最も遠き國であると言はざるを得ない、岡山縣下に基督教が盛んであると言ふは組合教會式の政治的基督教が盛んであると言ふに止まる、然し是れ余が岡山縣を見限るの理由とはならない、其反對に余は特に彼地のために祈り且つ盡さねばならぬ。

十月廿五日(金)晴　此二三日來客なし秋冷快くして詩篇と天文書とを讀んで

の時間の減少せしを悲む、此日少しく天文學を復習した。

十月廿三日（水）雨　友人田島進君の幼兒永眠し、牛込日本基督教會に於ける其葬式に列した。關西の或る讀者より基督再臨にのみ熱中せずして廣く基督教に就て述べよとの注文に接した、即ち基督の政治觀、經濟觀、社會觀、宇宙觀、倫理觀、平和觀等に就て述ぶる所あれとの事であつた、何やらキリストを政治家か哲學者と見ての注文らしく聞えて甚だ奇異に感じた、而してキリストは斯かる問題に對して明白に答へ給ふのである「汝等先づ神の國と其の義とを求めよ、然らば是等のものは盡く汝等に與へらるべし」と、贖罪と再臨とが能く解つて是等の問題はおのづから明白に成るのである。

十月廿四日（木）曇　過般の岡山に於ける會合は我等同志に取りて大なる成功であり岡山縣人（作州人を除き）に對しては大なる失敗であつたと言はざるを得ない、溢るゝ計りの感謝が同志より達すると同時に多くの不平冷評非難が同縣人

十月二十日（日）好晴　好き安息日であつた、第五回講演會を青年會に於て開いた、此日より余自身が司會する事にした、詩篇第一篇を講じた、後で自分ながら心持が快かつた、自分に取り聖書を講ずるに優さるの快樂はない、來會者五百餘人。

十月廿一日（月）晴　午前横濱に行き米國聖書會社を訪ひオーレル氏に會ひ用事と信仰と時事に就て談じた、岡山行きの疲勞がまだ全く去らない、故に仕事がまだ手に就かない、餘りに用事が多くして何處から手を下して宜しきや解らない、又例に依て信ずるのみである、信仰是れ事業である、何も爲さずとも可い、只信ずれば可いのである。

十月廿二日（火）晴　雜誌原稿が始まつた、戰闘準備のために勞働室（書齋）を整理した、コスモス開き山茶花咲き、燈前夜靜にしてペン走らんとす、但し舊時の憤慨はない、又階下にルツ子の聲は聞えない、人生の責任は益々加はり讀書

物は余を待つて居た、或は余の再臨觀を攻擊する者、或ひは岡山に於ける余の行爲を非難する者、或ひは金錢的援助を乞ふ者、其他地方出演の依賴、結婚式施行の日取、感謝の辭、種々雜多である、米國ベル氏よりの相も變らざるダビデ對ヨナタン的書翰も其内に混つて居た、之を盡く處分するは二三日の仕事である、傳道旅行覿面の報は常に疲勞と文通の澁滯とである。

十月十九日（土）好晴　余が今度關西に行きて感じたる事の一は教會が無教會主義の故を以て余を惡む事の甚だしい事である、而して其教會の如何なる者である乎を見るに彼等は信仰に於て淺薄である、行爲に於て放埒である、彼等は余が神と聖書とを尊ぶ程度に於て之を尊ばない、彼等は余が安息日を聖守する程度に於て之を守らない、彼等は世俗的である佚樂的である、彼等は教會の事に熱心なる丈けであつて神と正義と福音との事には至て冷淡である、彼等が余を惡むは無理ならぬ事である、余は彼等に惡まるゝ事を以て大なる不幸であるとは思はない。

體であつて疎な眞理を語る事は出來なかつた、途中序ながらの講演は自今絶對的に廢止すべきである。

十月十七日(木)晴　午後大阪を辭して京都に到り四五の友人を訪問せしも、秋の好晴を利用して郊外に遊びしにや孰れも不在であつた、然し其れが爲めに一日の靜養を得、二條橋より秋光に輝く三十六峯を眺め、後便利堂主人と共に青木君に招かれて鴨川の畔に筑前名物鳥の水たき料理の馳走に與り、八時二十分發の夜行に乘り歸途に就いた、此夜十三夜の秋月明かに、石山寺の勢多川の遙か下流に月光を浴るを望み、濱名の月は睡夢の間に之を逸し、働らきを終へて後の家路、毎時の如くに樂しかつた。

十月十八日(金)晴　朝品川に着けば二人の婦人が出迎へて呉れた、其一人は云ふに及ばず、他の一人は余の家に常に出入する一人の教友のミセスであつた、三人連立て家に歸り傳道旅行の實見を語りて正午に及んだ。相變らず多數の郵便

日は屋島、今日は一ノ谷である、平家の運命の逆行である、勝利必然である、京都大阪より教友三人來りて余の行働を助けられた、壽永の昔し源平鬨の聲を揚げて爭ひし所あたりに最も恵まれたる會合が開かれ、一ノ谷の溪流、淡路島の遠景我等の讃美の歌を助けて古の戰場は今の祈禱の殿と化した、此夜此所に客となり松林中に靜かなる一夜を過した、薩摩守忠度の「行き暮れて木の下影を宿とせば花や今宵の主ならまし」とは打て違の幸福である。

十月十六日(水)雨　午後三時まで一の谷に止まり、附近の景色を賞し又再臨の福音を語つた。蘆屋に友人を訪ふべくありしも時間足らずして遺憾ながら之を通過して夕暮頃余の大阪のホームなる安堂寺橋通り永廣堂本店今井方に着いた、過去十數年間余は此家に客たりしこと幾回なるを知らず、故に大分氣儘を語るの特權を與へられた。夜七時より上町基督信者集會所に於て同信の人たちの集會が催され之に出席して傳道信仰に就て述ぶる所があつた、乍然例の通り勞働後の

會食であつた、會する者男六人女二人、ベービー二個、「東山練次壽子の新ホーム、牛鍋つゝく柏木の友」で萬事が盡きて居ると思ふ、夜最後の集會として來會者中特志四十餘名の感話祈禱會が開かれた、恩惠溢るゝ會合であつた。

十月十四日（月）晴　終日休養。午前九時敎友二人と共に兒島灣鐵道に由り岡山を發し宇野を經て瀬戸内海を渡り正午頃讃岐高松に着いた、余の生れて始ての四國行である、栗山公園を見、後屋島に行き談古嶺より古戰場を瞰下し感慨に堪へなかつた、源平當時の陣立が善く解り數十年來の疑問が解けて嬉かつた、夜九時高松を發し再び海を渡り夜半岡山に歸つた、山上より見たる瀬戸内海の風景は絕美である、松島如き者の及ぶ所でない、歴史と天然と希望の福音と三者具はりて我等三人の心は此日感謝と歡喜に溢れた。

十月十五日（火）雨　午前九時五十分岡山を發し、午後二時半播州須磨に着き、一ノ谷なる友人某の邸を訪うた、或る重要なる信仰的援助を與へんが爲である、昨

は「聖書問題と再臨問題」、中田兄の講演殊に有力であつた、夕有志晩餐會を開いた、來會者六十餘名、斯かる會合としては少しく失敗であつた、中國人は餘りに慧く（かしこく）ある、爲めに單純なる福音は彼等には受け納れ難いやうに見える、此地に多くの異端迷信の行はるゝを發見した、我等の說きし基督再臨の迷信的に解せらるゝを見て悲んだ。

十月十三日（日）晴　好き秋の日和である、朝飯前に獨り後樂園内を逍遙し純日本式の庭園の秋色を賞した、旭川の流れ、浮田秀家の築きしと云ふ天主閣、强く余の心を動かした、園中小高き所に登りて朝の祈禱を捧げた、特に岡山市の惠まれて此所に眞の福音の榮えんことを祈つた。午後三時開會來聽者前日より少しく減少、中田君は「僞（にせ）キリストの出現」に就いて、余は「聖書の大意」に就て講じた、後（あと）で感謝献金二百圓以上ありしと聞て我等の努力の無效ならざりしを覺つた、夕食を文學士石川練次の新ホームに於て來會の柏木連と共にした、愉快なる

十月十日（木）晴後曇　岡山行旅裝にて忙はしく、午後四時二十分品川發にて西下の途に就いた、中田重治君柴田鐫次君同行す、本年に入りてより第四回の關西行である、實に珍らしい事である、寢臺を取てもらひ安き眠りに就いた。

十月十一日（金）雨後晴　午前五時半京都に於て青木庄藏君一行に加はる、汽車中の談希望を以て溢る、午前十時四十分岡山驛に達した、數多の教友の出迎を受け、弓ノ町土居方に迎へられて其客となつた。午後七時より縣會議事堂に於て第一回講演會を開いた、題は「世界問題としての基督再臨」、來聽者五百餘、北越より、九州より、出雲より、四國より、京阪神は勿論のこと、目醒ましき會合であつた、我等勵まされざるを得なかつた、斯かる會合が此時に方て此地に於て開かれしとは實に豫想外であつた、聖靈たしかに我等の間に働らき給ひつゝある。

十月十二日（土）晴　午前東山公園並に後樂園に遊ぶ、中國の秋色に愛すべき者あり、午後一時より第二回講演會を開く、昨日同樣五百餘名の來聽者あり、題

十月八日（火）半晴　在千葉町米國宣教師ピーターソン女史が彼地に於て說教會を開かんため其相談に見えた、瑞典生れの敬愛すべき老宣教師であつて熱心なる再臨信者である。午後青山學院內監督ハリス邸に於て數多の美以教會宣教師の爲に設けられし接待會に臨んだ、久振りにてメソヂスト信者と交はり甚だ愉快に感じた、此教會に一種獨特の溫味がある、其中に所謂大人物なしと雖も日基教會に於て見るが如き佞惡の人、又は組合教會に於て見るが如き傲慢無禮の人を見ない、余は教義の點に於てメソヂスト信者と共なる能はずと雖も、感情の上に於て彼等に甚だ近く感ずる、聖父の恩惠裕かにウエスレーに於て創始られし此教會の上に降らんことを祈る。

十月九日（水）半晴　校正終る。夜兄弟團の月並祈禱會が今井館に於て開かれた、出席者三十餘人、まことに靈に充たされたる會合であつた、其內にワイドナー女史があつた、宣教師が我等の祈禱會に加はりしは是れが始めてゞある。

者六百餘名、引續きかゝる盛會を與へられて感謝に堪へない、何事も愛と信仰である、政略方法は害ありて益なしである、殊に信者各自の私事に立入りて共傳ふる福音を私議してはならない、人は其主張に由て共に働くべきである、私行は人の關する所ではない神の主どり給ふ所である、此運動、神の恩恵に由り基督教界の此通弊を除去するに至らんことを。

十月七日(月)雨　午後二時より青年會に於て基督再臨研究東京大會發起人會を開く、西洋人側よりは明治學院のオルトマンス氏、聖公會のバンカム氏、バプチスト教會のクラゲツト女史並に英國大使館のベンチク氏出席し、日本人側よりは中田重治、澤野鐵郎、平出慶一、坂田祐の諸氏並に自分が出席した、十一月八日より三日間を期して開會することに決議した、此問題の前には人種教派等の差別は全く滅えて了ふ、神の御惠みに由りて教義の會合でなくして愛のそれであらんことを祈る。

普通の基督教は社會に其勢力を認められて何の恥づべき所なき者となつた、隨て之を信じ宣傳するの興味甚だ尠きに至つた、再臨を中心とする福音は然らず、此福音は社會に無視せられ教會に嫌はる、此世の名士と稱せらるゝ者は之に携はらんことを恐る、然れども是れ福音の特に貴き所以である、我は基督再臨の福音を恥とせずである、是れユダヤ人には躓く者、ギリシヤ人には愚なる者なり雖も、凡て信ずる者には神の大能また智慧たる也である、余は此際不人望なる福音を授けられしを神に感謝する、之を信じ得て余は信者らしき信者と成りしやうなる感がする。

十月五日（土）　**未晴**　引續き雜誌の校正にて多忙である。在布哇T・リチャーズ氏に手紙を書いた、彼は平和主義者にして再臨信者である。

十月六日（日）　**未晴夜雨**　第三回講演會を青年會に開く、塚本虎二と高壇を共にす、彼は高等批評の立場に就て、余は實驗的に見たる聖書に就て述べた、來聽

界を敵に持ち全人類の平安を紊してまで戰爭を繼續するの理由はない、獨逸は今や負けても恥ではない（軍事上より見て）、英國は勝ても名譽ではない、米國はその參戰に由て此世界的爭鬪に關し決裁投票を投入れたのであつて、此投票に由て勝敗は既に定まつたのである、獨墺側は其時潔く降伏すべきであつた、勿論戰爭に由て正邪は判明らない、正邪の判明は神の最後の審判まで待つべきである、乍然此罪の世に在ては萬事を多數決に由て定むるを最も有效なりとする、一國が他國に負けて兄弟が兄弟に負けたに過ぎない、同じ人類である、獨逸よ讓れよ負けよ、負けて素の舊き獨逸と成れよ、海と陸とは之を他國に讓り、汝は靈界の霸者となれよ、全世界のため、ルーテルとカントとの獨逸のため、余は此際獨逸の負けることを祈る。

十月四日（金）曇　雜誌一七―三二頁の初校を終つた、殆んど半日の仕事であつた、終日パウロの「我はキリストの福音を恥とせず」との言に就て考へた、今や

十月一日（火）雨　主婦の母の一周期である、萩餅を作り友人に頒（わか）ちて彼女を紀念した。札幌獨立教會牧師竹崎氏の訪問あり大に北海道傳道に就て談じた、やはり余が最大の興味を有するは此問題である、余は何故に北海道を忘れることが出來ないのであらう乎。

十月二日（水）雨　十月號雜誌編輯を終る、隨分骨が折れた、明治三十三年十月其第一號を出してより玆に滿十八年、隨分長い年であつた、其間の恩惠を顧みて感涙の滂沱たるを禁じ得ない、獨立と贖罪と再臨と聖書全部神言說、是等を主張し得ることは何等の恩惠ぞ、是れ日本國の總理大臣たるに勝さる幾層倍の名譽である、「準繩（はかりなは）は我が爲に樂しき地に落ちたり、宜べ我れ善き嗣業（ゆづり）を得たる哉」である（詩篇第十六篇六節）。

十月三日（木）雨　外電は勃牙利國（ブルガリヤ）無條件降伏を傳ふ、之にて世界戰爭の終熄近けりと觀測せらる、實（まこと）に喜ぶべき事である、如何に國家存續の爲であればとて世

う筈はないと、斯く演じて熱汗全身を潤し、白シャツ一枚ペタ〳〵になつて了つた、實に惠まれたる會合であつた。

九月三十日(月)荒れ模樣　昨日寺内内閣倒れて原内閣が成つた、藩閥内閣が死んで政黨内閣が生れたと云ひて喜ぶ者がある、或は多少の進歩であるかも知れない、然し乍ら別に喜ぶ程の事ではない、如何なる内閣が成るとも世は依然として罪の世である、暗黑の世である、野心欲望威を逞しうし競爭暗鬪絶ゆる間なしである、「たゞ律法と證詞とを求むべし」である（イザヤ書八章廿節）、たゞ聖書を求むべしである、眞正の政治はキリストの再臨を待て始めて來るのである。此日明治學院のオルトマンス氏聖書學院の中田重治氏並に余の三人靑年會館の一室に會し來る十一月八、九、十の三日を期し、東京に於て内外基督信者の基督再臨研究大會を開くことを決議した、多分事實となりて現はるゝであらう、事は段々と大きくなりつゝある。

九月二十八日（土）　午後に至りて晴る、午後六時より府下中野神田男爵邸に於て柏木兄弟團有志の晩餐會を開いた、會する者男女四十名餘り、最も惠まれたる會合であつた、二十年前に角筈に於て聖書研究會を開いて以來此夜程惠まれたる會合の催されし事を覺えない、實に茲に愛を以て鎔和されたる靈的家庭の現出を見るに至つたのである、而して單に靈に於てのみならず知慧と知識に於て我等は大に惠まれたる事を實見した、散ずるに先だち一團手を繋ぎ愛の一環を作り乍ら一同「聖父聖子聖靈の」を合唱し、感謝に溢れて各自家に歸つた。

九月二十九日（日）雨　蒸し熱し、第二回講演會を青年會館に於て開いた、來會者前回よりも少し多くして六百人餘、坂田祐第一に登壇して「永遠に生きんとする欲求」と題して演し余は其後を受けて「聖書は神の書なり」と云ふ事に就て述べた、聖書は永久に變ぜざる書、其點に於ては猶太民族と同一である、聖書は深遠限りなき書、其點に於ては造化と同一である、神の書にあらずして斯る素質を備へや

之に由て見ればベルグソンは基督再臨には大反對であることが解る、然し敢て怪しむに足りない、余はベルグソンの哲學を愛し少しく之を讀んで見たが未だ曾て一回も哲學者がキリストに對して尊敬の言を發せし文に接したことはない、思ふに彼は所謂近代人であつて福音の深い事には少しも接して居ないのであらう、如何にベルグソンと雖も福音の心髓を「直觀」せずして福音は解らない、隨て基督の再臨は解らない、之を單に偉人の出現と見るは極めて淺薄なる見方である、心靈的實驗に於てはベルグソンは迚もカントに及ばない、ベルグソンの反對少しも恐るゝに足らずである、彼の哲學とても亦暫時のものである、草は枯れ其の花は落つ、然れど主の言は限りなく存つ也、ベルグソンの哲學は長くして百年にして廢れるであらう、然れども聖書と其傳ふる基督再臨の信仰は永遠に繼くのである、ベルグソン百人を合はしてもパウロ一人丈けの權威とはならない、余は哲學者の此言を讀みて彼と彼の哲學とに對する余の尊敬が一時に衰へしやうに感ずる。

九月二十六日(木)晴　十月號雜誌編輯に取掛り、原稿三分の二を纏めて印刷所に送つた。午後佐藤北海道大學總長の訪問を受けた、舊時と舊友に就て語つた。夜舊朝報社同僚二人と某所に會食し時事に就て語り衞生家事等に就て互に相敎ふる所があつた、是れ我等が過去二十餘年間繼續し來りし殆んど每月の例會である余が此世の事に就て敎へらるゝは主として此會合に於てゞある、故に余に取りては最も有益なる會合である、余は滅多に此會に缺席したる事はない。

九月二十七日(金)雨　秋雨蕭々たる一日であつた、雜誌の原稿六七枚書いた。今朝の『朝日新聞』米國通信に「華府のベルグソン」と題し、大哲學者の言として左の如き者が載せて有つた、

大戰が基督敎に及ぼす效果如何に就ては一部に傳へらるゝが如き「基督再現說」を絕對に否定し「人類の多數が一樣に理想的に向ふものでなければならぬ」といふ民衆主義であつて偉人出現の如きは敎授は故らにも厭はしいものゝ如くであつた。

ると言はねばならぬ。

九月二十四日（火）大暴風雨　家は動き屋根は雨漏り垣は倒れ戸は破る、脆い我生涯なる哉、天然は或時は殘酷であるかのやうに思はれる、然し一年一度の暴風雨と思へば耐へ易く、暫時の假の住居と思へば意に懸らない、來客なく校正と手紙書きとに平靜なる一日を送つた。

九月二十五日（水）晴　大風の後の平靜である、好き秋の日和であつた、朝市中に二三の友人を訪づれた、其後差したる事を爲さずして一日を送つた、信者に取り最も善き日は多くの事を爲したる日ではない、最も深く主イエスを信じたる日である、何を爲さずとも可いのである、彼を信ずれば足りるのである、信是れ最大の行である、故に何をも爲さゞる日、然り何をも爲す能はざる日が多くの場合に於て信者に取り最も善き日である、主を信ずるの快樂、唯單に信ずるの快樂、信者は祈求て多く此快樂を取るべきである。

一の兩氏と共に登壇し、「聖書に對する吾人の態度」と云ふ題目に就て演した、余は聖書は謬なき神の言であると斷言して聖書有謬說を排して其理由二三を述べた、余の言は頗る激しくあつた、然し乍ら聖書を辯ずるに方て余は熱心ならざるを得ない、「爾の家を思ふ熱心我を食ふなり」である、余は聖書無謬說のために辯ずるを得て神に感謝する。

九月二十三日(月)雨　所謂「青色の月曜日」であつた、精神的疲勞の結果萬物が青色に見えると云ふ日であつた、日曜日の翌日は余は半病人である、而して斯かる特權に與ることを感謝せねばならない。此日多くの訪問者があつた、其内に宇都宮の靑木義雄君、米國歸りの田嶋進君、橫濱の齋藤梅吉君、京城の山縣五十雄君があつた、而して又埼玉縣粕壁町の信者二人來りて其地方に於ける敎勢挽回策に就て相談を受けた、泣くべき事あり、憤るべき事あり、歎ずべき事あり、キリストの心を持て世に對して萬事萬物に深き感動が伴ふ、是れ又感謝すべき事である

非聖書的なり非基督的なりと言ひて誹謗する組合教會の先輩方と運動を共にせらるゝ事である、己の說く敎の心髓骨子を非聖書的なり非基督的なりと誹る人等と運動を共にして福音師の地位が保てる者であらう乎、其事が余には解らない、斯く言ひて余は勿論○○君を恨むのではない、余は勿論○○君なくとも余の傳道を繼ける事が出來る、然し乍ら○○君が余輩君の信仰の友を去りて君の信仰の敵と組みし給ふ其事が余にはどうしても解らない、傳道は情實の事ではない、又自分の便宜の爲めではない、傳道は信仰の爲である、然るに我が信仰を……而かも其心髓骨子を……嘲けり誹る人と與して其れで本統の傳道が出來るであらう乎、余には其事がどうしても解らない、○○君たる者は此事に關し長き間君を愛し君を信じ來りし余の心の疑問を晴らして給はるの必要があると思ふ。

九月二十二日（日）雨　秋期大運動第一回の聖書講演會を東京基督教青年會々館に於て開いた、來聽者五百名乃至六百名、盛會であつた、余は藤井武、平出慶

受け納れらるゝのである、基督再臨を信ずるの利益甚だ多しと雖も今の教會に排斥せらるゝ事は其最も大なる者である、天より聲あり曰く「汝等その中より出づべし」と、我等は此世に倣ふ今の教會より自から進んで出づべきであるに、彼等は我等の信仰の故を以て我等を彼等の中に受けざらんと欲す、何ものか之に優さるの幸福あらんやである（默示錄十八章四節）。

九月二十一日（土）曇　近頃〇〇〇〇君の再臨運動に對する態度の甚だ曖昧なるに由り書を贈りて其如何を問合せしに君より左の返辭が來た。

〇〇〇〇は主の十字架を說くべく惠まれたる人にて候、勿論再臨は〇〇〇〇の說く教の心髓骨子に候も少しく考ふる所有之候間中田兄や大兄との運動には暫らく參加申兼候間惡からず御思召被下度候。

去ると言ふならば止むを得ない、然し乍ら余の甚だ解し得ない事は「再臨は〇〇〇〇の說く教の心髓骨子に候」と明白に言ふ〇〇君が基督再臨の教は亡國的なり

すべき人である、彼は商人、我は士族上りの傳道師、而かも我等は十數年來肝膽相照らすの信仰上の友人である。

九月十九日(木)晴　南風にて蒸熱し、差したる事を爲さず、自身のため他人のため小なる事を爲せしのみ、然れども必要の讀書は之を繼續した、殊にジェームス・H・ムールトン氏著「埃及の塵溜より」を讀みて大に教へらるゝ所があつた、今や方法を講ずる者多くして眞理を供する者尠き時に方て我等は零碎の時間を利用して新らしき智識を攝取すべきである、方法は拙きも可なり、然れども眞理は深遠ならざるべからず、讀書豈怠るべけんやである。

九月二十日(金)半晴　聞く日本に於ける基督教會の合同は基督再臨並に聖書無謬說を信ずる者を除外して爲されんとしつゝありと、誠に結構なる事である、斯くて余の如きは勿論除外せらるゝのであつて幸福此上なしである、俗化せる今日の教會と合同するは神と離絕するに均くある、彼等に除外せられて我等は神に

九月十七日(火)半晴　好き秋日和であつた、終日を手紙書と友人訪問に消費した。余の著書を丁抹語に翻譯して之を北歐人に紹介せしマリヤ・ウルフ女史の今年四月十八日に永眠せりとの報知を彼女の親戚に當る某女史より受取つた、余はウルフ女史に負ふ所が多い、近頃デンマルク人某に會ひし時に彼は眞面目に余に告げて言うた「デンマルク國にありては君の名は何の日本人の名よりも善く知られる」と、以て女史が彼國に在りて余の爲に盡し呉れし其度合を知る事が出來る、然るに今や此人亡し、此世は其れ丈け淋しくなつた、同時に又來らんとする神の國が其れ丈け慕はしく成つた。

九月十八日(水)雨後曇　村社の祭禮である、相變らず騷々しくある、我等は喜んで村費を負擔する、然れども宗教的に又道徳的に何の意味も無い神社の祭禮に加はらない、祖先崇拜は善しとして何か意味のある者として貰ひたきものである。此日福島縣本宮町原瀨半次郎氏の訪問を受けた、正直なる正義に勇ましき愛

九月十五日(日)昨夜暴風雨　午前に至て晴る、好き安息日であつた、今井館は來會者を以て溢れた、前回に引續き「羅馬教會の建設者」と題し羅馬書第十六章に就て講じた、講演終へて後に柏木兄弟團の署名式があつた、署名者九十餘名、斯くて我等は內に堅く結び外に強く當らんと欲するのである、新たに教會を作つたのではない積りである、若し兄弟團が教會と化する場合には之を壞ちて他に又新たに愛の兄弟團を起すべきである、主の爲に共働せんための團體である、其他に目的あるに非ず。

九月十六日(月)快晴　愈々秋が來た、天下の秋が來た、輕井澤や日光に在る避暑客にのみ來る秋ではない、神の送り給ひし秋であつて天下萬衆何人にも來る秋である、故に特に快いのである、今より大に讀むべしである、大に書くべしである、又止むを得ざる場合に於ては高壇に上りて語るも辭さない、馬肥え我心も亦肥ゆ、碧空澄み渡りて我心の躍るを覺ゆ。

はざるは低き拙き藝術である、日本にもセルペンテスやアンデルソンの輩の出る必要がある、笑はせながら慰め且つ教ふるの途がある、今や佛國戰場に於て有名なるハリー・ラウダーは彼の得意の可笑歌を以て聯合軍錚々數百萬の頤を解きつゝある、深き澁き基督教の我講演界に入らざるべからざるを感じた。

九月十四日（土）霧　夏が終つた、秋の仕事に取懸らねばならぬ、又元に還つて聖書の研究を始むるのである、演說と講演とは成るべく避くるのである、成るべく深く信じて成るべく靜に働くのである、米國教役者等の流義に循つてワーク、ワーク（働け働け）と言ひて焦心奔走すべきでない、嗚呼忙がしい夏を過した事を悔ゆる、爲すべからざる多くの演說と講演とを爲せしを悔ゆる、余を演壇に引上げんとする友人（？）多くして余に靜かなる時を與へんとする友人尠きを恨む。歸途高崎光明寺に先祖の墓を見舞うた、前住職の遺族の貧困に泣くを見て同情に堪へず僅か斗りの慰安を與へて歸つた。

九月十二日(木)半晴　眞個の休日であつた、朝第一にイザヤ書第十一章にキリスト再臨の時の世界の狀態に就いて讀んだ、次にツライチュケーの戰爭論を讀んだ、彼は曰ふ「戰爭なくして國家あるなし、吾人の知る國家といふ國家はすべて戰爭に由て起りし者なり……戰爭は神に由て定められし制度なり……戰爭を世より絕滅せんとするは無謀なるのみならず甚だ不道德なり」と、斯かる學者の學說に援けられて成りし國家が今の獨逸である、預言者イザヤに學ばずして獨逸の國家學者に聽きて成りし國家は禍ひなる哉。

九月十三日(金)晴　昨夜旅館に三遊亭一座の講談の催あり四十年振りにて之を聽いた、其變らざる能辯に驚いた、然し演題は依然として野卑である、然り不道德である、我國倫理教育三十年の功績として改良の講談師の講談に及ばざりしを悲しむ、勿論娯樂に道德を以てせよと言ふのではない、其無害にして優美たらんことを欲するのである、醜行と不倫とに就て語るにあらざれば人を笑はす能

九月十日(火)晴　九月號雜誌が出た、毎月の通り祈禱を以て之を發送した、まことに不完全なる雜誌である、然れども神は之を完全に用ゐ給ふと信ずる、祈禱を以て書き、祈禱を以て校正し、祈禱を以て發送する、我が機關ではない、「彼」の機關である、「彼」が之を以て「彼」の聖意を讀者に傳へ給ふと信ずる、紙價益々騰貴して次號より頁數を減ぜざるを得ざるを悲しむ、然れども神の言は簡潔である、字數の減少却て善き事であらう、聖靈の指導を要する益々切である。

九月十一日(水)好晴　昨夜遲く山に來た、空氣輕く、谷風凉しく讀書慾頓に增した、ガウソンとツライイチュケーとを讀んだ、前者は聖書を辯護する學者、後者は獨逸帝國を辯護する學者である、而して神を辯護するはたしかに國を辯護するに優さるの事業である、人の作り上げし大國家の草花の枯るゝが如くに亡び行くに比べて神の記し給ひし聖書は無窮に生存する、余はガウソンに傚ひてツライチュケーに學ばざりしを感謝する、「我は永へにヱホバの宮に住まん」である。

教會の建設者」と題し羅馬書十六章一―十六節に就て講した、此大教會の基礎を据えた者は使徒等でなくしてプリスキラ、アクラ等の平信徒であつた、大福音がたしかに此一章の中に傳へられて居る。一方には戰爭の擴大、物價の騰貴に由て人心は益々ザワ〳〵しつゝあるに對して、他の一方に於ては主の再臨を主題とする福音宣傳の爲に同志一同活氣立つて居る、戰爭と福音、まことに善き對照である。

九月九日(月)雨　殆んど全日を手紙書きに消費した、內國人に外國人に、學者に平人に限りなく手紙を書かねばならぬ、然かも大なる喜びであると同時に又善き傳道の機會である、手紙一本葉書一枚決してゆるがせにすべからずである。此日又一人の其妻を失ひし人を見舞うた、又多くの來客に接した、或人は大病院建設計畫に就て、或る他の人は信仰箇條に署名するの可否に就て余の意見を聞く爲に來た、甚だ多忙であつた、然し多少の讀書を爲した、アンダーソン氏著但以理書論を讀んだ。

に左近義弼君夫妻ありて我等は育兒法と玄米食に就て語つた。初めてスコーフィールド編纂對照聖書を讀んだ、實に有益なる書である、今日まで之を手にせざりしを悔いた、此書に教へられて終日「ユダヤ人の王なるイエス」に就て思うた、馬太傳は預言者等の預言せるユダヤ人の王として生れ給へるイエスの傳記として見て最も明瞭に解することが出來ることが解つて感謝した。

九月七日（土）晴　家の主婦を青年に送らせて山に遣つた、彼女に暫時の休養を與へんためである、日本婦人に取りては夏は冬の準備のために多忙である、「彼女は家人のために雪を恐れず」と箴言三十一章にあるが如しである、彼女が暑中に怠けて家人一同雪を恐れざるを得ない、而して冬と雪とに對する準備既に成りたれば我等は強て彼女を山に遣りて彼女に暫時の休養を取らしめたのである、人の山を去りたる頃ならでは山に行く能はざる我等は實に福ひである。

九月八日（日）晴　殘暑猶ほ強し、然し來會者多く、善き集會であつた、「羅馬

彼地に於ける多くの教友が余を迎ふる心を以て彼を迎へられしを聞いて感謝に堪へない。彼は實に幸運兒である。終日信仰の生涯に就て考へた、我が義たり聖たる所のイエスを信ずる事是れ我が事業である、故に病床に臥する時も炎熱に苦しむ時も我が事業に從事する事が出來る、即ちイエスを信ずる事が出來る、我は今日の教會の事業事業と叫ぶ其信仰に服する事は能ない。蘇格蘭土の大思想家デビッド・ウルクハート曰く「余に取りては人一人は大宇宙なり」と、One living soul is to me the universe. 實に偉大なる言である、人一人を感化し之を義の人となすは大宇宙を改造する丈けの事業である、到底人力を以て爲す能はず、全能の神のみ能く此事を爲すことが出來る、イエスは能く此事を知り給うた、然るに今日の傳道はいかに？人を塊團として扱ひつゝある、大宇宙を塊團として改造せんとしつゝある、狂か愚か？

九月六日(金)晴　秀英舍に往き雜誌校正を了る、此日五六人の來客あり、內

國組合教會機關雜誌『コングリゲショナリスト』三册を送り來る、孰れも基督再臨反對號である、ユニオン神學校のブラウン博士、エール神學校のC・Rブラウン博士、同ウォールカー博士、孰れも反對の氣焰を吐いて居る、依て知る組合教會は全體に再臨反對なるを、而して是等米國大博士の唱ふる所に日本に於ける反對論者の唱ふる所以外のものに見當らないのである、大博士恐るゝに足らずである。

九月四日（水）晴　秋冷到り讀書力大に増加す。ヒッバート雜誌七月號にツルーベッコイ公の「苦痛の意味」を讀み大に感ずる所があつた、彼は曰ふ「歡喜の極は歡喜の涙である、而して歡喜の涙は苦痛が歡喜に化する時に流る」と、實に爾うである、苦痛を經由せざる歡喜は淺き歡喜である、死別の後に來る再會、それが歡喜の極である、失敗が成功として現はるゝ時に、其時に感謝の涙が零れる、エリエリラマサバクタニの聲を發して後に始めて見神の歡喜がある。

九月五日（木）晴　家の青年が滿洲旅行を終へて歸り其語る所を聞いて喜んだ、

十三節に取つた、「汝來る時我がトロアスにてカルポの所に遺しゝ外衣を携へ來れ」と老使徒は其弟子に書き贈つて言うた、パウロの最期の狀態を想ひやりて同情の涙禁じ得なかつた、青年時代に讀みしカノン・フハラーの保羅傳が今に至りて余に用を爲したのである。若し使徒パウロが今生きて居たならば彼は毎年輕井澤に於て避暑するであらう乎と思うた。

九月二日(月)晴　久し振りにて市中に行いた、汗と埃と厭氣に塗れて歸て來た。瑞西の學者ガウソンの舊著 Theopneustia を讀み始めた、大に教へらるゝ所がある、偉大なる哉瑞西國、余は此小共和國に負ふ所甚大である、余の青年時代を天然に導きし者はルイ・アガシとアーノルド・ギヨーであつた、彼等兩人乍ら瑞西人であつた、而して余が瑞西の聖書學者ゴーデーに負ふ所多きは人の能く知る所である、カルビンを迎へし瑞西は永久に惠まれよかしである。

九月三日(火)晴　暑氣猶ほ強し、雜誌校正最中である、在紐育の友人より米

こと頻く、其一生を此國の爲に盡さんとて再び來朝せられたのである、活潑なる、正直なる、殊に又熱心なるキリスト再臨の信者なる事を見受けた、我等は初めて會して舊き友人であるかの如くに感じた、我等は引つ續きに三時間語つて尙ほ時足らず思うた、余は神が此時に斯かる宣教師を再び日本に送り給ひし事を感謝した、余を知らざる宣教師等は余は宣教師の敵であると云ふ、然しそれは大なる謬(あやまり)である、余は宣教師の内に善き友人を有つた、又今尙ほ有つて居る、余は信ず英米の宣教師にして日本武士の心を解し得る者の甚だ稀れなる事を、彼等の多くは唯 yes, yes,(イエースく) と言はれんことを好んで、時たま大膽に No! と言ひ得る人があれば、其人は粗暴なる人である乎の如くに思ふ、余も亦キリストの僕(しもべ)である、故に正直なる公平なる謙遜なる忠實なる人は、宣教師と雖も衷心より之を敬愛せざるを得ない。

九月一日(日)晴　此日久し振りにて柏木に於て講義した、題をテモテ後書四章

にする記者の苦心推察すべしである、而して余は飽くまでも書く事を第一にして語る事を第二又は第三にする者である。

八月二十九日（木）晴　殘暑を冒して原稿製作を續けた、實に辛らい事である、是れ皆な北海道並に輕井澤の祟であると思へば止むを得ない、幸にして藤井武の大に余を援くるあり、斯る場合に彼なかりせば『聖書之研究』は出ないのである、主筆も讀者も深く彼に感謝せざるを得ない。

八月三十日（金）暴風雨　夜に入りて晴る、漸くさつと原稿を書き上げた、聊か安心した、午後京都青木庄藏君の來訪あり、夜有志の同君歡迎會が今井館に於て開かれた、青木君は君が再臨運動に加はるに至りし理由並に徑路に就て語られ、一同君に和し、關東關西の同信の友今より力を協して働くべき事に就て語つた。

八月三十一日（土）晴　午後山室軍平氏の紹介に由り宮城女學校前校長にして一時歸國中なりしS・L・ワイドナー女史の訪問を受けた、彼女は日本國を愛する

歸り、ボストンかヒラデルヒヤに居つたやうな心持がした、而して余は再び洋行は爲ない積りであるから四五年に一度位ゐ輕井澤に行いて外國人の生活に親しむのも惡くはあるまいと思うた、然し一日三度の洋食と寢床と英語とは余の耐へ得ない所である、余はやはり日本と日本人の生活とを愛する。夜八時半頃柏木の純日本式の家に歸つた。

八月二十七日（火）晴　「洋行中」に屆きし手紙を處分した、隨分の仕事である、四日間の不在が其前後の仕事にさし響くこと尠くない、而して雜誌の原稿〆切りが目前に逼つて居るのである、氣が氣でない、「洋行」はする者でない。

八月二十八日（水）晴　一生懸命で原稿に取掛つた、然し熱くつて思ふやうに書けない、演說は執筆には甚だ毒である、然るに今の傳道たるや主として語る事であるが故に書く事に同情を持つて居る人は滅多にない、大抵の傳道師は働く事と云へば語る事であると思うて書く事の苦勞を知らない、斯かる人等と傳道を共

信仰日記

一名 日々の生涯

内村鑑三著

一日は一生である、善き一生があるが如くに善き一日がある、惡き一生があるが如くに惡き一日がある、一日を短き一生と見て之をゆるがせにしてはならない事が解る。

一九一八年

八月二十六日(月)晴　此日まで輕井澤ピヤソン氏方に居つた、午前二三の米國宣教師を訪問し午後二時の汽車で歸途に就いた、何だか一寸洋行したやうに感じた、洋食を食ひ、英語で話し、英語で演說まで爲して何んだか三十年前の昔に

涯の記錄として多少見るに足るべきものがあらう、勿論余は自己の生涯に就て誇らない、然り誇り得ない、唯日々の生涯の事實有の儘を記した、而して若し其有の儘が何か眞理を世に傳ふるならば此書の存在の理由があるのである、若し無いならば自から消滅すると信ずる。

附錄の『歌こゝろ』は歌人ならざる者の歌集である、歌の術ではない其心である、「何でもない者」が「何でもない者」を慰め又は勵さんとて作つたものである、其心して讀まれんことを望む。

一九一九年十一月十日

東京市外柏木に於て

內村鑑三

『信仰日記』に附する自序

西洋に或る小説家があつて彼が Life of Nobody(何でもなき人の一生)と云ふ書を著はしたことがある、彼は之に由りて人の一生は何人のそれと雖も意味の無いものでは無い事を表明さんとしたのである、實に人生其物が小説以上の小説である、深く之を究めて人生有の儘に勝る面白き記事はない、歴史と傳記、殊に自叙傳……詩も歌も、戯曲も小説も其興味は之に及ばないのである。

余が茲に綴りしものは一箇年間に渉る余の生涯の記録である、平々凡々の記事であつて別に讀者の血を沸すが如きものではない、然し僞りの記事で無い事だけは保證する、日本人にして基督教を信じ、教會又は宣教師と何等の關係を有せずして傳道に從事する者の一箇年間の生

内村鑑三著

信仰日記

附歌こゝろ

東京 岩波書店刊行

GRADUATE THEOLOGICAL UNION
LIBRARY
1962

神壕藏書

内村鑑三著

信仰日記

附 歌ごゝろ

岩波書店發行